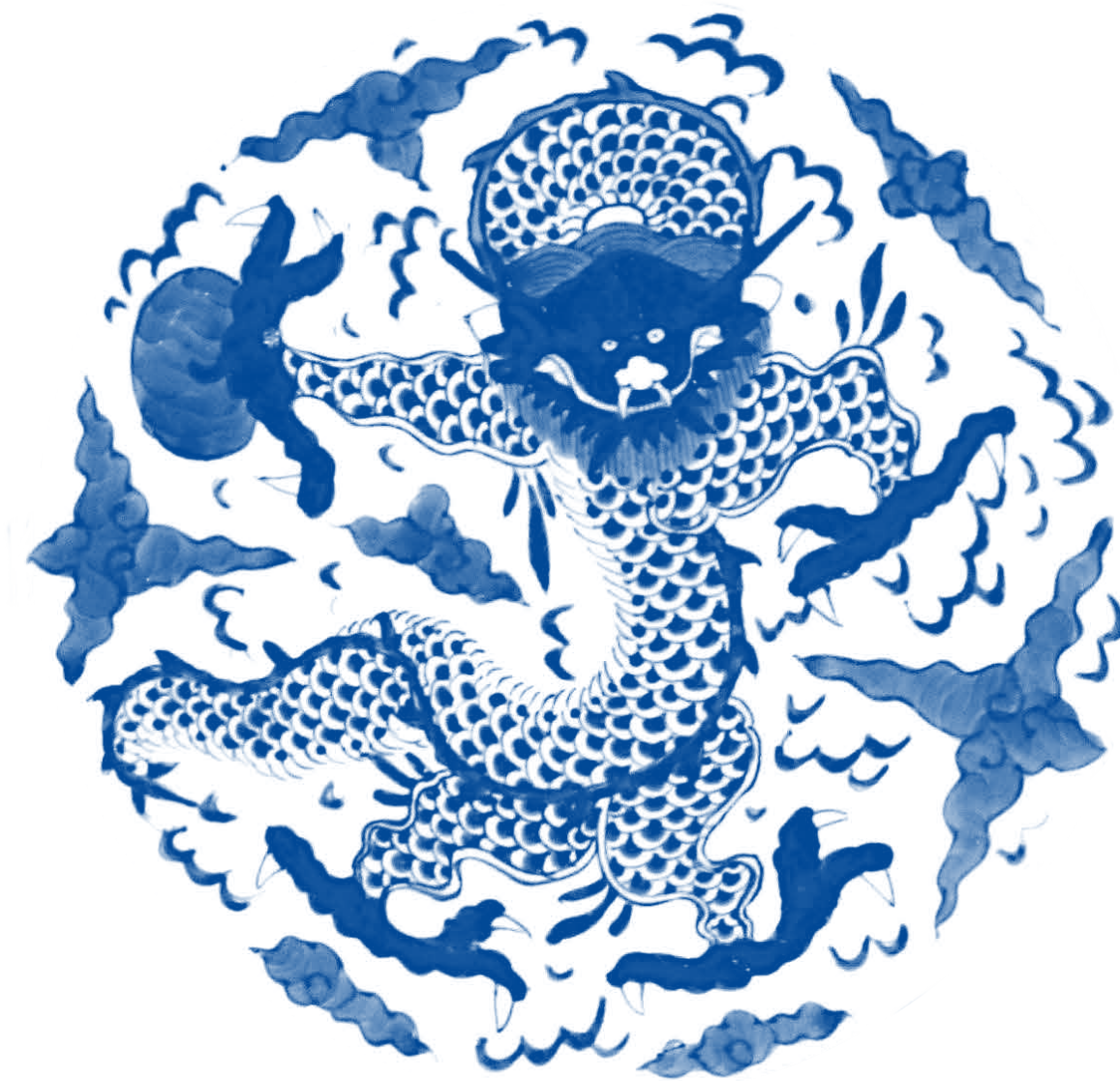


# 近世日本国家領域境界域における 物資流通の比較考古学的研究

平成24～26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書  
(課題番号:24520860)



平成27年3月

研究代表者：渡辺 芳郎  
鹿児島大学法文学部 教授



# 近世日本国家領域境界域における 物資流通の比較考古学的研究

平成24～26年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書  
（課題番号：24520860）

平成27年3月

研究代表者：渡辺 芳郎  
鹿児島大学法文学部 教授

## 例 言

1. 本書は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））の交付を受けた研究の成果を示す報告書である。研究課題、期間、組織、交付額は以下の通りである。

研究課題：近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究（課題番号：24520860）

研究組織

研究代表者：渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部教授）

研究分担者：池田榮史（琉球大学法文学部教授）

関根達人（弘前大学人文学部教授）

交付決定額

	直接経費	間接経費	合計
平成24年度	1000千円	300千円	1300千円
平成25年度	1800千円	540千円	2340千円
平成26年度	1300千円	390千円	1690千円
総計	4100千円	1230千円	5330千円

2. 本研究に関してはこれまで以下の成果を発表している。

【論文等】

渡辺芳郎2014a「鹿児島県三島村踏査報告」『鹿大史学』61号 pp.15-40 鹿大史学会

渡辺芳郎2014b「鹿児島県三島・十島における明治中期の物資流通について－笹森儀助『拾島状況録』を中心として－」『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』80号 pp.27-39 鹿児島大学法文学部

【学会発表等】

渡辺芳郎「鹿児島県三島村踏査報告」第60回鹿大史学会大会（於 鹿児島大学）2013年7月6日

渡辺芳郎「南西諸島における近世陶磁器の流通－三島・十島における考古学的踏査から－」鹿児島大学国際島嶼教育研究センター第148回研究会（於 鹿児島大学）2014年4月21日

渡辺芳郎「南西諸島域における近世陶磁器流通」シンポジウム「近世日本の南と北－考古学資料からみた近世国家境界域－」（於 鹿児島大学）2014年10月25日

池田榮史「考古学資料からみる近世琉球の流通と消費」同上

関根達人「アイヌ社会における日本製品の考古学的痕跡」同上

3. 本報告書の執筆分担は以下の通りである。

第5章2節：鼎丈太郎（瀬戸内町教育委員会）

第6章：池田榮史（琉球大学法文学部）

第7章：関根達人（弘前大学人文学部）

他は渡辺芳郎が執筆した。

なお第3章と第8章は上掲の渡辺2014a・bを大幅に加筆修正し、再構成したものである。

4. 本報告書の編集は渡辺が行った。

5. 資料整理・報告書作成にあたっては、鹿児島大学法文学部人文学科考古学研究室ならびに鹿児島大学埋蔵文化財調査センターのご協力を得た。

6. 表紙と裏表紙のデザインは、瀬戸内町立図書館・郷土館保管資料を、同館の許可を得て用いている。

7. 巻末の英文要旨の作成にはSteve Cother先生（鹿児島大学法文学部）のご協力を得た。

8. 本研究に関わる採集資料ならびに報告書関係書類は鹿児島大学法文学部人文学科物質文化論研究室で保管している。

# 目 次

第1章 研究の目的	1
第2章 研究の概要	3
<報告編 I >	
第3章 三島における調査報告	8
1. 三島の概要	8
2. 三島における考古学的調査研究	9
3. 調査の概要	9
4. 調査成果	9
5. まとめ	16
第4章 十島における調査報告	27
1. 十島の概要	27
2. 十島における考古学的調査研究	27
3. 調査の概要	28
4. 調査成果	29
5. まとめ	38
<報告編 II >	
第5章 瀬戸内町立図書館・郷土館保管の旧家伝来陶磁器調査報告	66
1. 調査の目的と概要	66
2. 西家・武家について	66
3. 西家伝来陶磁器に関する報告	67
4. 武家伝来陶磁器に関する報告	71
5. まとめ	72
<考察編>	
第6章 池田榮史「考古学資料からみる近世琉球の流通と消費」	106
第7章 関根達人「アイヌ社会における日本製品の考古学的痕跡」	117
第8章 渡辺芳郎「南西諸島域における近世陶磁器流通」	126
第9章 総括	138
参考引用文献	140
英文要旨	143

## 挿図目次

<b>第1章</b>	
図1-1	日本近世国家境界域概念図と本研究の目的……………1
<b>第2章</b>	
図2-1	シンポジウムポスター……………5
<b>第3章</b>	
図3-1	関係地図……………8
図3-2	『元禄国絵図』『薩摩国』『大隅国』航路模式図……………8
図3-3	竹島採集地点……………10
図3-4	硫黄島採集地点……………12
図3-5	黒島片泊採集地点……………14
図3-6	黒島大里採集地点……………15
図3-7	三島採集資料実測図(1)……………19
図3-8	三島採集資料実測図(2)……………20
図3-9	三島採集資料実測図(3)……………21
図3-10	三島採集資料実測図(4)……………22
<b>第4章</b>	
図4-1	口之島採集地点……………30
図4-2	中之島採集地点……………32
図4-3	諏訪之瀬島採集地点……………34
図4-4	悪石島採集地点……………36
図4-5	宝島採集地点……………37
図4-6	口之島採集資料実測図(1)……………42
図4-7	口之島採集資料実測図(2)……………43
図4-8	中之島採集資料実測図……………44
図4-9	平島採集資料実測図(1)……………45
図4-10	平島採集資料実測図(2)・ 悪石島採集資料実測図(51~57)……………46
図4-11	宝島採集資料実測図(1)……………47
図4-12	宝島採集資料実測図(2)……………48
<b>第6章</b>	
図6-1	琉球・沖縄史の時代区分(高良1980より)……………107
図6-2	昭和期の首里城復元図(「首里城跡」『沖縄文化財調査報告書』第88集1988より引用)……………110
図6-3	嘉手納宗徳による『首里古地図』(1700年代製作)を下にした復元(沖縄県教育委員会1985より引用)……………113
<b>第7章</b>	
図7-1	アイヌ社会に受容された日本製品の例……………118
図7-2	「幕末蝦夷地3点セット(甕・徳利・三平皿)」とその生産地……………120
図7-3	アイヌの物質文化にみられる本来のコンテキストとは異なる使用例(1)……………123
図7-4	アイヌの物質文化にみられる本来のコンテキストとは異なる使用例(2)……………124
<b>第8章</b>	
図8-1	切石遺跡の陶磁器出土状況および組物と推測される近世陶磁器(大橋・山田1995より)……………135
図8-2	近世三島・十島における陶磁器の入手目的・方法・ルート……………136
図8-3	島嶼における物資流通模式図……………137

## 表目次

<b>第3章</b>	
表3-1	竹島採集資料一覧……………10
表3-2	硫黄島採集資料一覧……………11
表3-3	黒島片泊採集資料一覧……………14
表3-4	黒島大里採集資料一覧……………15
表3-5	三島における主な採集資料……………16
<b>第4章</b>	
表4-1	口之島採集資料一覧……………29
表4-2	中之島採集資料一覧……………31
表4-3	臥蛇島伝来の近世陶磁器……………33
表4-4	諏訪之瀬島採集資料一覧……………34
表4-5	悪石島採集資料一覧……………35
表4-6	宝島採集資料一覧……………37
表4-7	十島における主な採集資料……………38
<b>第5章</b>	
表5-1	西家伝来資料の概要……………67
表5-2	西家伝来磁器の概要……………68
表5-3	西家伝来陶器の概要……………69
表5-4	西家伝来陶磁器の時期と産地……………70
<b>第6章</b>	
表6-1	進貢貿易による福州から琉球への輸入品(真栄平2003より)……………108
<b>第8章</b>	
表8-1	笹森儀助の視察行程……………128
表8-2	『拾島状況録』における物資流通関係記事抜粋……………129
表8-3	明治16年(1883)の鑑幣売却の「見返品」……………131
表8-4	中之島をめぐる公用船の往来(1864-66年)……………133

## 写真目次

<b>第3章</b>	
写3-1	竹島・硫黄島採集資料……………23
写3-2	硫黄島採集資料……………24
写3-3	黒島片泊採集資料……………25
写3-4	黒島大里採集資料……………26
<b>第4章</b>	
写4-1	中之島「島中どん」……………40
写4-2	宝島・地点6……………40
写4-3	口之島採集資料(1)……………49
写4-4	口之島採集資料(2)……………50
写4-5	中之島採集資料(1)……………51
写4-6	中之島採集資料(2)・ 諏訪之瀬島採集資料(No.42~44)……………52
写4-7	臥蛇島伝来の近世陶磁器(1)……………53
写4-8	臥蛇島伝来の近世陶磁器(2)……………54
写4-9	臥蛇島伝来の近世陶磁器(3)……………55
写4-10	臥蛇島伝来の近世陶磁器(4)……………56
写4-11	臥蛇島伝来の近世陶磁器(5)……………57
写4-12	臥蛇島伝来の近世陶磁器(6)……………58
写4-13	平島採集資料(1)……………59
写4-14	平島採集資料(2)……………60
写4-15	悪石島採集資料……………61
写4-16	宝島採集資料(1)……………62
写4-17	宝島採集資料(2)……………63
<b>第5章</b>	
写5-1	調査風景……………73

# 第1章 研究の目的

薩南諸島から奄美・沖縄諸島にかけての南西諸島域と東北地方から北海道にかけての地域は、ともに「日本」という領域が形成されていく過程で「境界域」として以前より注目を集めている。とくに近年では古代・中世に関しては、それぞれの地域での調査研究の進展とそれに基づく比較研究が盛んに行われている（加藤他編2008、クライナー他編2010など）。一方、近世の国家領域の境界は、中世までの「ボーダーゾーン」としてのそれよりも明確になりつつも、近代以後のように明確な「ライン」として設定されるまでには至っていない。琉球は、薩摩藩を通じて幕藩体制下に組み込まれる一方で、中国（明・清）からの冊封を受けた「二重体制」であり、また松前と北海道のアイヌ民族との関係は、定期的に流動性を持っている。つまり両者は「境界」というより「境界域」と呼べる。

このような境界域は、古くより物資流通が盛んであり、それぞれの特産物などが境界域を介して取引される。境界域を形成する相互地域の異質性が交易活動を活発化させるとも言える。薩摩－琉球間では、「唐物薬種」や清朝磁器などが取引され、またその代価として昆布などが輸出された。北海道においてもアイヌ民族との間で俵物や昆布など北海産産物の加工品が取引された。また山丹交易を通じて中国清朝の物産などが輸入されていた。

この二地域の近世考古学的研究は、近年、関根達人による北海道の「内国化」をめぐる研究（関根2014）や瀬川拓郎（2007・2011）などにより進められている。一方、筆者は鹿児島－沖縄における近世陶磁器の流通と生産技術の伝播について研究を進め（渡辺2004b）、池田榮史も沖縄側から沖縄陶器生産の具体相の解明を進めている（池田2011）。ただし鹿児島本土、奄美諸島、沖縄諸島では調査研究が進んでいるが、これらの地域をつなぐトカラ列島に関しては、民俗調査が盛んであり（下野2009など）、近年文献史研究においても注目されているが（高良編2004など）、近世考古学に関しては諏訪之瀬島切石遺跡の発掘調査（熊本大学考古学研究室編1994）が行われた程度にとどまり、ほとんど着手されていない。またふたつの「境界域」の比較についても、古代・中世に比べ、低調なのが現状である。

本研究では、これら二つの境界域の特殊な様相を、考古学的資料（陶磁器など）を手がかりとして解明していくとともに、両者を比較検討することで、近世国家領域境界域における物資流通の特質を明らかにすることを目的とした（図1-1）。

本研究では、まず検討対象地域において流通した物質文化の検討を目的とするが、その場合、考古学資料として残りがよく、また生産地と消費地とを結びつけやすい、つまり交易ルートを把握しやすい陶磁器が主たる対象となる。とくに南西諸島の

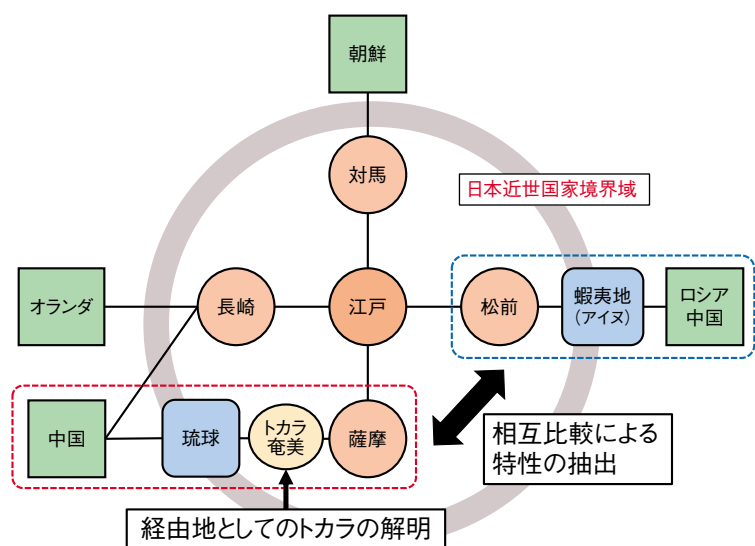


図1-1 日本近世国家境界域概念図と本研究の目的

トカラ列島では、これまで近世考古学に関する本格的なサーベイが実施されておらず、基礎資料に欠くことから、本研究では、三島村・十島村における有人島の踏査を実施し、各島の基本資料の整備を調査の主眼に置いた。さらに奄美諸島域についても、これまであまり取り上げられることのなかった近世資料を調査することでデータ化をはかった。

それらと並行して、鹿児島－沖縄および東北－北海道における物資流通の調査研究を進め、それぞれの地域における時期的・地域的特徴を抽出することで、二つの境界域における物資流通の具体相を把握する。そして各具体相の比較を行うことで、両地域間の共通性と相違点を明らかにし、近世国家領域境界域における物資流通の様相を考古学的に理解することを目的としている。



## 第2章 研究の概要

### 平成24年度

#### ① 鹿児島県鹿児島郡三島村（竹島・硫黄島・黒島）の調査

調査期間：2012年8月6日（月）～13日（月）

竹 島：8月6・7日

硫黄島：8月7～9日

黒 島：8月9～13日

調査参加者：渡辺芳郎、恵島瑛子・松崎大輔（鹿児島大学大学院人文社会科学研究所、当時）

調査協力：三島村教育委員会

#### ② 沖縄研究会

2012年12月14日（金）～16日（日）

参加者：渡辺芳郎・池田榮史・関根達人

12月14日（金）沖縄県立埋蔵文化財センター（首里城跡出土資料等の調査）

12月15日（土）沖縄県立博物館・首里城跡

研究打ち合わせ（琉球大学）

参加者：渡辺、池田、関根、後藤雅彦（琉球大学）、

新垣力（沖縄県立埋蔵文化財センター）、倉成多郎（那覇市立壺屋焼物博物館）

関根達人「サハリン出土の日本系遺物」

渡辺芳郎「鹿児島県三島村踏査報告－南西諸島における中近世の陶磁器流通－」

池田榮史「考古学からみた近世沖縄の物資流通（予察）」

12月16日（日）那覇市立壺屋焼物博物館・那覇市内の近世関係遺跡巡見（崇元寺跡・長虹堤跡・新修美栄橋碑・長寿之宮・天妃宮跡・薩摩藩在番奉行所跡・御蔵城跡・三重城跡・波之上神社・亀甲墓など）

### 平成25年度

#### ① 鹿児島県鹿児島郡十島村（口之島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島）の調査

十島村臥蛇島伝来陶磁器の調査（中之島十島村歴史民俗資料館所蔵資料）

十島村諏訪之瀬島切石遺跡採集資料の調査（同上）

十島村諏訪之瀬島伝来陶磁器の調査（諏訪之瀬島諏訪瀬小中学校所蔵資料）

調査期間：2013年8月9日（金）～17日（土）

悪石島：8月10日

諏訪之瀬島：8月11・12日

宝 島：8月13日

中之島：8月14～16日

調査参加者：渡辺芳郎、松崎大嗣、印南早織（鹿児島大学法文学部）

調査協力：十島村教育委員会

## ② 北海道研究会

2013年10月25日（金）～28日（月）

参 加 者：渡辺芳郎・池田榮史・関根達人

10月25日（金）

五稜郭・箱館奉行所見学

10月26日（土）

厚沢部町教育委員会（石井淳平氏）：館城跡出土資料調査

江差町郷土資料館（宮原浩氏・藤島一巳氏）：江差港内引き揚げ資料・展示資料調査

江差町開陽丸資料館：開陽丸引き揚げ資料調査

上ノ国町教育委員会（塚田直哉氏）：勝山館跡見学、勝山館跡出土資料・上ノ国港内引き揚げ資料・上ノ国市街地出土資料調査

10月27日（日）

上ノ国町洲崎館跡・花沢館跡・比石館跡見学

松前町教育委員会（佐藤雄生氏）：福山（松前）城跡・城下町遺跡出土資料調査

松前城跡、松前町郷土館、松前町寺町地区見学・踏査

10月28日（月）

茂別館跡見学

北斗市教育委員会（森靖裕氏）：矢不來館跡出土資料・戸切地陣屋跡出土資料調査

函館山外国人墓地見学

## ③ 奄美瀬戸内町立図書館・郷土館所蔵の西家・武家伝来陶磁器資料の調査

調 査 期 間：

予備調査：2013年9月12日（金）～14日（日）

本 調 査：2013年11月14日（木）～17日（日）

調 査 参 加 者：

予備調査：渡辺芳郎

本 調 査：渡辺芳郎、真邊彩（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科、当時）

調 査 協 力：瀬戸内町立図書館・郷土館（鼎丈太郎氏・鼎さつき氏）

## 平成26年度

### ① 鹿児島県鹿児島郡十島村口之島の調査

調 査 期 間：2014年8月13日（水）～15日（金）

調 査 参 加 者：渡辺芳郎、松崎大嗣、田畑春菜（鹿児島大学法文学部）

調 査 協 力：十島村教育委員会

### ② 鹿児島研究会・シンポジウム

2014年10月24日（金）～27日（月）

参 加 者：渡辺芳郎・池田榮史・関根達人

10月24日（金）

鹿児島県立埋蔵文化財センター（関明恵氏）：鹿児島城本丸跡・二之丸跡、垂水・宮之城島津家屋敷跡、浜町遺跡、梅城跡G調査区出土の近世陶磁器資料の調査

10月25日（土）

シンポジウム「近世日本の南と北－考古学資料から見た近世国家境界域」（於 鹿児島大学郡元キャンパス理学部1号館104号室）

パネラーおよび発表題目

池田榮史「考古学資料からみる近世琉球の流通と消費」

関根達人「アイヌ社会における日本製品の考古学的痕跡」

渡辺芳郎「南西諸島域における近世陶磁器流通」

参加者：約40名

10月26日（日）

島津家墓所・興国寺墓地調査（鹿児島市教育委員会・藤井大祐氏）

始良市歴史民俗資料館、同市加治木郷土館において資料調査

10月27日（月）

苗代川窯跡群（日置市美山）調査

鹿児島県立歴史資料センター黎明館において資料調査（学芸員・中原一成氏）

### ③ 報告書作成

本報告書。2015年3月刊行。



図2-1 シンポジウムポスター



報告編

I

三島・十島における  
調査成果報告

### 第3章 三島における調査報告

#### 1. 三島の概要 (図3-1)

三島村は、薩摩半島南端の長崎鼻から南南西約40kmの位置にある竹島・硫黄島、坊ノ岬から南西約50kmに位置する黒島の三島および無人の新硫黄島や数ヶ所の岩礁よりなり、南西諸島の最北部に位置している。竹島と硫黄島は約7300年前に噴火した鬼界カルデラの北西縁にあたり、黒島は旧期琉球火山岩帯に属している(三島村誌編纂委員会編1990『三島村誌』p.1、以下『村誌』と略称)。

現在の三島への航路は、鹿児島港を発した「フェリーみしま」が、竹島港、硫黄島港、黒島大里港を経て、同島片泊港に至り、同港から往路と同じ航路で鹿児島港に戻る。元禄期に作成された『元禄国絵図』<sup>(1)</sup>よれば、薩摩半島南端の「山川湊」より「竹島」へ(十三里)、同じく「山川湊」から「硫黄島」へ(十八里)、「竹島」から「硫黄島」へ(三里)、「硫黄島」から「黒島(大里)」へ(十里)という4本の航路が描かれている(図3-2)。現在の竹島では島の北側の竹島港

を利用しているが、国絵図では島の南側の籠港こもりが利用されている。また山川湊から竹島を経て硫黄島へ行く航路と、硫黄島に直行するふたつの航路が描かれているのは、硫黄島に三島全体を支配する「硫黄島在番」が置かれていたことと関係するのであろう。近世三島は、「地頭兼御船奉行」の支配下にあり、硫黄島に「硫黄島在番」が置かれ、それぞれ「竹島庄屋」「硫黄島庄屋」「黒島庄屋」が置かれた。「黒島庄屋」はさらに「大里庄屋」「片泊庄屋」に分かれている。また各庄屋の下には「横目」「名主」「名頭」がいる(松永1972 p.130)。

明治以後、現在の三島村・十島村を含めた「十島村」として川辺郡に属したが、明治22年(1889)に大島郡となる。太平洋戦争後、現在の十島村(下七島)がアメリカの行政管理下に入り、下七島復帰後も統合せず鹿児島郡三島村として現在に至る(『村誌』p.327-328)。



図3-1 関係地図

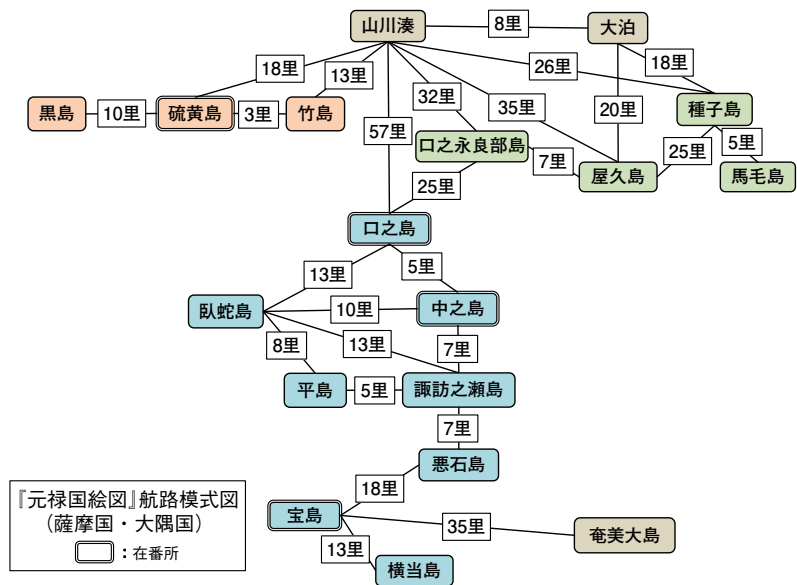


図3-2 『元禄国絵図』「薩摩国」「大隅国」航路模式図

## 2. 三島における考古学的調査研究

三島村における考古学的調査の嚆矢としては、1972年に松永守道が『三島村秘史』中の「三島の夜明け」において、採集された石斧などを報告している（松永1972 pp.26-33）。また鹿児島大学法文学部考古学研究室による分布調査が実施され、『鹿大考古学会会報』での報告を経て（鹿児島大学法文学部考古学研究室1988a・b）、その成果は『三島村誌』にまとめられる（上村1990）。

その後しばらく考古学的調査は実施されなかったが、2010年代になると、橋口亘や市村高男らによる硫黄島における分布・発掘調査が実施され、その成果が随時報告されるようになった（橋口・若松2011a・b・2013、市村2013など）。また2011年に鹿児島国際大学が黒島・平家ノ城跡を発掘調査している（川宿田・平川2012など）。さらに伊藤慎二は琉球文化圏の北限に関する研究において、三島を含む南西諸島を広くかつ詳細に分布調査している（伊藤2011）。

以上のように、三島における考古学的調査は、約20年間の空白期を経て、近年、ふたたび急速に増加しつつある。しかしこれらの調査研究の多くが、先史・古代・中世をその主たる対象としており、近世に関わる考古学的情報は、伊藤の分布調査報告でわずかに触れられるにとどまり、きわめて僅少であると言わざるを得ない。

## 3. 調査の概要

踏 査 地：鹿児島県鹿児島郡三島村（竹島・硫黄島・黒島）

調 査 期 間：2012年8月6日（月）～13日（月）

竹 島：8月6・7日

硫 黄 島：8月7～9日

黒 島：8月9～13日

調査参加者：渡辺芳郎、恵島瑛子・松崎大輔（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科、当時）

調 査 協 力：三島村教育委員会

踏査地点・採集資料数

	踏査地点数	採集資料数
竹 島	15	89
硫 黄 島	23	153
黒 島 片 泊	11	108
黒 島 大 里	15	57
合 計	64	407

## 4. 調査成果<sup>(2)</sup>

### (1) 竹島（図3-3・表3-1）

竹島は周囲長12.8km、面積4.20㎡を有し、人口は72人である（2013年9月30日現在、以下同）<sup>(3)</sup>。集落は島の中央やや西寄りに位置し、現在の港は島の北西部に所在するが、『元禄国絵図』では島の南西部の籠港に寄港している。

15地点で89点を採集した。遺物は、集落内および周辺でほぼ万遍なく採集できたが、このうち現在の十島村竹島支所・郵便局所在地とその周辺（地点14・15）で中近世の陶磁器の散布密度が濃かった。

表3-1 竹島採集資料一覧

No.	資料数	採集遺物	備考
1	4	苗代川摺鉢口縁1、近世染付1、近現代磁器2	
2	6	近現代磁器5、近現代陶器1	
3	5	苗代川陶器1、沖縄荒焼1、土器1、近現代磁器2	石祠などが所在
4	8	口剥ぎ白磁1、苗代川甕口縁1、沖縄荒焼1、近世染付1、近現代磁器1、土師器1、土器2	
5	3	近現代磁器2、肥前甕胴部片1	
6	3	近現代磁器2、陶器胴部1	
7	1	玉縁口縁白磁片1	
8	1	沖縄荒焼1	道路脇崖面
9	1	中国?白磁片1	井がわの川岸、湧水地点
10	9	近現代磁器9	
11	3	波佐見蛇の目釉剥ぎ染付皿1、近現代磁器2	
12	6	加治木・始良系小皿1、肥前染付1、近現代磁器4(型紙刷2)	
13	1	型紙刷染付皿1	
14	10	染付磁器片6(初期伊万里1)、近現代磁器1、苗代川陶器3	竹島郵便局周辺は散布密度が高い。
15	28	染付磁器10(蛇の目釉剥ぎ皿1、瓶など)、備前摺鉢1、苗代川陶器3(土瓶口縁1など)、沖縄荒焼3、陶器4、土錘1、近現代磁器6	

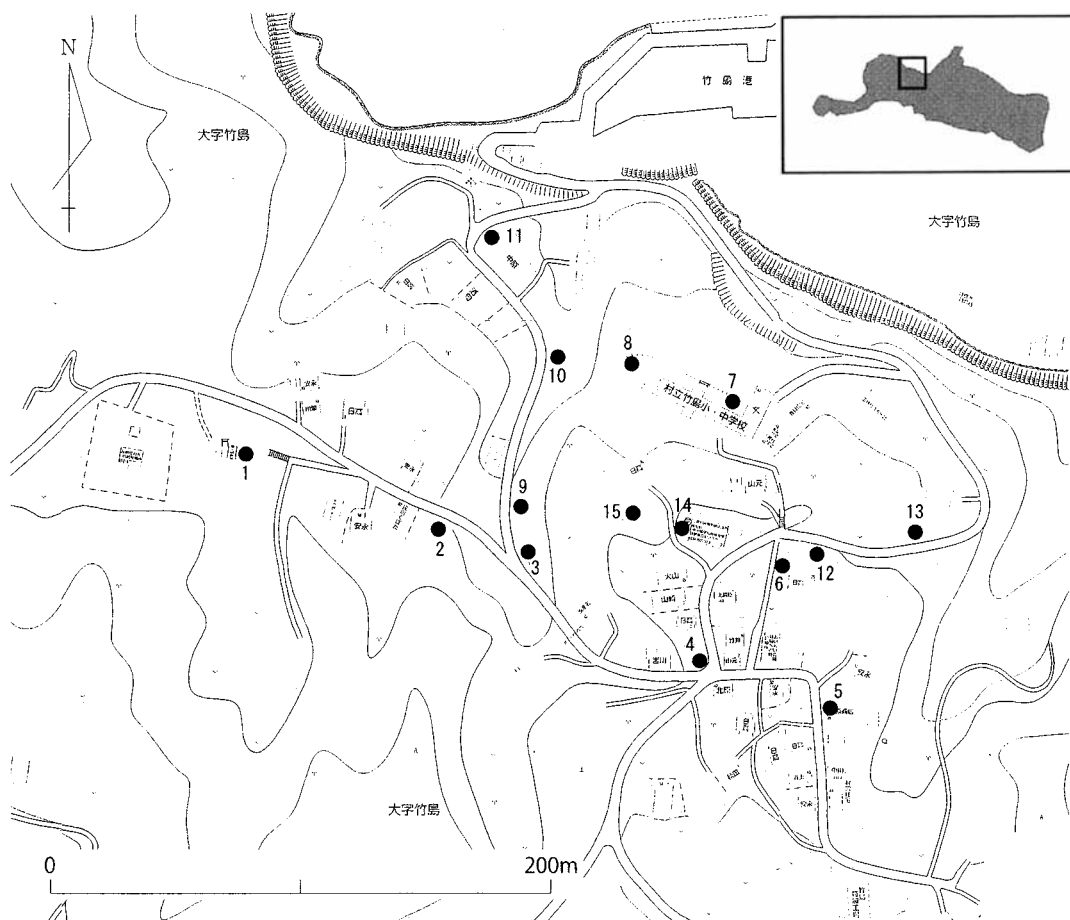


図3-3 竹島採集地点



図3-7-1 (写真3-1-1)は備前産摺鉢の底部片である。7本を1単位とするカキメが2条確認できる。15～16世紀か。3-7-2 (写真3-1-2)は肥前波佐見産の染付格子文磁器皿で、内底は蛇の目釉剥ぎされている。18世紀後半。3-7-3 (写真3-1-3)は薩摩焼加治木・始良系小皿で、底部に糸切り痕(左回転)を残す。3-7-4 (写真3-1-4)は薩摩焼苗代川産の摺鉢口縁である。カキメは確認できないが、外に大きく外反する口縁部とその下の一条突帯は苗代川摺鉢特有の形態である。18世紀代。写真3-1-5は玉縁口縁の白磁である。11世紀後半～12世紀前半。写真3-1-6は口唇部釉剥ぎの白磁で、口縁がわずかに外反する。13世紀後半～14世紀前半。写真3-1-7は草花文(?)を描く初期伊万里の大皿で、17世紀前半。写真3-1-8は薩摩焼苗代川産土瓶の口縁部である。18世紀後半以後。

## (2) 硫黄島 (図3-4・表3-2)

硫黄島は周囲長19.1km、面積11.74㎡を有し、人口は117人である。港と集落は島の西南部に所在し、東部一帯は硫黄を産出する硫黄嶽である。

表3-2 硫黄島採集資料一覧

No.	資料数	採集遺物	備考
1	11	龍門司白化粧土碗片1、苗代川摺鉢1、苗代川陶器片1、陶器片5、近現代磁器片3 (型紙刷2)	
2	45	近世染付磁器片8 (焼成不良碗1、碗1、蓋1、皿2など)、白磁3 (碗、瓶底部など)、近現代磁器12 (徳利底部など)、苗代川摺鉢5、苗代川陶器片7 (甕底部、瓶、土瓶など)、陶器片8、沖縄荒焼2	
3	6	近世染付碗1、白磁碗1、肥前陶器碗1、陶器片3	
4	13	中国青磁片1、中国?白磁片1、近世染付片5 (コンニャク印判1、墨弾き1)、苗代川陶器片2、近現代磁器3、沖縄荒焼2	
5	5	苗代川摺鉢1、龍門司小碗1、薩摩染付磁器?1、近世染付磁器1 (肥前)、沖縄上焼土瓶蓋1	
6	1	中国?白磁片1	
7	15	近世染付磁器片10 (コンニャク五弁花皿、蛇の目釉剥ぎ皿、編み目文瓶など)、中国?青磁1、陶器片4 (内野山銅緑釉)	
8	3	近世染付磁器1、近現代磁器2	
9	15	近世染付磁器片5 (コンニャク五弁花波佐見碗など)、中国青磁片1、白薩摩小杯 (鉄絵千鳥印)1、苗代川陶器片3、陶器片3、沖縄荒焼1、土師器1	付近に苗代川瓶もあり
10	4	近世染付磁器片2、白磁片1、陶器片1	
11	1	中国青花片1 (高台露胎)	
12	1	苗代川土瓶1	
13	3	苗代川土瓶1、苗代川鉢口縁1、肥前陶器1	
14	1	近世染付磁器片1	熊野神社境内
15	1	黒釉陶器片1	
16	1	瀬戸美濃染付磁器碗1	
17	2	青磁片1、苗代川陶器片1	客土の可能性あり
18	1	青花小杯口縁1	
19	1	陶器片1	
20	6	中国青磁 (鎬蓮弁文)1、近世染付磁器片2、近現代磁器染付2、小片1	
21	8	中国青磁片2、近現代磁器2、陶器片4 (苗代川土瓶など)	
22	12	近世染付磁器片1 (コンニャク印判)、中国?白磁片1、近現代磁器片6、陶器片4	
23	1	中国青磁片1 (鎬蓮弁文)	

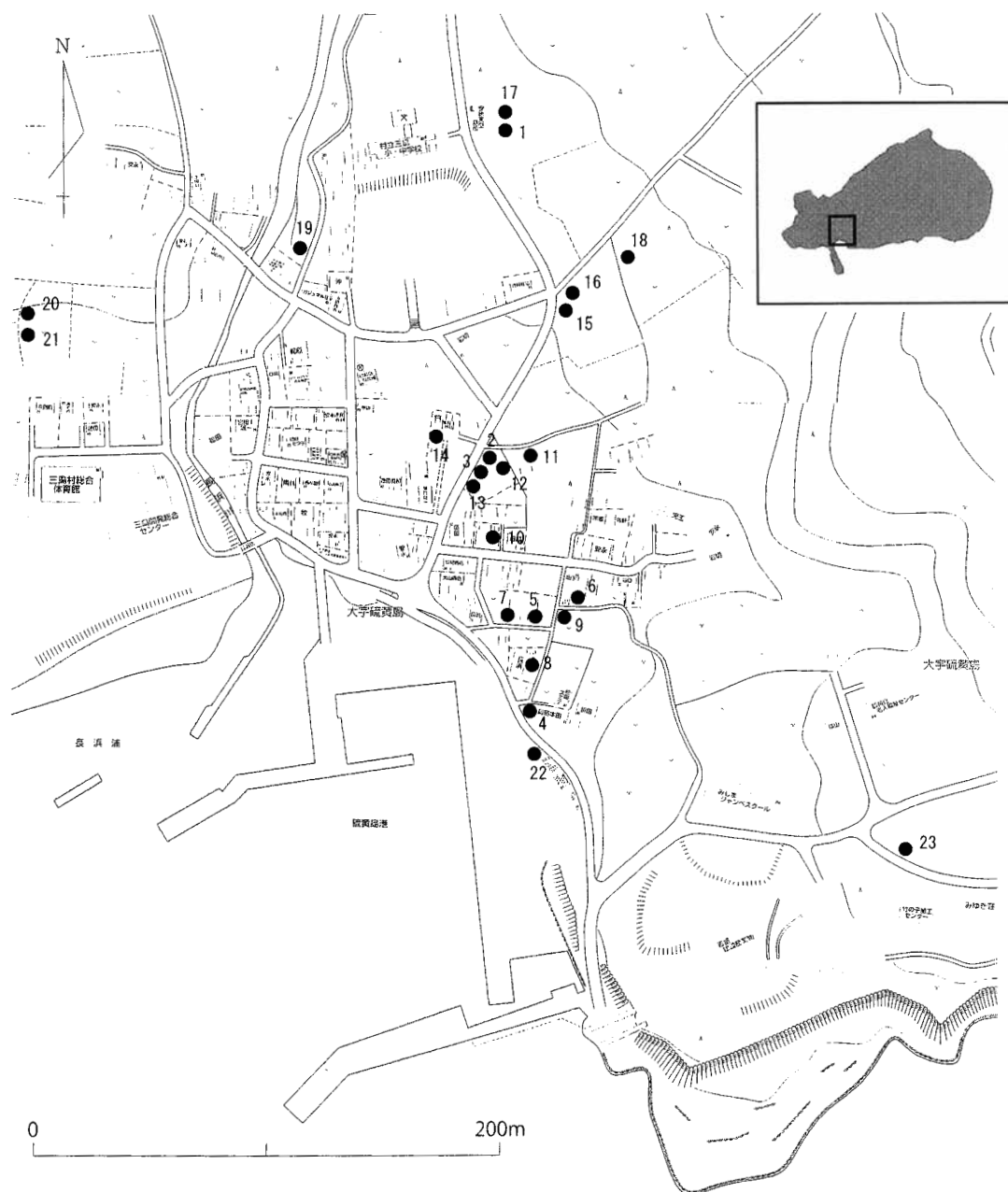


図3-4 硫黄島採集地点

23地点で153点を採集した。遺物は現在の集落の東半分におもに散布しており、とくに熊野神社東側の地点2・3に多数散布していた。現集落の東側が古くからの集落と考えられる。また集落周辺、北部～東部においても採集されたが(地点1・17・20・21など)、客土の可能性が考えられる。それゆえ本来の散布地点ではない可能性があるが、同島にその陶磁器が運び込まれていたことは間違いなからう。

図3-7-5(写真3-1-9)は中国福建・広東産と考えられる粗製の青花底部片で、高台は露胎している。16世紀後半～17世紀前半。図3-7-6(写真3-1-10)は染付端反碗で蝶文を描く。薩摩磁器の可能性もある<sup>(4)</sup>。19世紀中頃。図3-7-7(写真3-1-11)は二次焼成を受けており、釉薬が白濁している。かすかに山水文が見られる染付磁器碗である。19世紀か。図3-7-8(写真3-1-12)は肥前産の広東碗底部で、残

存部に文様は見られないが、染付の可能性もある。18世紀末～19世紀初頭。図3-7-9 (写真3-1-13)は肥前波佐見産の染付磁器丸碗で、内底に二重圏線とコンニャク五弁花文、外底に銘(「青」か)を有する。18世紀後半。図3-8-10 (写真3-1-14)は白磁碗で胴部に縦方向の鐫文を施す。薩摩磁器と思われる、年代は19世紀。図3-8-11 (写真3-2-15)は肥前染付磁器碗で、胴部外面に仙芝祝寿文、内底に一条圏線と簡略化された「寿」字を描く。19世紀。図3-8-12 (写真3-2-16)はやや大振りの陶器碗で、17世紀の肥前産と推測される。図3-8-13 (写真3-2-17)は白薩摩小杯で腰部に鉄絵千鳥印を描く。19世紀か。図3-8-14 (写真3-2-18)は薩摩焼龍門司窯の小碗(杯?)で、白化粧土を施す。高台は露胎しており、外底部はトキン状をなす。18世紀後半以後の量産品である。図3-8-15 (写真3-2-19)は沖縄壺屋の上焼(施釉陶器)の土瓶蓋である。青色が鮮明のことからコバルト使用と考えられ、近代以後の製品である。図3-8-16 (写真3-2-20)は薩摩焼苗代川産の摺鉢で、カキメがやや太く18世紀代と考えられる。図3-8-17 (写真2-21)も苗代川産摺鉢であるが、逆L字口縁と細いカキメから18世紀後半以後の製品と考えられる。図3-9-18 (写真3-2-22)は苗代川産の算盤玉形の土瓶胴部である。18世紀後半以後。図3-9-19 (写真3-2-23)は中国青花磁器の小杯の口縁である。17世紀後半～18世紀前半の景德鎮産である。写真3-2-24は薩摩焼苗代川産の甕の胴部片で、きわめて薄く内面に当て具痕を残す。17世紀代、堂平窯(関・繁昌編2006)の製品と考えられる。写真3-2-25・26は中国龍泉窯産の鐫蓮弁文青磁片である。小片のため年代判定が難しいが、13～14世紀であろうか。写真3-2-27は肥前内野山窯産の銅緑釉碗である。17世紀後半～18世紀前半。このほか図示していないが、地点4において、コンニャク印判を外面に施す肥前産染付磁器片(17世紀末～18世紀前半)を採集している。

### (3) 黒島

黒島は周囲長20.1km、面積15.51㎡を有し、三島ではもっとも大きい。人口は161人である。集落は東北部の大里(人口115人)と、西南部の片泊(人口46人)がある。以下集落ごとに報告する。

#### (3-1) 片泊(図3-5・表3-3)

集落は東西に伸びる道路に沿って形成されている。12地点で108点を採集した。集落一帯で遺物が採集できるが、うち地点7において、小片ではあるが、多数の遺物が採集された。現在の村支所東南に位置する。

図3-9-20 (写真3-3-28)は肥前産の蛇の目釉剥ぎの染付唐草文磁器皿である。18世紀。図3-9-21 (写真3-3-29)は肥前波佐見産の染付磁器碗で、胴部に簡略化した虫籠文、内底に一条圏線と格子文を描く。19世紀中頃。図3-9-22 (写真3-3-30)は肥前産の、いわゆる唐津三彩の大皿(鉢)である。白化粧土で数条の圏線と波文を施し、褐釉と緑釉を流し掛けしている。内底に3ヶ所の砂目が残る。もう1点褐釉のみが確認できる例があり、接合はしないが同一個体と考えられる。17世紀後半。写真3-3-31は白薩摩土瓶の口縁である。写真3-3-32は肥前産陶器の溝縁皿口縁である。17世紀初頭。写真3-3-33は中国龍泉窯の刻線蓮弁文青磁片である。15世紀後半～16世紀。写真3-3-34は肥前産の刷毛目陶器碗である。18世紀前半。写真3-3-35は胴部に釉を削って文様を描く薩摩焼苗代川産の甕である。近代以後の可能性もある。

表3-3 黒島片泊採集資料一覧

No.	資料数	採集遺物	備考
1	28	近世染付磁器片5(蛇の目釉剥ぎ皿など)、白磁片3、近現代磁器12、陶器片8(肥前溝縁皿1)	民家裏
2	4	近世染付磁器片2(蛇の目釉剥ぎ皿など)、陶器片2	平坦地(旧宅地か?)
3	2	近世染付磁器片1、白磁片1	
4	5	近現代染付水注片9(同一個体)、近現代染付皿片4	
5	1	中国青磁片1(刻線蓮弁文)	
6	8	近現代磁器片7(型紙刷染付3)、沖縄荒焼1	
7	54	近世染付磁器片16(肥前、波佐見など)、白磁片7、中国青磁片1、近現代磁器8(型紙刷染付片3)、白薩摩土瓶口縁1、肥前三彩皿2(同一個体)、肥前刷毛目陶器片1、陶器片12	
8	1	近世染付磁器片1(小杯口縁)	
9	1	コバルト型紙染付皿1(蛇の目凹型高台)	
10	2	苗代川甕片2(同一個体か、口縁部と胴部、胴部に釉剥ぎ文様)	
11	2	中国青磁片?2(同一個体、接合)	
12	1	コバルト型紙染付皿1(蛇の目釉剥ぎ)	

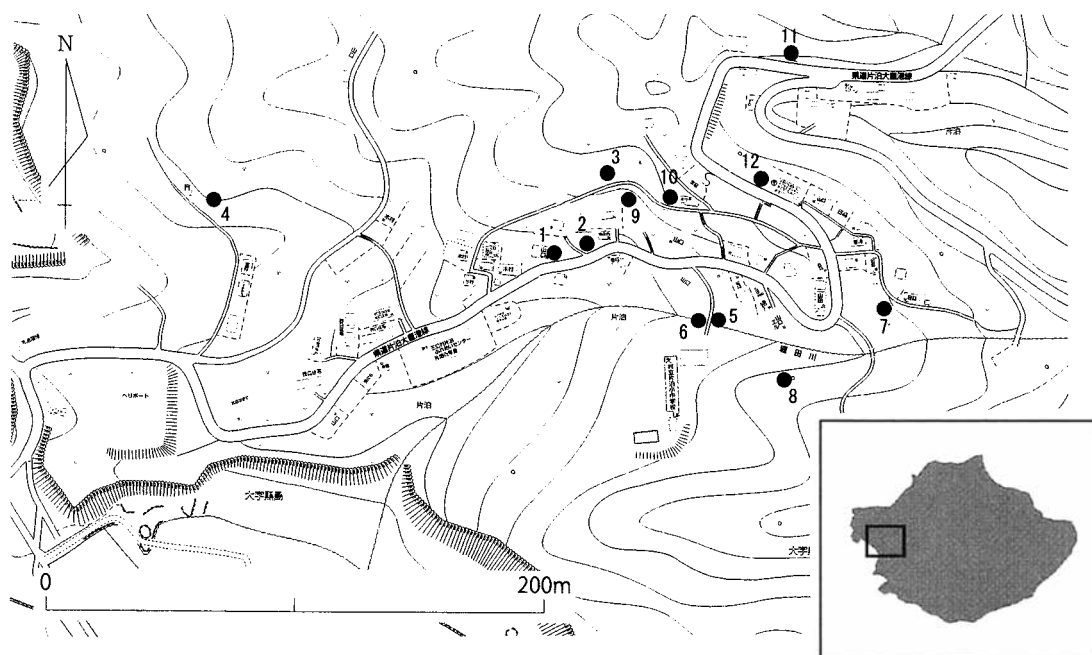


図3-5 黒島片泊採集地点

(3-2) 大里 (図3-6・表3-4)

16地点で57点を採集した。とくに黒尾神社境内ならびに同神社参道脇の畑(地点5・8)において多数採集された。

図3-9-23(写真3-4-36)は高台と内底が露胎の白磁碗で、沖縄で多数出土する、いわゆる今帰仁タイプの中国福建産磁器である。13世紀後半～14世紀前半。図3-9-24・25(写真3-4-37・38)は福建・広東産の粗製の青花磁器である。ともに高台露胎である。16世紀後半～17世紀前半。図3-10-26(写真3-4-39)は中国青花磁器の鉢である。口縁部外面に変形雷文(?), 胴下部に双葉文を描き、内底にも施文が見られる。高台内は露胎である。16世紀後半～17世紀前半。図3-10-27(写真3-4-40)は薩摩焼苗代川産の土瓶の蓋である。18世紀後半以後。図3-10-28(写真3-4-41)は薩摩焼加治木・始良系統の底部で、高台露胎で外底中央がトキン状を呈する。18世紀後半以後。図3-10-29(写真3-4-42)は肥

前産の鉄絵陶器の脚付鉢であるが、脚部は欠損している。17世紀末～18世紀初頭。図3-10-30 (写真3-4-43)は肥前系京焼風陶器の碗で、内底に山水文を描き、高台は露胎である。17世紀後半～18世紀前半。図3-10-31 (写真3-4-44)は薩摩焼苗代川産の甕の口縁部から肩部にかけてである。口縁はT字

表3-4 黒島大里採集資料一覧

No.	資料数	採集遺物	備考
1	6	縄文土器片1、白磁片1、苗代川土瓶片3 (同一個体か)、石器? 1 (加工痕あり)	
2	3	陶器片2 (鉄絵脚付鉢1)、土器片1	
3	2	中国福建青花底部1 (高台内露胎)、中国白磁? 片1	
4	5	中国青磁? 口縁片1、中国白磁底部1 (今帰仁タイプ)、陶器片3 (苗代川口縁1)	
5	8	陶器片2 (花瓶口縁か)、中国福建青花4 (2個体分)、中国青花1、中国青磁片1	黒尾神社境内
6	2	苗代川瓶片1、中国青花片1	
7	5	近世染付磁器片2、青磁片1、陶器片2	
8	13	近世染付磁器片4、近現代磁器3 (型紙刷り2)、陶器片6 (肥前系京焼風陶器碗1、土瓶蓋1、肥前甕胴部片など)	黒尾神社参道
9	8	近現代磁器片2、陶器片3、沖縄荒焼3	
10	2	土師器2	
11	1	苗代川陶器片1 (釉剥ぎ文様)	
12	2	苗代川甕口縁～肩部片1 (二条突帯)、苗代川甕胴部片1	
13	1	中国青磁盤底部片1 (外底鉄釉蛇の目釉剥ぎ)	
14	1	中国青花片1 (蓮弁文)	
15	1	縄文? 土器片1	
16	1	蛇の目釉剥ぎ陶器碗1 (加治木・始良系)	大里小中学校裏手

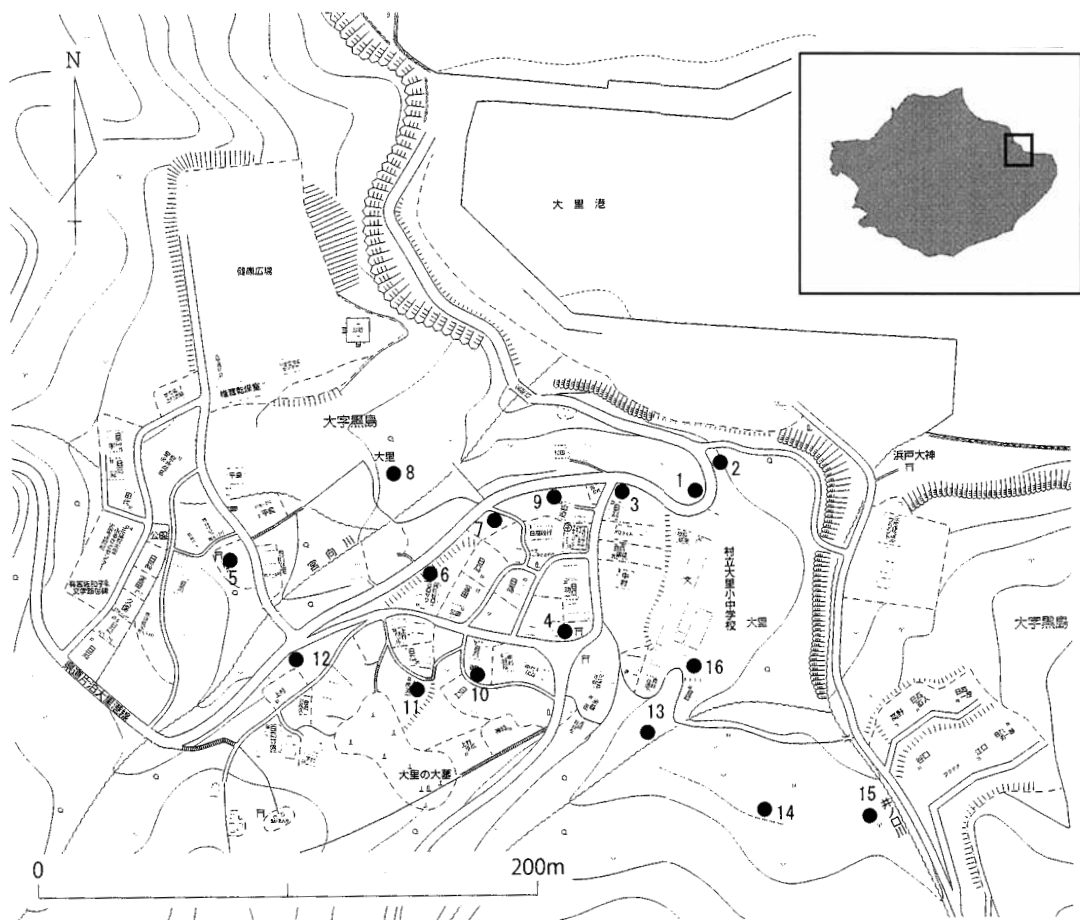


図3-6 黒島大里採集地点

状をなし、肩部に二条の突帯を有する。日置市美山雪山遺跡（19世紀末の陶工の工房・居住跡）出土資料に類例があり（宮田他編2003）、近代以後の可能性もある。写真3-4-45・46は蕉葉文を描く南中国産青花皿である。おそらく碁笥底と考えられる。接合しないが同一個体の可能性がある。16世紀。写真3-4-47は中国青磁盤の底部で、高台内が蛇の目釉剥ぎされている。15世紀前半。

## 5. まとめ

### (1) 採集陶磁器の特徴と傾向

以上、報告してきた採集陶磁器をまとめると表3-5になる。

表3-5 三島における主な採集資料

	竹島	硫黄島	黒島	
			片泊	大里
中世	中国玉縁口縁白磁(11c後半～12c前半) 中国口剥ぎ白磁皿(13c後半～14c前半) 備前摺鉢(15～16c)	中国龍泉窯鎊蓮弁文碗(13～14c)	中国龍泉窯鎊蓮弁文碗(13～14c) 中国龍泉窯刻線蓮弁文碗(15c後半～16c)	中国今帰仁タイプ白磁碗(13c後半～14c前半) 中国龍泉窯青磁碗(15c) 中国青花蕉葉文皿(16c)
	肥前初期伊万里大皿(17c前半) 肥前波佐見碗・皿(18c後半～19c) 苗代川壺・壺・摺鉢・土瓶(18c～) 加治木・始良系小皿(18～19c)	中国青花磁器(16c後半～17c前半) 中国青花磁器小杯(17c後半～18c前半) 肥前陶器碗(17c) 肥前内野山陶器碗(17c後半～18c前半) 肥前コンニャク印判染付碗(17c末～18c前半) 肥前波佐見丸碗(18c) 肥前広東碗(18c末～19c初) 肥前端反碗(19c中頃) 苗代川壺胴部(17c) 苗代川摺鉢(18c,19c～) 苗代川壺・壺・土瓶(18c後半～) 龍門司碗(18c後半～) 鉄絵千鳥印白薩摩(19c?) 薩摩磁器(19c)	肥前陶器皿口縁(17c初頭) 肥前三彩大皿(17c後半) 肥前刷毛目陶器碗(18c前半) 肥前染付雪輪草花文碗(18c後半) 肥前波佐見丸文碗(18c後半) 肥前碗・皿(18～19c) 苗代川壺・摺鉢・土瓶(18c～) 龍門司高坏(18c後半～) 白薩摩土瓶(18～19c?)	中国青花碗(16c末～17c初) 肥前鉄絵陶器鉢(17c末～18c初) 肥前京焼風陶器碗(17c後半～18c前半) 肥前染付端反碗(19c中頃) 苗代川壺・摺鉢・土瓶(18c～) 加治木・始良系陶器碗(18c後半～) 薩摩磁器?(19c)
近世				

日本における古代・中世段階の資料として、一番古いものは竹島で採集した玉縁口縁白磁（11世紀後半～12世紀前半）である。同種の白磁は硫黄島でも採集されており（橋口・若松2011a・b）、遅くともこの時期には三島は中国陶磁器の流通圏に含まれていたことがわかる。次いで竹島では口剥ぎ白磁皿（13世紀後半～14世紀前半）があり、また同時期の資料として、「今帰仁タイプ」の白磁が黒島大里で採集されている。今帰仁タイプは、福建省など中国南部で生産され、琉球経由で流通していたと推測される製品である（新里2009など）。黒島大里におけるこの資料が直接沖縄から運ばれたのか、鹿児島本土域を経由したのかは、今のところ判断がつかない。そののち14世紀以後になると中国龍泉窯の青磁などが各島で採集されており、また16世紀以後、中国青花製品が流通するようになる。国内産の陶器としては備前摺鉢が竹島で採集されている。以上のような流通状況は、鹿児島本土域の中世における陶磁器流通状況と大きな差異はない。ただ今帰仁タイプの位置づけは今後の検討課題となろう。

中世の南西諸島における陶磁器流通は、いわゆる「海域アジア」における濃密な物資流通ネットワーク（四日市編2008など）の一部を構成するものであり、三島もまたそのネットワークに組み込まれていたと推測される。橋口亘は硫黄島における宋代磁器の流入について、中国から南九州や硫黄島に直接ルートで運ばれた可能性も指摘しつつ（橋口・若松2011b p.2）、有力なルートとしては「浙江省→九州北部→薩摩半島→南西諸島」を想定している（橋口2013 p.121）。野中哲照は、本土域とつなぐ種子島・屋久島・口之永良部島・三島間での航路の存在を推定しており（野中2012）、これらは主とし

て「北からの流れ」の一端を構成するものと言える。

一方、黒島大里における今帰仁タイプの白磁や、硫黄島で採集されているベトナム陶器（橋口・若松2013）などは、沖縄経由か鹿児島本土域経由か判定が難しいが、「南からの流通」との関係は予想させる。市村高男は日本・台湾・フィリピンを結ぶ「黒潮トライアングル」において三島が重要な位置を占めていたことを指摘している（市村2013）。今後、三島とより南方の島嶼域との関係も視野に入れて考えていく必要がある。

近世では、ごく早いものとして黒島片泊で肥前産溝縁皿の口縁（17世紀初頭）が採集されており、竹島には初期伊万里の染付大皿（17世紀前半）がある。また硫黄島では17世紀代の堂平窯と推測される苗代川の甕の破片が採集されており、肥前・薩摩ともに近世の早い段階から流通していたことがわかる。なお17世紀段階の苗代川の甕は、徳之島などでも採集されており（渡辺2013）、これらは甕そのものが商品として流通した可能性もあるが、同時に何らかの液体などを運ぶ容器（コンテナ）として運ばれ、のちに転用された可能性もある。このほか17世紀～18世紀前半の肥前陶器として、陶器碗、内野山銅緑釉碗、三彩大皿、鉄絵脚付鉢、京焼風陶器、刷毛目碗などが見られる。18世紀以後では、肥前磁器として波佐見の量産品が目立つ。以上のうち、初期伊万里の大皿や三彩大皿の存在は、それらを宴席などで使用する役人や庄屋などの所有品の可能性も考えられる。

また薩摩焼は硫黄島で17世紀の苗代川甕胴部片が採集されているが、増加するのは18世紀以後で、苗代川産の甕・壺・摺鉢・土瓶などがすべての島で確認できる。また加治木・始良系の小皿や碗、龍門司の白化粧土掛け碗などもある。白薩摩では鉄絵千鳥印を有する小杯（硫黄島）や土瓶口縁（黒島片泊）が採集されている。白薩摩には「御用」製品と「商売焼」と呼ばれる商品があったことが指摘されているが（深港2013）、たとえ商品であったとしても高級品であったと推測される（渡辺2010）。初期伊万里や三彩の大皿とともに、社会的上位階層の所有品と考えられる。19世紀代には薩摩磁器と思われる染付も見いだせる。また硫黄島において17世紀代の中国青花磁器の小杯片が採集された。同種のものは沖縄や徳之島などにも見られ（新垣2003、新里編2010など）、やはり沖縄経由と推測されるが、中世の今帰仁タイプと同様、沖縄から直接入ってきたのか鹿児島本土域経由かは判然としない

以上、近世についてまとめると、17世紀から18世紀前半まで肥前産陶器が流通している点、18世紀以後、薩摩焼が増加すること、その薩摩焼は、甕や壺、摺鉢、土瓶などは苗代川産で、碗や小杯など小型食器は加治木・始良系あるいは龍門司製品であること、また肥前産（波佐見産を含む）磁器が多いという点、19世紀の薩摩磁器の可能性のある資料が見られる点など、いずれも鹿児島本土域と共通する状況と言えよう（橋口2002、渡辺2002・2010）。

各島で沖縄産陶器、とくに荒焼（無釉陶器）の壺なども多数見られたが、これらについては、はたして近世までさかのぼるかどうかはっきりしない。硫黄島採集の上焼土瓶蓋の青色は発色がやや鮮やかでコバルト顔料を使用している可能性がある。沖縄におけるコバルト導入は明治18年以後とされる（那覇市立壺屋焼物博物館編2008 p.16）。また荒焼（無釉陶器）は近世と近代との区別が難しく、近代以後のものも多く含まれることが予想される。近世三島における沖縄産陶器の流通状況は今後の課題である。

ところで筆者は南西諸島域の陶磁器流通を考える枠組みとして「北からの流通」「南からの流通」「島嶼内産陶器の流通」の三層構造を想定し、それらが時期差・地域差を有しながら変化していると考えている。近世では「北からの流通」として肥前磁器や薩摩焼などの本土産陶磁器、「南からの流通」とし

て沖縄を介しての清朝磁器の流通、「島嶼産陶器の流通」として沖縄産陶器の流通が重なり合っている(渡辺2013)。また橋口亘は、鹿児島本土域出土の清朝磁器の流入ルートについて沖縄経由を想定し(橋口1999・2009など)、さらに薩摩焼の主要な市場として南西諸島域をそのひとつに挙げている(橋口2001)。今回の三島踏査で得られた陶磁器資料から考えると、島嶼域であっても本土域の流通様相に近く、南西諸島域最北部に位置する三島では「北からの流通」が多くを占めていたと言えよう。

## (2) 資料散布の粗密について

調査したそれぞれの集落では中近世の陶磁器は比較的万遍なく散布しているが、一方で他の地点に比べ比較的多数の陶磁器が散布している地点が、各集落にいくつかある。竹島では、現在の十島村竹島支所と郵便局が所在する地点14・15、硫黄島では熊野神社に隣接する地点2・3など、また黒島片泊では地点7、大里では黒尾神社境内とその周辺である地点5・8である。

黒島大里の黒尾神社は、『三国名勝図絵』によれば、祭神・由来などは不明のようだが、「大里の宗廟にて、土民の崇敬せり」とあり(原口監修1982 pp.915-916)、大里集落の宗教的中心であったと考えられる。寺社は、購入や奉納などにより、物資流通の結節点を果たしていた可能性が考えられ、地点5・8における遺物散布密度の濃さは、そのような性格の一端を示している可能性がある。同様に硫黄島の熊野神社は、近世においては「熊野三社権現社」と呼ばれ(原口監修1982 pp.883-887)、集落からもっとも近い神社である。市村高男は中世硫黄島の集落が熊野神社を中心としていた可能性を指摘している(市村2013 p.176)。神社に隣接する地点2・3の散布密度の濃さも、大里の黒尾神社と同じようなコンテクストでとらえられる可能性がある。

一方、竹島の地点14・15は、村役場支所・郵便局という公的施設に隣接している。居住空間の限定される島嶼集落では、このような公的機関所在地は、近世以来の集落の中心的施設(役所など)を踏襲している可能性が考えられる。それゆえ、その散布密度の濃さはその中心的施設に由来する可能性も考えられよう。ただし現段階では近世の竹島集落における古地図などは確認できておらず、支所・郵便局所在地が近世においてどのような性格の地域であったかは検証されていないので、上記のことは、今のところ想像の域を出ない。また大里片泊の地点7は、現在の支所に比較的近いとはいえ、竹島ほど近接はしていないため、公的施設との関係を想定するには、今のところまだ弱い。

以上のように、表面採集資料とはいえ、その散布密度の偏りは、集落構造や社会・経済構造と結びついている可能性が考えられる。しかしそれを検証するためには、古地図などの探索・照合が必要である。また大里では集落の中心部には現在も居住者が多く、必ずしも十分な分布調査ができたとは言えない。調査方法自体が有する限界も考慮に入れておく必要がある。

## 注

- (1) 『元禄国絵図』『薩摩国』『大隅国』は国立公文書館Digital Archivesで公開しているものを参照した。  
<http://www.digital.archives.go.jp/> (2014年12月24日確認)
- (2) 第3章・第4章における採集資料の産地・年代推定については、新垣2003・2009、上田1982、大橋1995、小野1982、九州近世陶磁学会編2000、瀬戸他2007、太宰府市教育委員会編2000、中世土器研究会編1995、森田1982、渡辺2000・2004aなどを参照した。ただし推定に誤りがある場合はすべて筆者の責任である。
- (3) 各島の周囲長・面積・人口については三島村HPの記載による。  
<http://mishimamura.com/> (2014年12月24日確認)
- (4) このほか各島で、小片のため判断が難しいが、薩摩磁器と思われる破片を採集している。



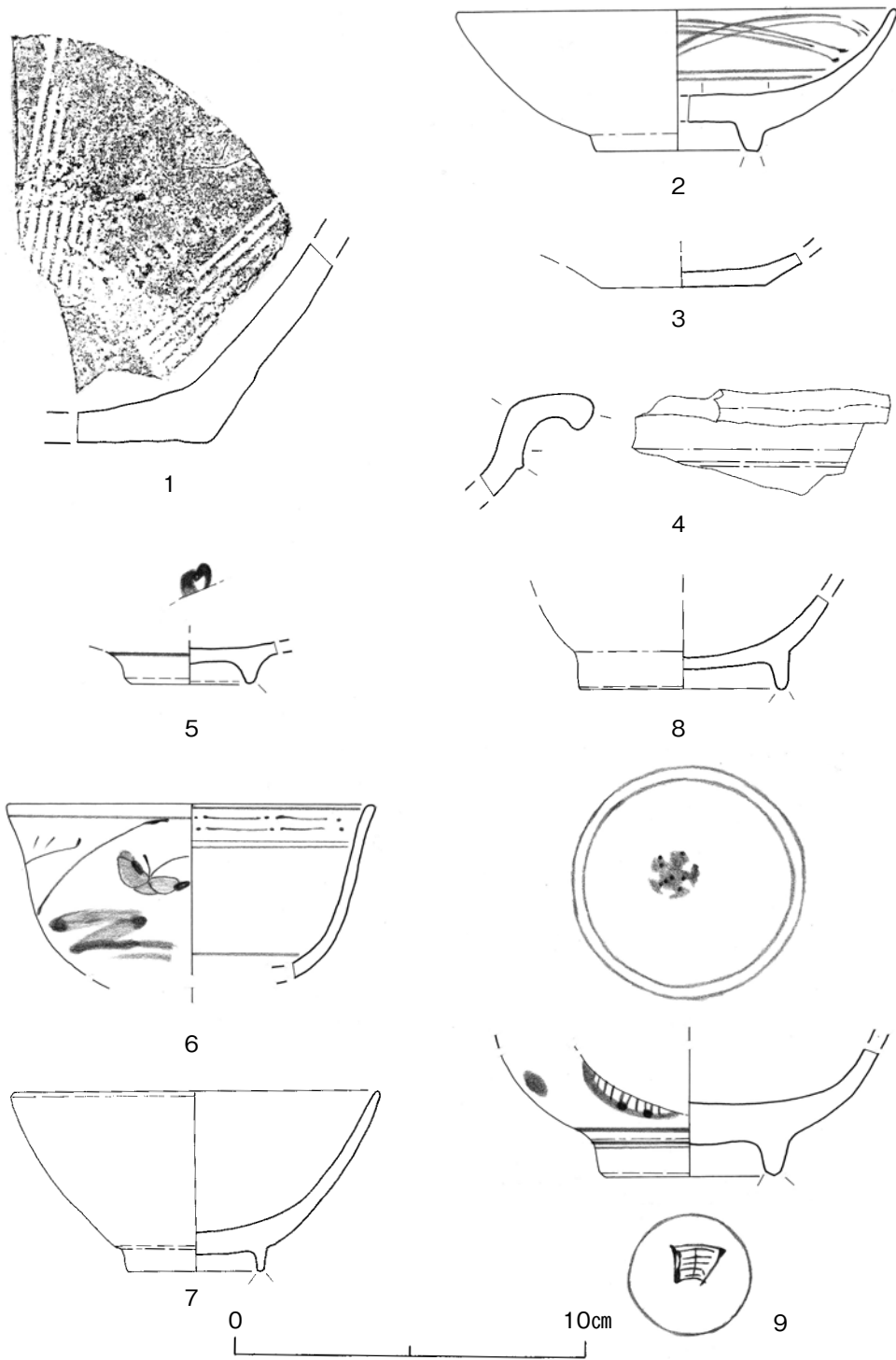


图3-7 三島採集資料実測図(1)

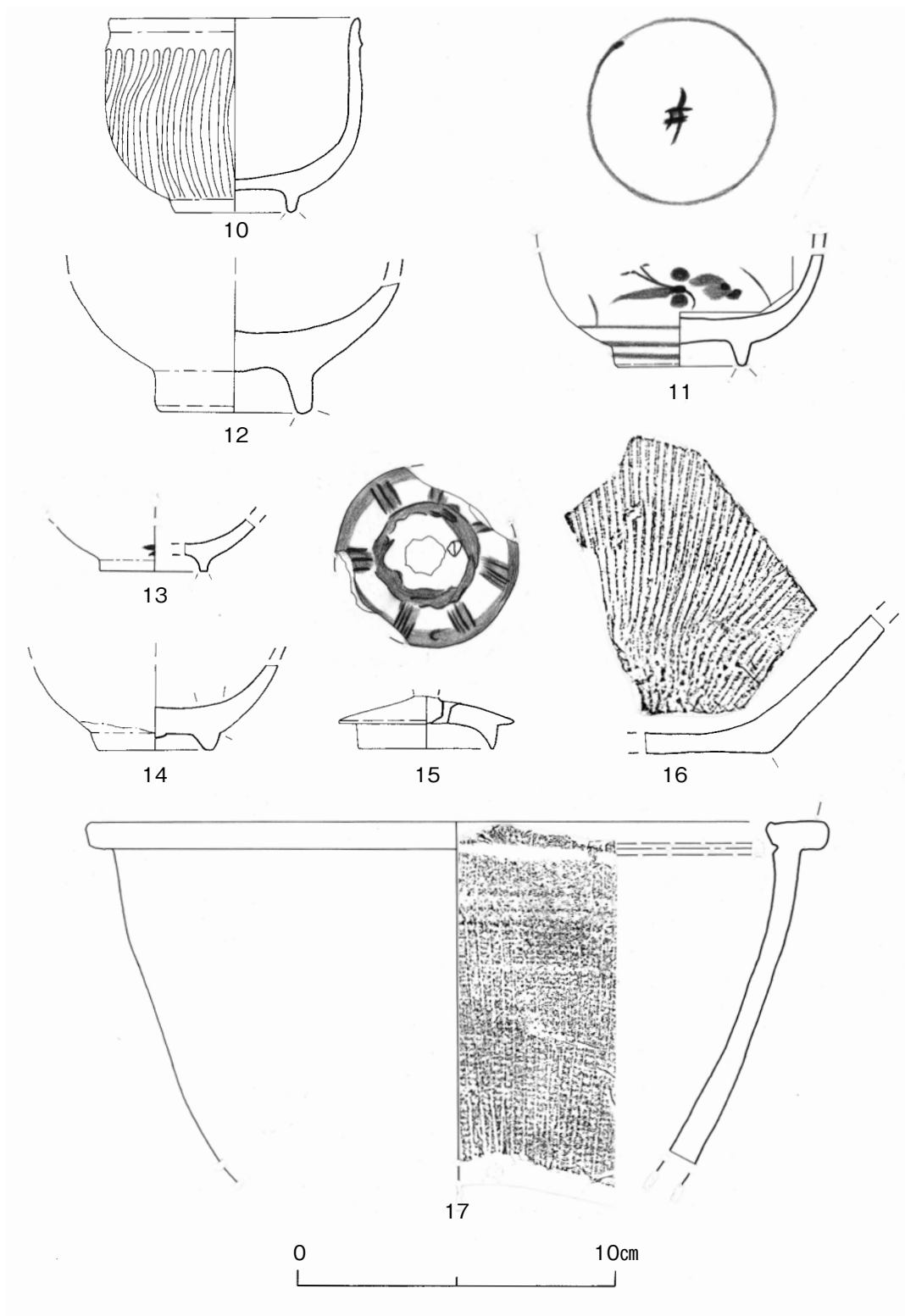


图3-8 三島採集資料実測図(2)

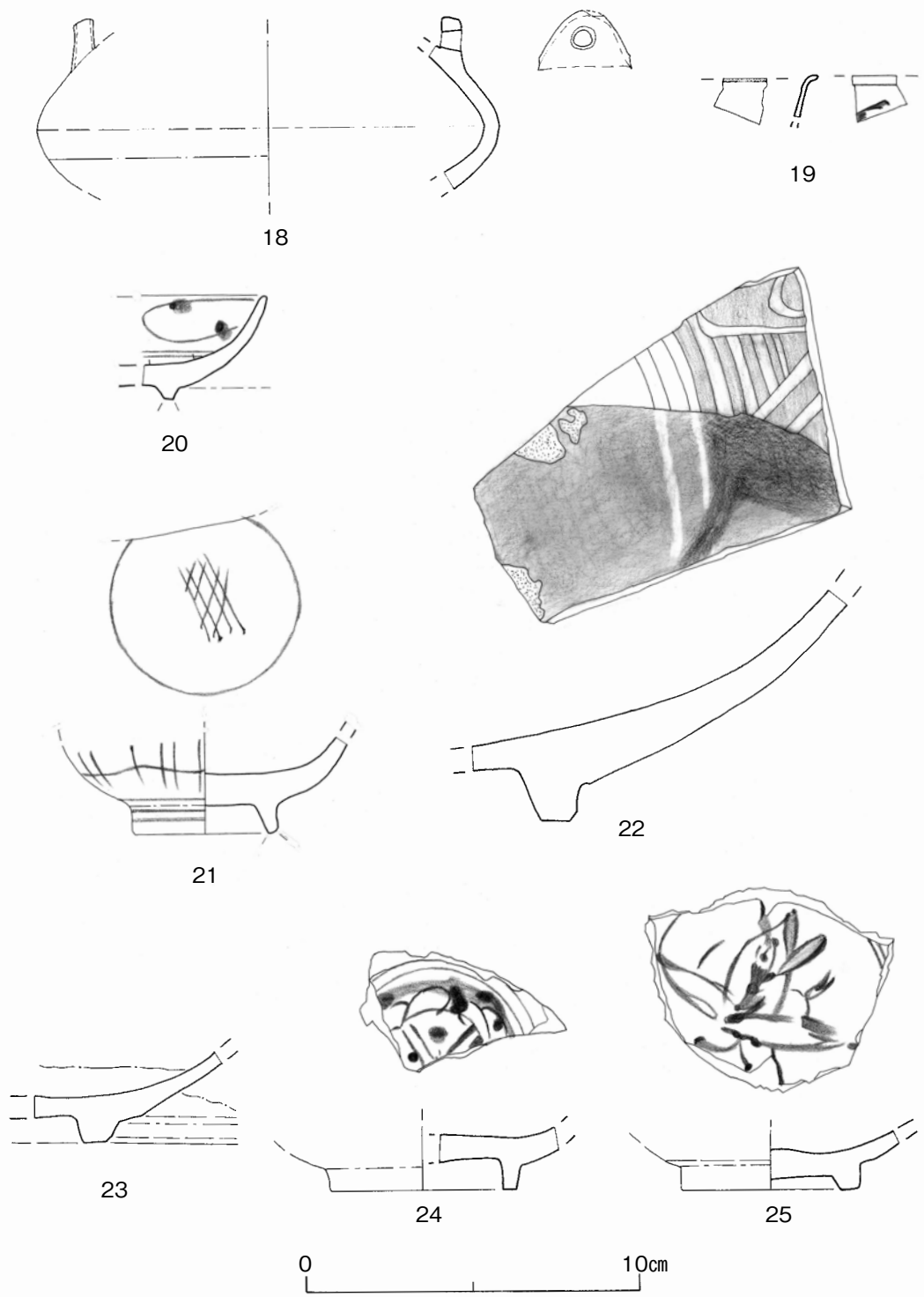


図3-9 三島採集資料実測図(3)

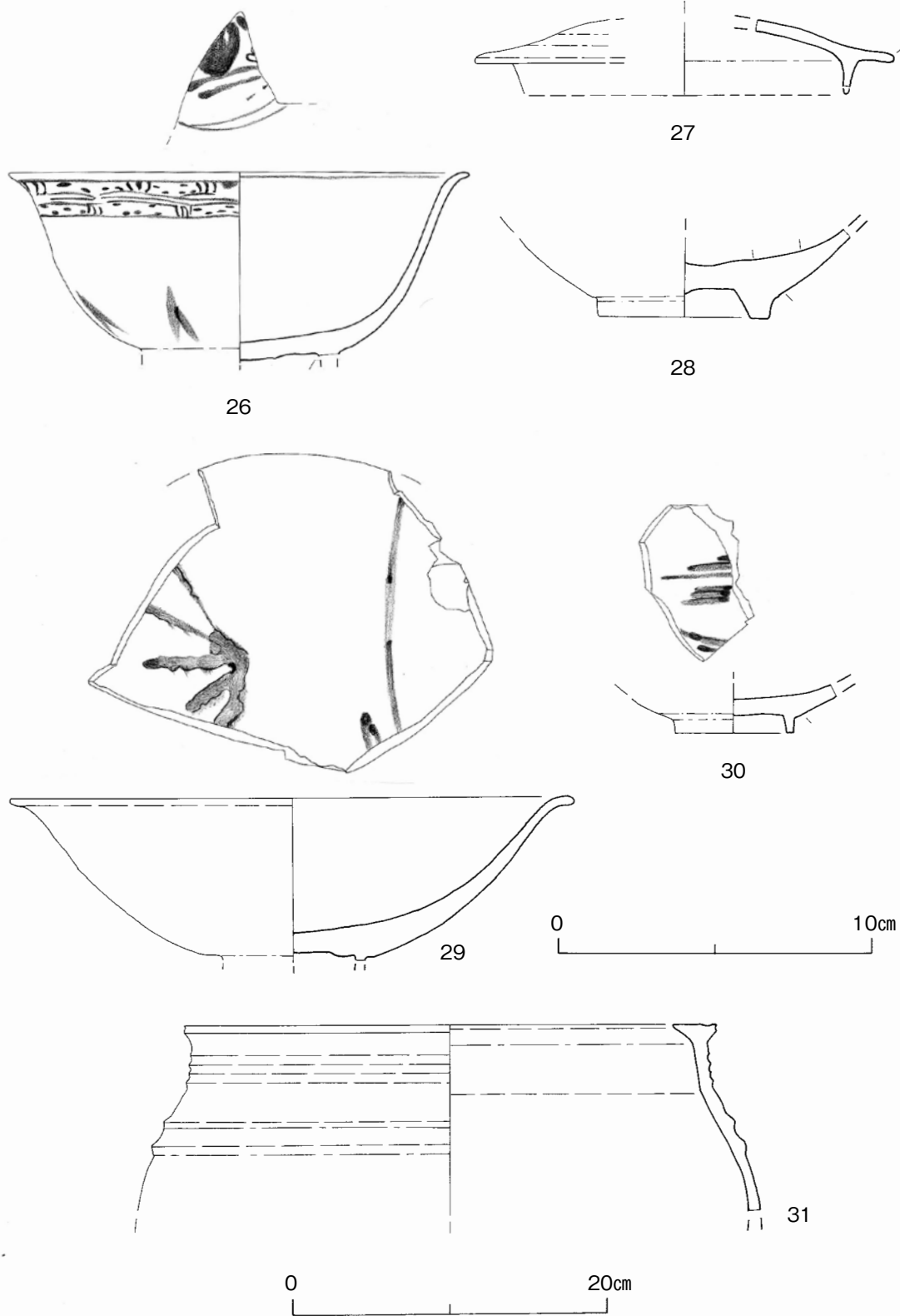


图3-10 三島採集資料実測図(4)

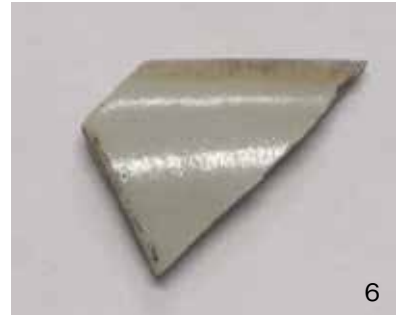


写真3-1 竹島・硫黄島採集資料

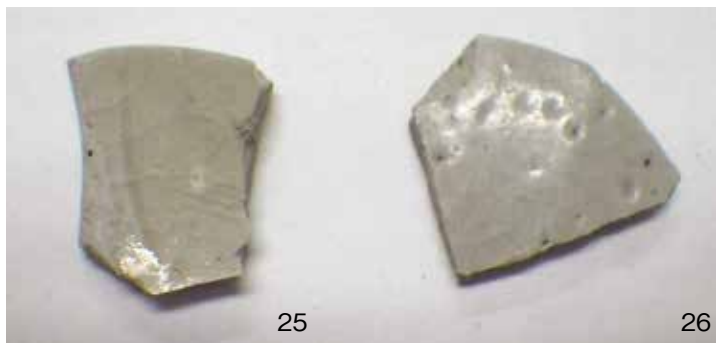
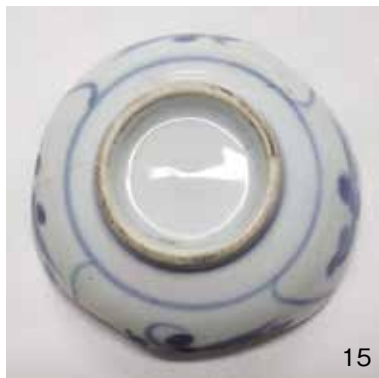


写真3-2 硫黄島採集資料

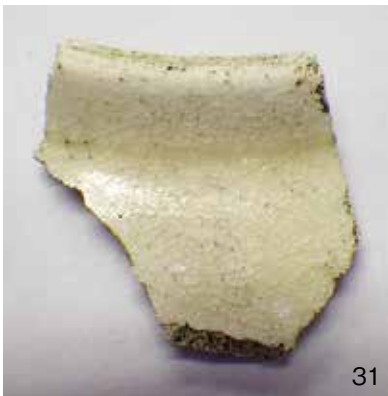
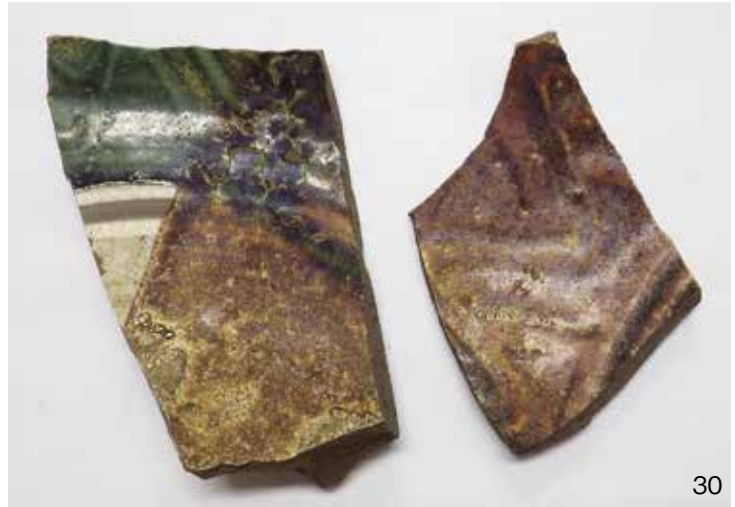


写真3-3 黒島片泊採集資料



36



37



39



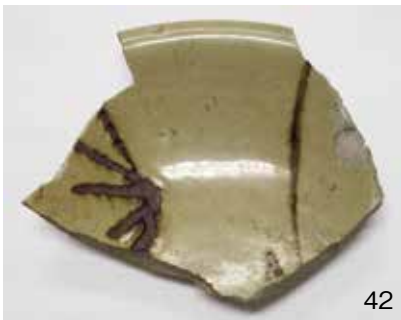
38



40



41



42



43



44



45



46



47

写真3-4 黒島大里採集資料



## 第4章 十島における調査報告

### 1. 十島の概要

十島村は、九州島の南方、屋久島と奄美大島の間約160kmの間に浮かぶ有人島7島（口之島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・小宝島・宝島）と無人島5島（臥蛇島・小臥蛇島・小島・上ノ根島・横当島）よりなる（図3-1）。自然地理的名称としては「トカラ列島」と呼ばれる。西側に並ぶ臥蛇島・小臥蛇島・平島・小宝島・宝島は古期火山岩類とそれを覆う隆起石灰岩からなり、東側の口之島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島・上根島・横当島の島列は新期火山岩類から造られている。後者は現在もしくは最近まで活発な火山活動が確認されている（十島村誌編集委員会編1995 pp.5-6）。

現在、鹿児島本土域と十島、そして奄美大島をつなぐ航路は「フェリーとしま」が鹿児島港を発したのち、口之島－中之島－平島－諏訪之瀬島－悪石島－小宝島－宝島－奄美大島名瀬港を往復するルートを取っている。一方、『元禄国絵図』『薩摩国』『大隅国』からは、各島嶼間をさまざまな航路で結ばれていることがわかる（図3-2）。近世における島嶼間の物流を考える上では、このような多様なルートの存在を考慮に入れる必要がある。また近世における藩行政の中心である在番所は、口之島・中之島・宝島に置かれたが、幕末には悪石島にも置かれたようである（十島村誌編集委員会編1995 pp.616）。

### 2. 十島における考古学的調査研究

十島における先史時代の考古学的調査は、古く1961年に三友國太郎・河口貞徳により浜坂貝塚（宝島）が発掘調査され、本土における縄文時代晩期と弥生時代中期の土器が宇宿上層式土器とともに出土している（三友・河口1962）。1977～79年には熊本大学考古学研究室によりタチバナ遺跡（中之島）が発掘調査され、縄文時代晩期相当の竪穴住居跡30基、土坑14基など長期間の生活を示唆する遺構が検出されている（熊本大学文学部考古学研究室編1979・1980）。また大池遺跡（宝島）は、牛島盛光の調査（1964年）、熊本大学の国分直一らの調査（1973年）、国立歴史民俗博物館の調査（1993・94年）など複数回の調査が実施されている（新東2005、西谷他1995・1997）。

諏訪之瀬島の切石遺跡は、1992年に現地踏査により陶磁器や銅製品などが採集されていたが、1994年に熊本大学考古学研究室により発掘調査が実施された。遺跡は台風の来襲などによりかなり崩壊しているが、調査区域内から住居跡と祭祀遺構が検出されている。祭祀遺構は積石部と配石部よりなり、方形（推定）をなす配石部の内部から土坑が検出された。土坑内部より138個体の陶磁器と灯明皿16個体が出土している。陶磁器が土坑底面から浮いていること、周囲から鉄釘が出土したことから、もともと木箱に納められていたと推測されている。なお諏訪之瀬島は文化10年（1813）の御岳噴火にともない全島民が離島し、明治16年（1883）に奄美大島から藤井富伝らが新たに入植・開拓するまで無人島であった<sup>(1)</sup>。同噴火の火山灰層が遺構を覆っていることから、遺構の下限年代を1813年とすることができる（熊本大学考古学研究室編1994）。土坑内およびその周囲から出土した陶磁器148点については、大橋康二・山田康弘（1995）により詳しい報告、検討がなされている。陶磁器の年代は14～18世紀、生産地は中国・ベトナム・国内（瀬戸美濃・肥前・薩摩）である。本遺跡は、十島における唯一の中近世遺跡の発掘調査事例であり、「考察編」第8章で改めて触れたい。

平島については、伊藤慎二がカムイヤキと清朝磁器を採集しており（伊藤2009、渡辺・小谷2013）、

2010年11月に水中文化遺産の調査が実施された。南之浜などの海浜部において清朝磁器が採集されるとともに、南之浜港周辺の潜水調査により同じ清朝青花磁器の海底での散布が確認されている。また集落部においても中近世の国産・中国陶磁器が採集されている（渡辺・小宮2013）。

また十島各島には中国陶磁器の伝来品が多く見られる。白木原和美によって報告されたのち（白木原1980）、亀井明德は南西諸島における中世の貿易陶磁器流通を整理、検討する中で、十島伝来のそれらについても触れている。亀井は十島に伝来する貿易陶磁器が散発的、不定期であることから、「寄船」（漂着船）のような偶発的契機で入手された可能性を示唆している（亀井1993）。

このほか伊藤慎二は、先述した琉球文化圏の北限に関する研究において、三島とともに十島も詳細に分布調査している（伊藤2011）。

以上のように十島における考古学的調査研究は古くより着手されているが、その対象は先史時代から中世までが中心であり、近世のそれは諏訪之瀬島の切石遺跡の発掘調査1例にとどまる。そのため近世考古学的情報がきわめて乏しいのが現状である。

### 3. 調査の概要

踏 査 地：鹿児島県鹿児島郡十島村（口之島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島）

調 査 期 間

2013年8月9日（金）～17日（土）

悪 石 島：8月10日

諏訪之瀬島：8月11・12日

宝 島：8月13日

中 之 島：8月14～16日

※中之島では十島村歴史民俗資料館展示の臥蛇島伝来資料も調査した。

2014年8月13日（水）～15日（金）

口 之 島

※平島の踏査は2010年11月27・28日に水中文化遺産調査の一環として実施した（渡辺・小宮2013）。

調 査 参 加 者

2013年：渡辺芳郎、松崎大嗣（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科）、印南早織（鹿児島大学法文学部）

2014年：渡辺芳郎、松崎大嗣、田畑春菜（鹿児島大学法文学部）

調 査 協 力：十島村教育委員会

調 査 地 点・採 集 資 料 数

島 名	採 集 地 点 数	採 集 資 料 数	備 考
口 之 島	20	111	
中 之 島	10	57	
平 島		34	集落部のみ
諏 訪 之 瀬 島	2	10	
悪 石 島	8	25	
宝 島	18	75	
合 計	58	312	

#### 4. 調査成果

##### (1) 口之島 (図4-1、表4-1)

口之島は周囲長20.38km、面積13.33km<sup>2</sup>を有し、人口は128人である(2014年11月30日現在、以下同)<sup>(2)</sup>。港と集落は島の北部に所在する。

20地点で111点を採集した。踏査した十島6島のうち地点・採集資料数をもっとも多い。地点11が22点採集ともっとも多いが、同地点は現代のゴミなども多数散布しており、本来の散布地点ではなく、周辺からかき集められたものではないかと推測される。そのほか地点4・6・12などで比較的多くの陶磁器が散布していた。

表4-1 口之島採集資料一覧

地点	資料数	採集遺物	備考
1	4	染付磁器2、陶器1、土師器?1	
2	1	苗代川摺鉢口縁1	
3	9	陶器2、須恵器?1、中国青磁1、白磁1、肥前波佐見染付1、近代染付3	
4	10	南中国?陶器1、苗代川土瓶1、肥前陶器1、中国竜泉窯鎊蓮弁文青磁1、中国青花3(清朝青花2)、肥前染付3	
5	5	中国竜泉窯鎊蓮弁文青磁1、中国青花1、苗代川甕胴部1(17世紀)、苗代川土瓶?1、沖縄荒焼1	苗代川甕内面当て具痕
6	15	肥前砂目碗底部1、苗代川陶器3、産地不明陶器甕胴部1、龍門司飛びガンナ鉢1、沖縄荒焼?1、南中国青花皿1、白磁?1、染付2(肥前、薩摩)、近代染付4	
7	2	近代染付2	
8	1	中国青花1	
9	9	陶器4(苗代川3、不明1)、沖縄荒焼瓶底部1、肥前色絵染付磁器1、肥前染付1、近代磁器2	
10	1	近代染付磁器皿(統制陶器「岐989」)1	
11	22	中国竜泉窯碗底部2、中国色絵磁器碗1、肥前染付磁器2、薩摩染付磁器1、近代染付3(うち2点接合)、苗代川陶器8(鉢口縁2、甕底部1、甕胴部1、土瓶蓋1、土瓶?土鍋?口縁1、摺鉢2)、加治木・始良系小皿口縁1、産地不明陶器1、沖縄上焼土瓶把手1、沖縄荒焼2(瓶底部、摺鉢)	
12	12	苗代川陶器4(土鍋口縁1)、中国竜泉窯鎊蓮弁文青磁1、中国青花磁器1、肥前染付磁器3、近代白磁1、陶器片2	
13	1	薩摩染付磁器片1(端反碗蓋か?)	
14	6	苗代川陶器2(土瓶蓋1)、中国白磁1、中国青花1、肥前染付1、近代染付1	
15	1	須恵器1	
16	1	土器1	
17	1	陶器片2	同一個体か?
18	6	中国竜泉窯刻線蓮弁文碗1、肥前染付1、苗代川摺鉢1、関西系?陶器片1、近代染付2	
19	3	苗代川陶器2(甕口縁1、瓶?1)、中国青花1	
20	2	苗代川土瓶底部1、薩摩磁器染付半筒碗1	

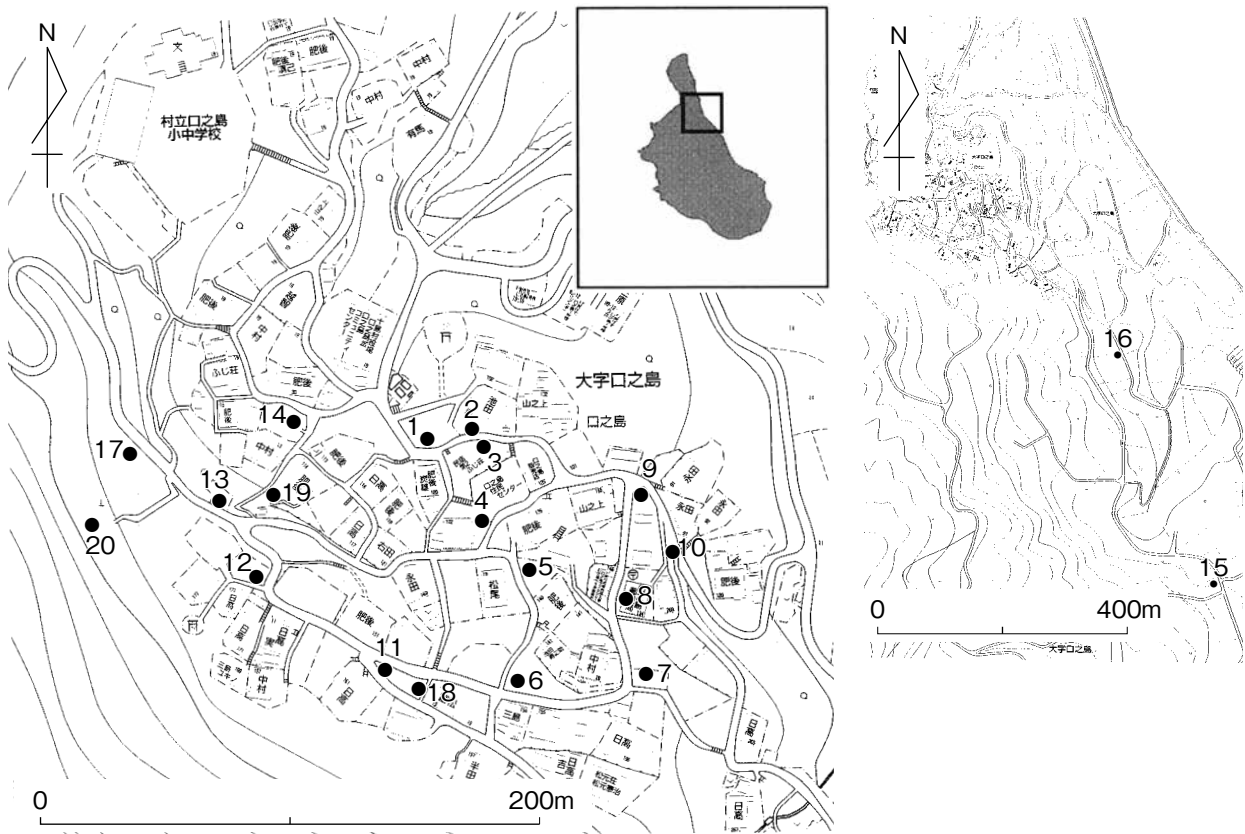


図4-1 口之島採集地点

図4-6-1 (写4-3-1)は須恵器の胴部片である。外面に平行叩き痕、内面に当て具痕が残る。古代のものと思われる。図4-6-2 (写4-3-2)は刻線蓮弁文の龍泉窯青磁碗口縁で15～16世紀か。図4-6-3 (写4-3-2)は内底に草花文の印文を有し、高台内を蛇ノ目釉剥ぎする沖縄V類の龍泉窯青磁碗底部である。15世紀前半～中葉。図4-6-4 (写4-3-4)も高台内無釉の龍泉窯青磁碗底部で15世紀前半～中葉。図4-6-5 (写4-3-5)は南中国産青花の底部で内底は蛇の目釉剥ぎをしている。16世紀末～17世紀初頭である。図4-6-6～9 (写4-3-6～9)は清朝磁器である。6・7 (写6・7)は小杯の口縁部片である。口縁部を折り曲げ、逆L字状になる。文様は簡略化された草花文と推測される。傾きについては二者を提示した。18～19世紀と考えられる。8 (写8)は菊唐草文を描く碗の口縁部である。呉須がかなり流れている。18～19世紀の端反の碗と推測される。9 (写9)は双喜文と草花文を描く色絵碗で、類例が沖縄県首里城の真珠道跡から出土している (知念他編2006 p.30)。18世紀の徳化窯系の製品である。図4-6-10 (写4-3-10)は肥前波佐見産の染付香炉である。19世紀か。図4-7-11 (写4-3-11)は肥前の砂目跡を有する陶器碗底部である。17世紀初頭。図4-7-12・13 (写4-3-12・13)は褐釉・暗褐釉をかける土瓶の蓋である。12 (写12)は18世紀後半以後の苗代川産であるが、13 (写13)については他藩 (県)産の可能性もある。図4-7-14 (写4-3-14)は龍門司産の白化粧土掛け飛びガンナ皿である。18世紀後半以後。図4-7-15・16 (写4-4-15・16)は苗代川の摺鉢で、口縁部とカキメの形態から、前者は18世紀、後者は19世紀以後と推測される。図4-7-17・18 (写4-4-17・18)は苗代川の鉢で、前者には胴部上端に形骸化した把手が付く。類例が雪山遺跡 (宮田他2003)などに見られることから19世紀と推測される。図4-7-19 (写4-4-19)は苗代川の甕の口縁～肩部片で、肩部突帯上面が釉剥ぎされている。19世紀以

後。図4-7-20・21 (写4-4-20・21)は沖縄の荒焼で、前者は徳利 (鬼の手)の底部、21は摺鉢底部である。ともに近代以後であろう。写4-4-22は鎬蓮弁文の龍泉窯青磁碗口縁で、13～14世紀と思われる。写4-4-23は薩摩磁器の染付雪持笹文半筒碗で18世紀末～19世紀初頭。写4-4-24は沖縄の上焼 (施釉陶器)の土瓶把手である。白化粧土と銅緑釉をかける。近代以後であろう。写4-4-25は苗代川産の甕と思われる胴部片である。器壁が薄く内面に叩きの当て具痕が残ることから17世紀代と推測される。

なお口之島では伊藤慎二が玉縁口縁の白磁碗 (11世紀後半～12世紀前半)を採集している (伊藤2011 p.14)。

## (2) 中之島 (図4-2、表4-2)

中之島は周囲長31.80km、面積34.47km<sup>2</sup>を有し、人口154人である。十島のうち、もっとも大きな島である。集落は島の西岸部と中央部に所在する。うち西岸北部は近世以来の集落で、里村・楠木地区に分かれ、南部の船倉・寄木地区、島の中央部の日之出地区は明治以後に形成された。

10地点で57点の陶磁器を採集した。その大部分は里村・楠木地区であり、船倉・寄木・日之出地区では採集されなかった (地点10は海岸埋め立ての客土と推測される)。とくに里村の「島中どん」と呼ばれる祠 (地点1)ならびに墓地 (地点2)周辺に数多く散布していた。

図4-8-22 (写4-5-26)は蕉葉文を描く碁笥底の中国青花皿の底部である。16世紀。図4-8-23 (写4-5-27)は中国景德鎮系の青花小杯の口縁部で、外面に飛馬文を描く。17世紀後半～18世紀前半で、類例が沖縄県ヤッチノガマなどから出土している (新垣2009 p.26)。図4-8-24 (写4-5-28)は外面と内底に牡丹唐草文を描く端反の中国青花碗で17世紀初頭。図4-8-25 (写4-5-29)は外面に草花文を内底に蝶文を描く中国青花碗で、高台内面に瓢箪状の文様を描く。18世紀。図4-8-26 (写4-5-30)は見込み中央に印文を有し、蛇の目釉剥ぎ青花の大型の鉢である。18世紀の福建・広東系の製品で、沖縄での出土が知られている (新垣2003 p.85)。図4-8-27 (写4-6-31)は肥前染付の香炉で、19世紀か。図4-8-

表4-2 中之島採集資料一覧

地点	資料数	採集遺物	備考
1	20	中国青磁片2 (碗底部1)、中国磁器片3 (碁笥底皿2)、中国青花片1、薩摩磁器片2 (端反碗蓋1)、白磁片7、陶器片4 (苗代川摺鉢2、荒焼1)	島中どん
2	11	中国青磁片2、中国青花端反碗1 (2点接合)、青花・染付片2、肥前青磁染付蓋1、白磁片3、肥前刷毛目碗片1、苗代川土瓶口縁片1	墓地
3	8	中国青花1、染付片4、白磁片3	
4	1	染付香炉? 1	
5	1	中国染付碗 (外底に銘)	
6	1	肥前? 染付1	
7	9	中国青花1 (蕉葉文)、中国青花小杯口縁1、染付小片2、薩摩染付蓋物1、肥前染付八角鉢1、加治木・始良系碗1、苗代川甕底部1、荒焼徳利1	
8	3	白磁・染付小片3 (波佐見1)	
9	1	染付碗底部1	
10	2	中国青花小杯口縁1、肥前染付半筒碗1	客土か



図4-2 中之島採集地点

28 (写4-5-32)は肥前波佐見染付丸文碗である。19世紀中頃。図4-8-29 (写4-5-33)は胴部に唐草文を描く染付蓋物で、19世紀の薩摩磁器である。図4-8-30 (写4-5-34)は肥前刷毛目陶器碗で17世紀後半～18世紀前半。図4-8-31 (写4-5-35)は高台露胎で褐釉を施した加治木・始良系陶器碗で18世紀後半以後の量産品である。図4-8-32 (写4-5-36)は口縁部が外反し口縁下に二条突帯を作る苗代川の摺鉢である。18世紀代と考えられる。図4-8-33 (写4-5-37)は沖縄荒焼の徳利である。肩部から胴部にかけてやや膨らむ点は近世の事例に近い。写4-6-38は中国龍泉窯の鎬蓮弁文青磁碗で、13～14世紀か。写4-6-39は苗代川摺鉢でカキメから18世紀後半以後と推測される。写4-6-40は苗代川土瓶の身の口縁部片で、18世紀後半以後。写4-6-41は氷裂梅文と葦文を描く肥前染付八角鉢で18世紀末～19世紀中頃である。

### (3) 臥蛇島 (表4-3、写4-7～12)

臥蛇島は周囲長9.0km、面積4.07㎡をはかる。1980年に全島民が離島し、現在は無人島である。臥蛇島に伝来していた陶磁器類が十島村歴史民俗資料館(中之島)に収蔵、展示されており、中之島踏査の際にあわせて調査した。中世貿易陶磁についてはすでに亀井明德により報告されているので(亀井1993)、近世陶磁器を中心に、展示資料のみを写真撮影した。展示されている臥蛇島伝来資料は計40点である<sup>(3)</sup>。40点のうち中国や東南アジアなど海外産陶磁器が18点、近世国産陶磁器が21点、不明1点である。近世国産陶磁器の内訳をまとめると表4-3になる。

生産地は肥前と薩摩龍門司である。瓶2点、皿1点があるが、大部分は碗である。またいずれも完形率が高く、使用による摩耗痕などがほとんど見られない。たとえば天目碗の高台畳付には釉だまりが残っている(写4-7-45)。また4点ある内野山産銅緑釉丸碗の内底には焼成時の降りものが多数付着している(写4-8-49～52)。通常、このような釉だまりや降りものは使用しているうちに摩耗するが、その痕跡が認められない。完形率の高さや使用痕の欠如から、これらは使用されていない可能性が考えられる。また碗は2点もしくは4点が、ほぼ同一の器形・文様からなっている。以上のような特徴は、諏訪之瀬島切石遺跡出土の近世陶磁器に共通する。また長嶋俊介によれば、現在、歴史民俗資料館の臥蛇島伝来資料は、同島の八幡神社に関する資料だという(長嶋2009 p.120)。この点については、「考察編」第8章で改めて触れたい。

表4-3 臥蛇島伝来の近世陶磁器(十島村歴史民俗資料館所蔵)

	名 称	生 産 地	点数	年 代	備 考	写 真
陶 器	天目碗	肥前	2	17世紀前半		4-7-45・46
	銅緑釉碗	肥前内野山	2	17世紀後半～18世紀前半	筒碗に近い形状	4-7-47・48
	銅緑釉碗	肥前内野山	4	17世紀後半～18世紀前半	丸碗	4-8-49～52
	碗	薩摩龍門司	2	18世紀前半	灰白色胎土、総釉、蛇の目釉剥ぎ	4-9-53・54
	碗	薩摩龍門司	2	18世紀後半以後	赤色胎土、白化粧土	4-9-55・56
	皿	薩摩龍門司	1	18世紀後半以後	飛びガンナ、白化粧土	4-10-57
	瓶	薩摩龍門司	1	18世紀後半以後	飛びガンナ、白化粧土、褐釉流し掛け	4-10-58
磁 器	染付笹文碗	肥前	2	19世紀		4-10-59・60
	染付格子文碗	肥前	4	19世紀前半～中頃		4-11-61～64
	染付松文瓶	肥前	1	19世紀		4-12-65

### (4) 平島

平島は周囲長7.23km、面積2.08km<sup>2</sup>を計り、人口66人である。集落は島の西側に所在する。フェリーの港としては島の南側の南之浜<sup>はえ</sup>が使われるが、そのほか前之浜港、東之浜港がある。

平島の踏査は、2010年11月27・28日に水中文化遺産の調査の一環として実施した。調査内容ならびに採集資料の一部はすでに報告している(渡辺・小西2013)。本書では既報の近世陶磁器資料に未報告のそれを加えて報告する。なお他の島嶼と異なり、詳細な採集地点は記録していないが、ここで取り上げるのはいずれも集落部で採集した資料である。

図4-9-34～42(写4-13-66～74)はいずれも清朝青花磁器と考えられる。34～36(写66～68)は小杯口縁部である。34はやや外反する口縁で、35・36の口縁は外側に折り返している。37～39(写69～

71)は18～19世紀の徳化窯などで生産された粗製品の碗で、素地がやや白いものから灰色のものまでヴァリエーションがある。簡略化された双喜文と唐草文を描く。40・41(写72・73)はともに仙芝祝寿文を描き、40は小皿、41は腰部で屈曲する碗である。18世紀後半～19世紀と考えられる。42(写74)は胴部に簡略化された菊唐草文を描く小碗である。18～19世紀か。図4-9-43(写4-14-75)は17世紀前半の肥前磁器、つまり初期伊万里皿である。図4-9-44(写4-14-76)はコンニャク五弁花と蛇の目釉剥ぎを有する肥前染付皿で18世紀後半である。図4-10-45(写4-14-77)は腰部の折れる、いわゆる「せんじ碗」で、褐釉をかけ内底に蛇の目釉剥ぎがある。高台内面が施釉されており、18世紀前半～中葉の加治木・始良系陶器と推測される。図4-10-46(写4-14-78)は肥前内野山窯産の銅緑釉碗で17世紀後半～18世紀前半である。図4-10-47(写4-14-79)は加治木・始良系の陶器小皿で、18世紀後半以後。図4-10-48～50(写4-14-80～82)は苗代川産の摺鉢で、48・49(写80・81)のカキメはやや太く、50(写82)のカキメは細いことから、前二者は18世紀代、後一者は19世紀代と考えられる。

### (5) 諏訪之瀬島(図4-3、表4-4)

諏訪瀬島は周囲長27.15km、面積27.66km<sup>2</sup>を有し、人口70人である。集落は島の南端部に位置し、港はやはり南端の東側に切石港、西側に元浦港がある。現在のフェリーは主として切石港を使用するが、天候によっては元浦港を使うこともあるという。

表4-4 諏訪之瀬島採集資料一覧

地点	資料数	採集遺物	備考
1	2	縄文土器片2	
2	8	中国青花片1、統制陶器(岐508)1、近現代染付片6	

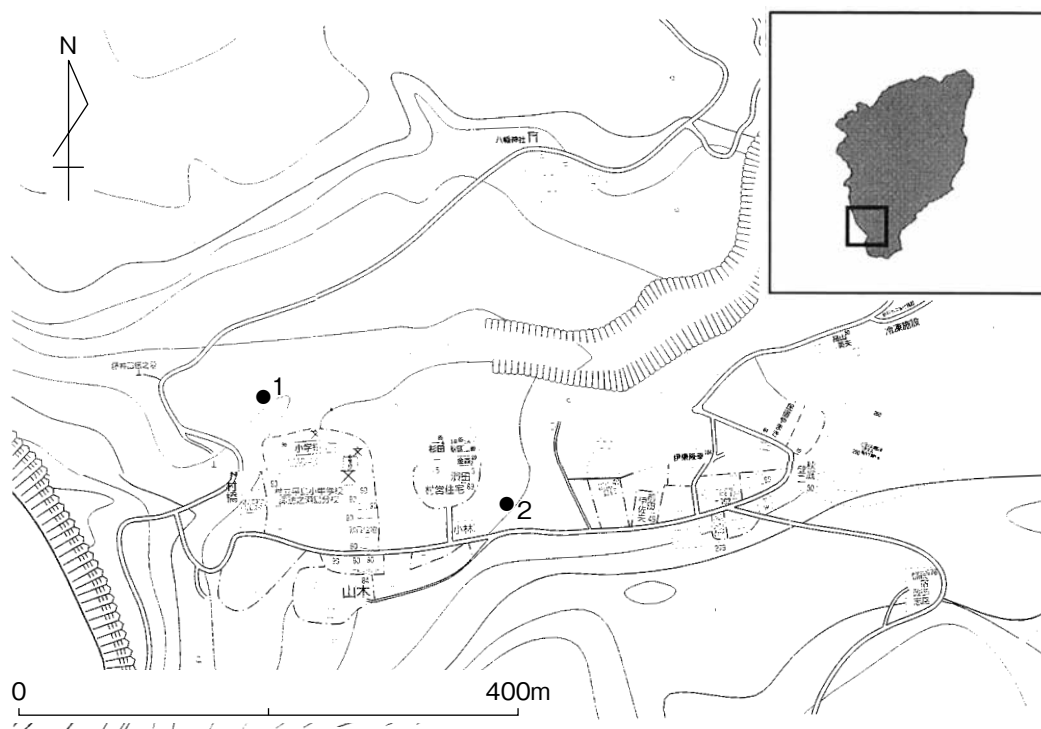


図4-3 諏訪之瀬島採集地点



2地点10点が採集された。本島は文化10年(1813)の御岳噴火により全島民が離島し、明治17年(1883)まで無人島であった。離島以前の旧集落部では、厚い火山灰層の堆積を見ることができる。そのため採集資料は他島に比べきわめて少ない。水の流れていない川状の地点1で縄文土器2点が採集され、また地点2は畑地であり客土の可能性はあるが、清朝青花磁器片1点と近現代の磁器片が採集された。

写4-6-42は縄文土器と思われる土器片2点である。写4-6-43は18～19世紀の清朝磁器片である。写4-6-44は1941～46年に生産された、いわゆる統制陶器で、高台内に「岐508」の染付銘がある。同番号は岐阜県土岐口の「森川縞吉」の製品とされている(山本2012、萩谷2013)。

#### (6) 悪石島(図4-4、表4-5)

悪石島は周囲長12.64km、面積：7.49km<sup>2</sup>を計り、人口は58人である。港と集落は島の西側に所在する。

8地点で25点を採集した。とくに地点1において多くの陶磁器片が採集できた。

図4-10-51(写4-15-83)は大宰府分類Ⅳ類とされる中国白磁碗の底部で、11世紀後半～12世紀前半。図4-10-52(写4-15-84)は菊唐草文を描く清朝青花磁器の小碗で、18世～19世紀か。図4-10-53(写4-15-85)は仙芝祝寿文を描く小皿で18世紀後半～19世紀。図4-10-54(写4-15-86)は備前産摺鉢の底部で6条のカキメが施されている。15～16世紀か。図4-10-55(写4-15-87)は苗代川産の甕底部で、18世紀以後。図4-10-56(写4-15-88)は南中国産の甕底部で、15世紀前半～中葉の沖縄5類に属しよう。図4-10-57(写4-15-89)は苗代川産甕の口縁部で18世紀以後。写4-15-90は簡略化された唐草文を描く18～19世紀の清朝青花磁器片である。

表4-5 悪石島採集資料一覧

地点	資料数	採集遺物	備考
1	11	苗代川摺鉢1、同甕底部1、肥前?甕胴部1、南中国甕底部1、型紙刷り染付皿1、中国青花2、白磁碗(太宰府Ⅳ類)底部1、白磁片2、白薩摩碗胴部1	
2	1	黒釉陶器口縁片1	
3	1	中国青磁片1	金山神社境内
4	5	青花・染付磁器片5	
5	1	沖縄荒焼1	
6	3	苗代川甕口縁1、沖縄荒焼1、陶器片1	ガジュマル巨木下
7	1	中国青花小杯口縁1	
8	2	備前摺鉢底部1、カムイヤキ?片1	

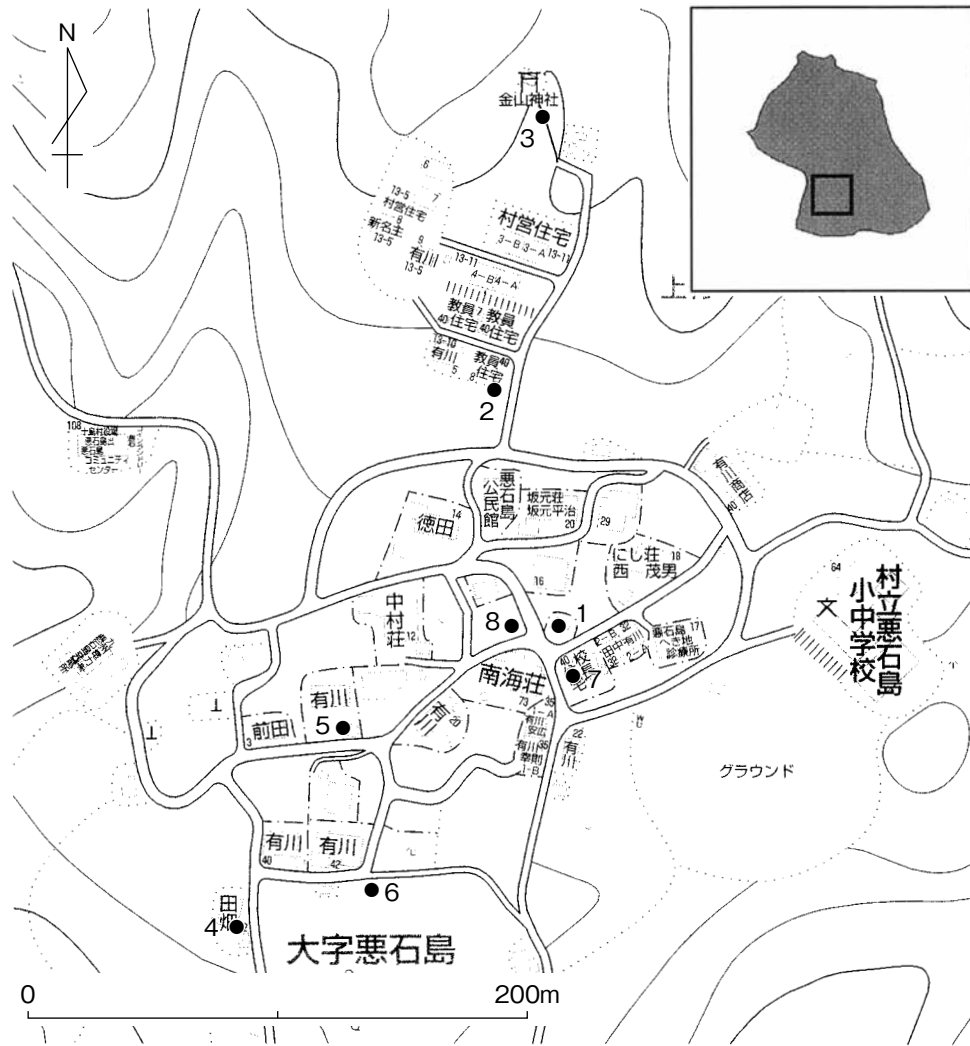


図4-4 悪石島採集地点

#### (7) 宝島 (図4-5、表4-6)

宝島は周囲長13.77km、面積7.14km<sup>2</sup>を有し、127人が住む。港と集落は島の北側に所在する。他の島(小宝島を除く)では港から集落までの間に大きな高低差があるのに対し、宝島は港から集落までなだらかな傾斜面となっている。

18地点75点が採集され、とくに地点11の公園脇ならびに地点12の「上の寺」で多数の陶磁器片が採集された。

図4-11-58 (写4-16-91)は中国龍泉窯系青磁碗で、内底に花形の印文が押される。高台内無釉の沖繩V類で、15世紀前半～中葉。図4-11-59 (写4-16-92)は中国青花の鉢で外面に鳳凰文を描く。内底中央にも染付文様を描くが不明。16世紀。図4-11-60 (写4-16-93)は瀬戸産の卸し皿で、底部は右回転の糸切り痕を残す。口縁部を欠くため詳細な年代比定はできないが、14～15世紀か。図4-11-60 (写4-16-94)は中国青花と思われる脚付小杯で17世紀か。図4-11-62～64 (写4-16-95～97)は清朝青花磁器である。62 (写95)は粗製青花碗で、灰白色の素地に簡略化された双喜文と唐草文を描く。18世紀。63 (写96)は仙芝祝寿文を描く粗製の碗で18世紀後半～19世紀。64 (写97)は簡略化された仙芝祝寿文を内底に描く皿で、62とほぼ同年代であろう。図4-12-65 (写4-16-98)は肥前染付の蓋である。

表4-6 宝島採集資料一覧

地点	資料数	採集遺物	備考
1	3	縄文?土器片2、型紙刷り染付1	浜坂貝塚近傍
2	2	型紙刷り染付皿1、近代染付片1	イギリス坂記念碑近傍
3	2	中国磁器1、染付片1	下の寺近傍
4	6	白磁片1、白色不透明釉陶器瓶片1、陶器片4(苗代川貝目1、荒焼1、荒焼摺鉢片1、不明1)	白色不透明釉陶器は粗製磁器か?
5	1	中国青花片1	粗製
6	3	中国青花碗1(2片接合)、中国?磁器片1、苗代川土瓶蓋1	ガジュマル樹下
7	3	中国青磁片1、近代染付片1、陶器片1	
8	1	中国?青花片1	
9	1	陶器甕胴部片1	
10	4	薩摩染付磁器からから片1、苗代川土瓶口縁1、上焼土瓶蓋1、瀬戸卸し皿1	七郎神社
11	21	中国青磁片1、中国青花碗片3、肥前染付蓋1(3点接合)、染付磁器片8(2点接合、うち1点薩摩)、近代磁器2、陶器片6(2点接合、苗代川壺口縁1など)	公園脇空き地
12	14	中国青磁碗1、中国青花片4、肥前or薩摩染付5、薩摩白磁1(朝顔碗蓋)、不明白磁1、京焼色絵碗1、陶器片1	上の寺
13	1	中国青磁小片1	
14	6	中国青花片4、陶器片2	
15	1	苗代川甕口縁~肩部1(近代か)	
16	3	中国青花1(4点接合、鳳凰文鉢1)、中国?白磁1、苗代川陶器片1	
17	2	中国青花碗1(仙芝祝寿文)、中国青花碗1(3片接合)	
18	1	中国青磁片1(鎬蓮弁文)	

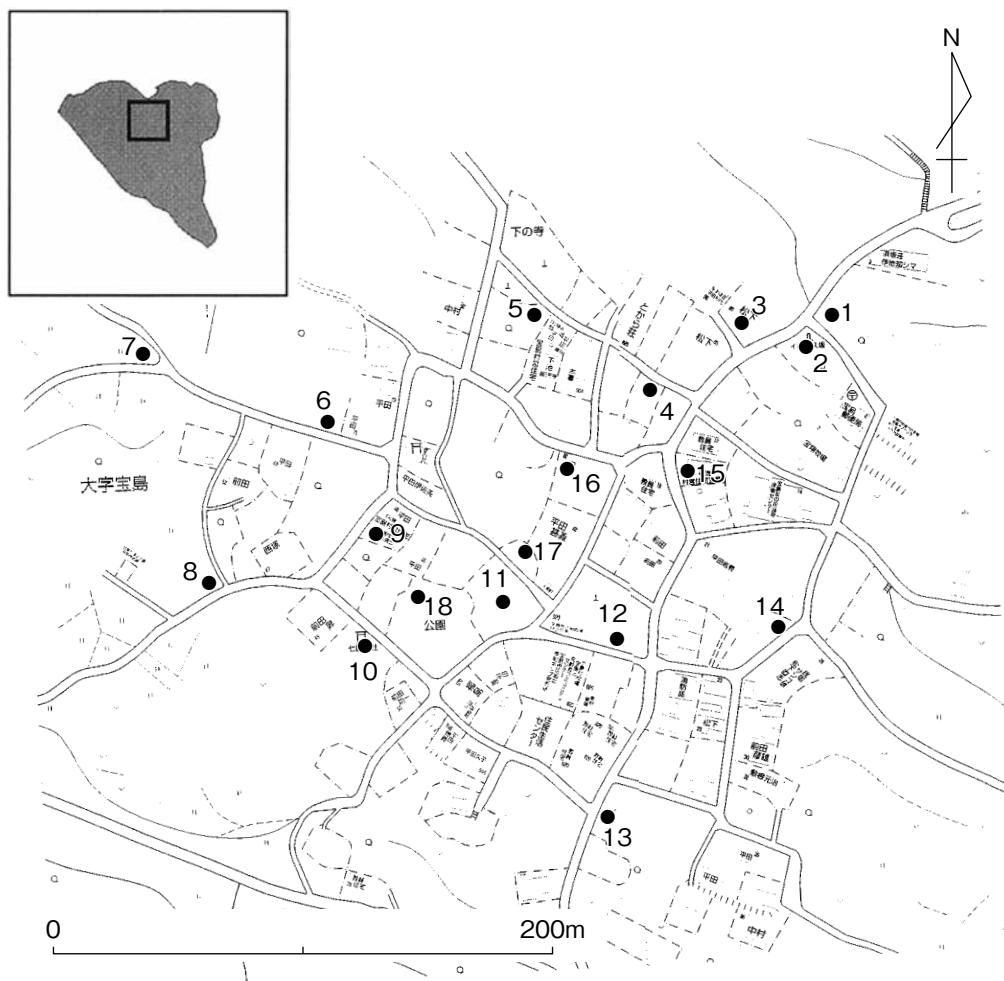


図4-5 宝島採集地点

外面に「寿」字文と獅子文を描き、把手内部に「正年」と読める銘を有する。内面中央には「寿」字文を描く。18世紀後半と考えられ、やや上手の製品である。図4-12-66～68(写4-17-99～101)は薩摩磁器である。66(写99)は白磁朝顔形碗の蓋である。18世紀末以後。67(写100)は端反碗の蓋である。外面に唐草文、内面に丸形の松竹梅文を描く。19世紀中頃である。68(写101)は雪持笹文を描く半筒碗で、18世紀末～19世紀初頭。図4-12-69(写4-17-102)は苗代川甕の口縁～肩部で、二条の突帯を肩部に有する。明治以降のものか。図4-12-70(写4-17-103)は苗代川土瓶の蓋で、鈍い光沢を持つ褐釉を掛ける。18世紀後半以後。図4-12-71(写4-17-104)は沖縄の施釉陶器(上焼)で土瓶の蓋である。鮮やかな青色はコバルトを用いたと思われ、明治以後の製品である。写4-17-105は清朝の粗製青花磁器で18世紀後半～19世紀。写4-17-106は中国青磁片で、15～16世紀か。写4-17-107は清朝青花磁器で、図4-16-95と同類の碗と考えられる。写4-17-108は京焼の色絵碗の胴部片で、赤絵の紅葉文を描く。19世紀か。

## 5. まとめ

### (1) 採集陶磁器の特徴と傾向

以上、報告してきた採集陶磁器をまとめると表4-7になる。

表4-7 十島における主な採集資料

	口之島	中之島	平島	諏訪瀬島	悪石島	宝島
中世	須恵器(古代か)					
	(中国玉縁口縁白磁(11c後半～12c前半) 伊藤2011)				白磁碗(11c後半～12c前半)	瀬戸陶器卍皿(14～15c)
	中国龍泉窯鎊蓮弁文青磁碗(15c前半～中葉) 中国刻線蓮弁文青磁碗(15～16c)	中国龍泉窯青磁鎊蓮弁文碗(13～14c) 中国青花碧苧苧底蕉葉文小皿(16c)			南中国陶器甕(15c前半～中葉) 備前陶器摺鉢(15～16c)	中国龍泉窯青磁碗(15c前半～中葉) 中国青花鉢(16c)
近世	中国青花碗(16c末～17c初)	中国青花蛇の目輪割き皿(16c末～17c初)	中国青花碗(18c)	中国青花碗(18c)	中国青花碗(18～19c)	中国青花脚付小杯(17c)
	中国青花小杯(18～19c)	中国青花端反碗(17c初)	中国青花小杯(18～19c)		中国青花小皿(18c後半～19c)	中国青花碗(18c)
	中国青花碗(18c)	中国青花小杯(17c)	中国青花碗・皿(18c後半～19c)		苗代川陶器甕(18c後半～)	中国青花碗・皿(18c後半～19c)
	中国色絵碗(18c)	中国青花碗(18c)	肥前染付皿(17c前半)			肥前染付蓋(18c後半)
	肥前砂目陶器碗(17c初頃)	中国青花鉢(18c)	肥前染付皿(18c後半)			京焼色絵陶器碗(19cか)
	肥前染付香炉(19cか)	肥前朝毛目陶器碗(17c後半～18c前半)	肥前内野山御縁釉碗(17c後半～18c前半)			苗代川陶器甕(19c～)
	苗代川甕(17c)	肥前染付香炉(19cか)	苗代川陶器摺鉢(18～19c)			苗代川陶器土瓶蓋(18c後半～)
	苗代川摺鉢(18～19c)	肥前波佐見染付丸文碗(19c中頃)	苗代川土瓶(18c後半～)			薩摩染付半筒碗(18c末～19c初)
	苗代川土瓶蓋(18c後半～)	肥前染付八角鉢(18c末～19c中頃)	加治木・始良陶器せんじ碗(18c前半～中頃)			薩摩白磁朝顔形碗蓋(18c末～19c)
	苗代川鉢・甕(19c)	苗代川陶器摺鉢(18c)	加治木・始良陶器碗・小皿(18c後半～)			薩摩染付端反碗蓋(19c中～後半)
	龍門司飛びガンナ皿(18c後半～)	苗代川土瓶(18c後半～)				沖縄上焼土瓶蓋(19c後半～)
	薩摩磁器半筒碗(18c末～19c初)	加治木・始良陶器碗(18c後半～)				
	沖縄荒焼徳利・摺鉢	薩摩染付唐草文蓋物(19c)				
沖縄上焼土瓶把手	荒焼徳利					

古代～中世における資料として、口之島で古代と思われる須恵器片が採集されているが、小片のため詳細な年代、産地推定は難しい。ついで11世紀後半～12世紀後半の白磁が悪石島に見られ、また伊藤慎二も同時期の玉縁口縁白磁を口之島で採集している(伊藤2011 p.14)。先述したように三島においても同時期の白磁が採集されている。この11世紀後半～12世紀前半の中国陶磁は、十島よりさらに南方の奄美諸島や沖縄諸島でも出土しており、博多を中心とした広域の流通圏が形成されていた可能性が考えられ(新里2014)、三島・十島ともにその流通圏に含まれていたと考えることができよう。

13～15世紀には中国龍泉窯の青磁が流通するとともに、沖縄5類とされる南中国産の甕底部(15世

紀前半～中葉)が悪石島で採集されている。同種の甕が沖縄などで多数確認されていることから、15世紀には沖縄からの流通も十島に及んでいたことがわかる。さらに16世紀には中国青花磁器も流通が始まり、日本本土域や沖縄における流通状況と歩調を合わせていると言える。また中世国産陶器として、瀬戸卸し皿(14～15世紀)や備前摺鉢(15～16世紀)も宝島と悪石島で採集されている。備前摺鉢は中世の南九州で広く流通し、また瀬戸卸し皿は鹿児島県南さつま市金峰町の万之瀬川河口域に所在する芝原遺跡などでも出土しており(関他編2012 pp.279-284)、本土域との流通も盛んであったと推測される。

近世本土産陶磁器としては、17世紀前半段階に肥前砂目陶器碗(口之島)や初期伊万里皿(平島)などが採集されている。また臥蛇島には同時期と思われる肥前産の天目碗が伝来している。その後、17世紀後半～18世紀前半の刷毛目陶器碗(中之島)、内野山産銅緑釉碗(平島、臥蛇島伝来品)など肥前陶器の食膳具が見られる。一方、肥前磁器は18世紀以後に流通量を増やすようである。また京焼色絵陶器(宝島)は、役人または在地有力者などに所有されたものであろうか。

17世紀段階の薩摩焼としては、口之島において内面に当て具痕を残す苗代川の甕胴部片を採集している。18世紀以後になると、苗代川の甕や摺鉢、土瓶、加治木・始良系や龍門司の食膳具が流通している。臥蛇島伝来品にも蛇の目釉剥ぎで高台内施釉の18世紀前半の龍門司陶器碗や、18世紀後半以後の白化粧土+高台露胎の龍門司陶器碗が見られ、加治木・始良系陶器の食膳具が広く流通していた状況がうかがいしれる。さらに19世紀に入ると薩摩磁器が、口之島・中之島・宝島で採集されており、橋口亘が指摘するように薩摩磁器の供給先として南西諸島があったことを示唆している(橋口2001)。

以上のような、近世を通じての肥前磁器の流通、18世紀後半までの肥前陶器製食膳具の流通、貯蔵具・調理具としての苗代川陶器、食膳具としての加治木・始良系陶器、19世紀代における薩摩磁器の流通という様相は、鹿児島県本土域のそれとほぼ同じであるといえ(橋口2002、渡辺2002・2010)、本土域における肥前陶磁器・薩摩焼の流通圏に組み込まれていたことを示唆している。

一方、十島における採集資料で特徴的なのは、今回踏査した有人島6島において18～19世紀の清朝磁器が採集された点である。とくに火山堆積物のため採集資料がきわめて少なかった諏訪之瀬島においてさえも清朝磁器1点が採集された。またそれらに先行する青花磁器として、17世紀の端反碗や小杯(口之島)なども見られる。

筆者はかつて平島で採集した清朝磁器の入手方法について、漂着船などから偶発的な入手の可能性を考えたことがあるが(渡辺2013 p.118)、そのときは平島のための調査であった。しかし今回の他の島での踏査成果を踏まえると、十島において清朝磁器が広く流通していたと言える。また鹿児島県南さつま市泊海岸において、同種の清朝磁器が採集されている(橋口1998)。17世紀後半、明清交替により中国磁器の輸出が急減するが、17世紀末にはふたたび輸出されるようになる。しかし日本本土域では肥前磁器がその市場をほぼ独占していたため、17世紀末以後の清朝磁器の流通は少ない(大橋1995など)。一方、沖縄では清朝磁器が豊富に流通していたことが考古学資料からうかがえる(新垣2003・2009)。これら十島や南九州における清朝磁器の流通経路は、沖縄経由であると考えるのが妥当であろう(橋口1999)。ただし現段階で把握されている沖縄出土の清朝磁器と共通するものもあれば、沖縄には見られないものもあるという(沖縄県立埋蔵文化財調査センター・新垣力氏ご教示)。沖縄本島、周辺離島、先島諸島においても清朝磁器を含む近世陶磁器の内容に地域差の存在が指摘されている(新垣2009)。奄美・十島も含めた清朝磁器の地域差とその理由の解明が、今後の課題となろう。

## (2) 資料散布の粗密について

三島における採集資料の観察を通じて、陶磁器散布の密な地点が、役所などの公的施設や寺社といった、島の集落における中心的な地区と関係する可能性を示唆した(第3章)。十島においても同様の視点で陶磁器散布の粗密について検討したい。ただし採集資料の少ない諏訪之瀬島、採集地点の詳細なデータのない平島、伝来資料のみの臥蛇島は除く。

口之島では地点4・6・11・12に比較的多くの陶磁器が散布していた。うち地点11は先述したように、周辺から片付けられた可能性があり、本来の散布地点とはみなしにくい。一方、地点4は現在、住民センターの隣接地であり、集落の中心的な施設の存在が想像される。他の地点については今のところ十分に説明できない。

中之島では「島中どん」と呼ばれるガジュマルの木の下に作られた祠である地点1においてもっとも多くの陶磁器の散布が確認された(写4-1)。これらは祠への奉納品の可能性が考えられ、隣接する地点3の陶磁器も「島中どん」周辺に由来する可能性がある。次いで墓地である「地点2」が多く、墓前への供献品と推測される。

悪石島では地点1がもっとも多い。集落のほぼ中心部に位置する。また同地点には小さな祠があり、その奉納品に由来する可能性もある。

宝島では地点11において多数の陶磁器が採集された。しかし同地点は公園脇の空き地で、地表面は整地されている。それゆえ客土として別の場所から運ばれてきた可能性があり、本来の散布地点ではない可能性がある。地点12は「上の寺」と呼ばれる墓地である。陶磁器は墓域の周辺にかたづけられた墓石類に混じって散布している。採集資料のいずれも食膳具類で貯蔵具などは見られないことから、墓前に供された陶磁器が片付けられたものと推測される。また地点10の七郎神社でも比較的多い。それともうひとつ地点6にも注目しておきたい。同地点はガジュマルの木の下で、清朝磁器の碗一個体が採集されている(写4-2)。このほかガジュマルの根にからまった陶磁器も、他の島も含めいくつかの地点で観察された。中之島の「島中どん」も祠の背後に大きなガジュマルがあり、なんらかの信仰の対象として陶磁器(ないしはその中の供物)が捧げられた可能性が考えられる。

以上、十島における陶磁器の散布状況を見ると、散布が密な地点として、各島の集落の中心部(口之島・悪石島)と考えられる地点とともに、祠や墓地、ガジュマルの木の下などの地点(中之島・宝島)



写4-1 中之島「島中どん」



写4-2 宝島・地点6

が挙げられる。前者は三島でも推測したように、公的施設や島の有力者の居住地などが所在した可能性が考えられる。後者については、信仰の対象や墓前への奉納・供献品であった可能性が考えられる。ただし前章でも触れたように、古地図などとの照合による検証が必要であり、また表面調査という方法的限界もわきまえておく必要がある。

## 注

- (1)ただし第8章で触れるように、幕末期において諏訪之瀬島にも公用船が派遣されており、なんらかの形で人が居住していた可能性もある。
- (2)各島の周囲長・面積・人口については十島村HPの記載による。  
<http://www.tokara.jp/index.html> (2014年12月17日確認)
- (3)このほか悪石島や中之島、宝島などに伝来していた甕や壺、瓶、皿などが計12点、展示されていたが、ここでは取り上げない。

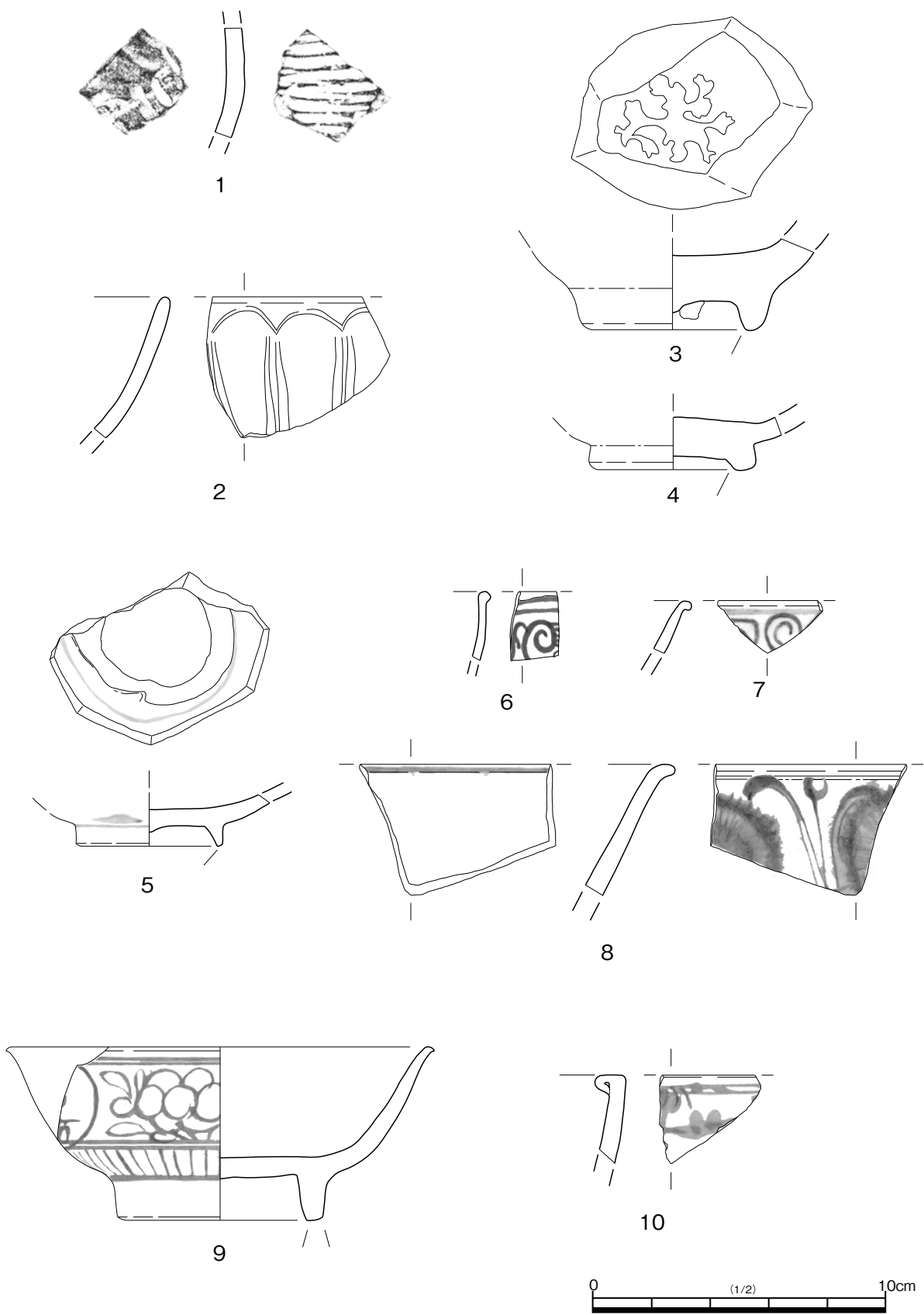


图4-6 口之島採集資料実測图(1)



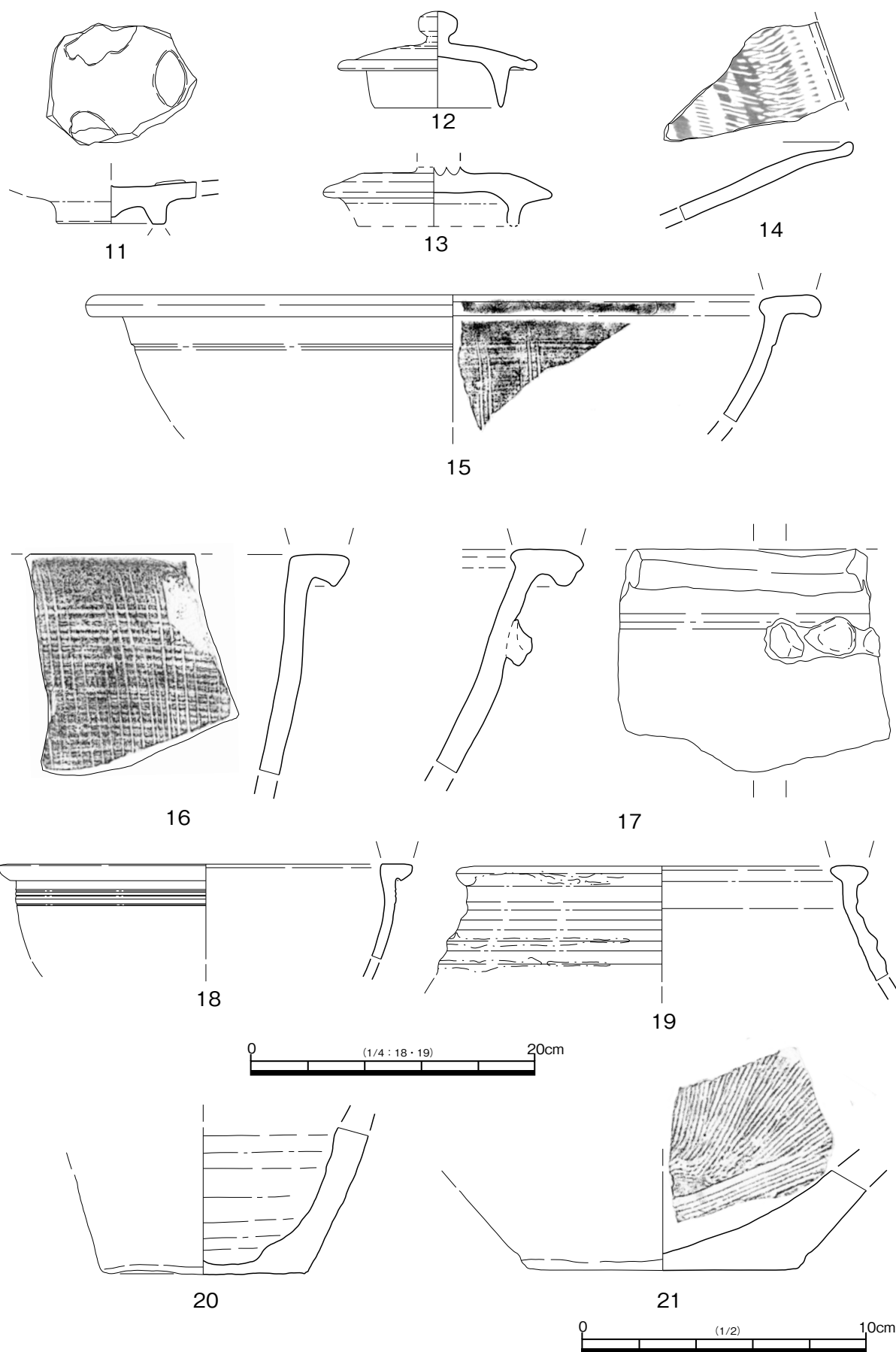


图4-7 口之島採集資料実測图(2)

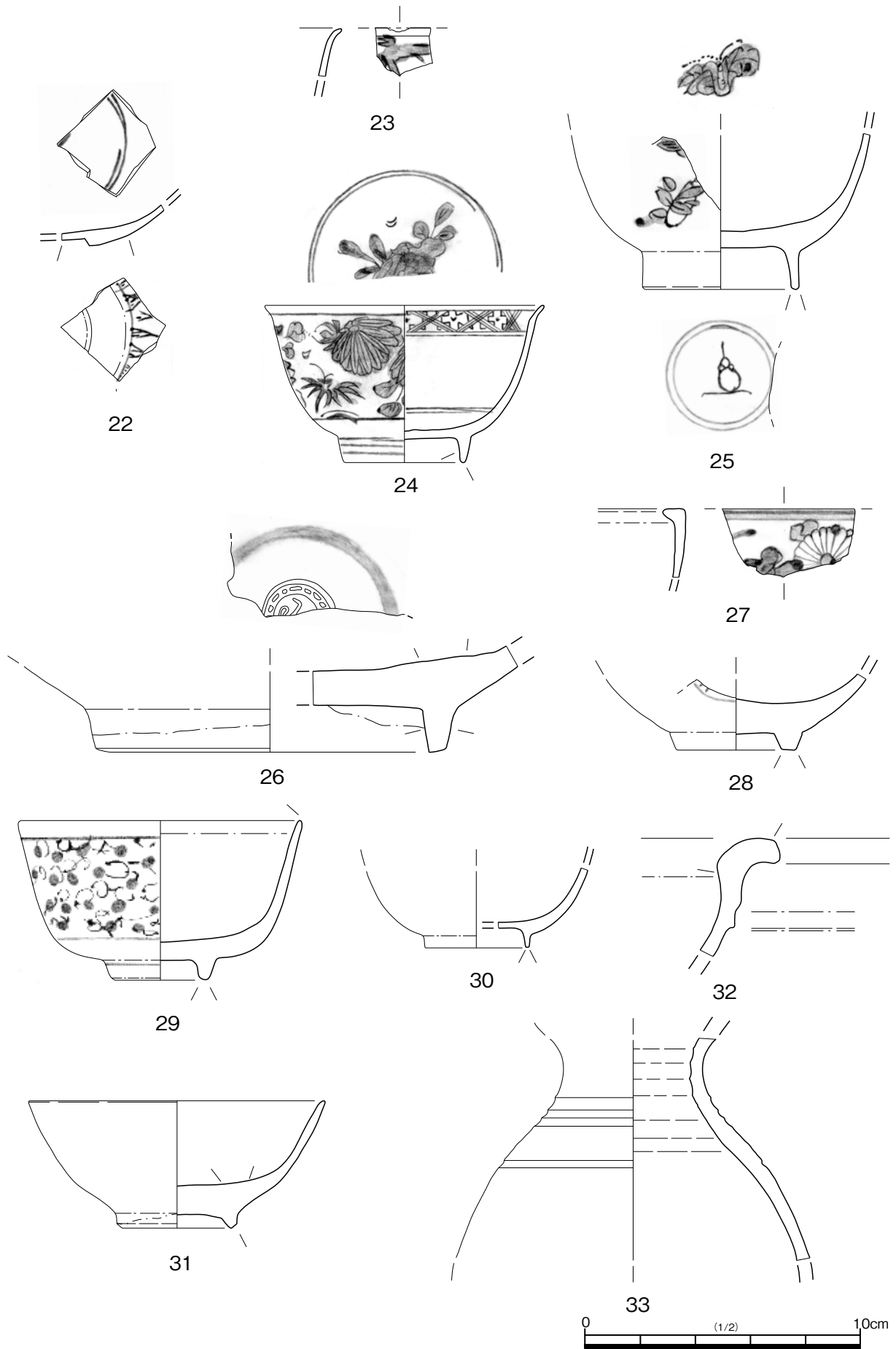


图4-8 中之島採集資料実測図

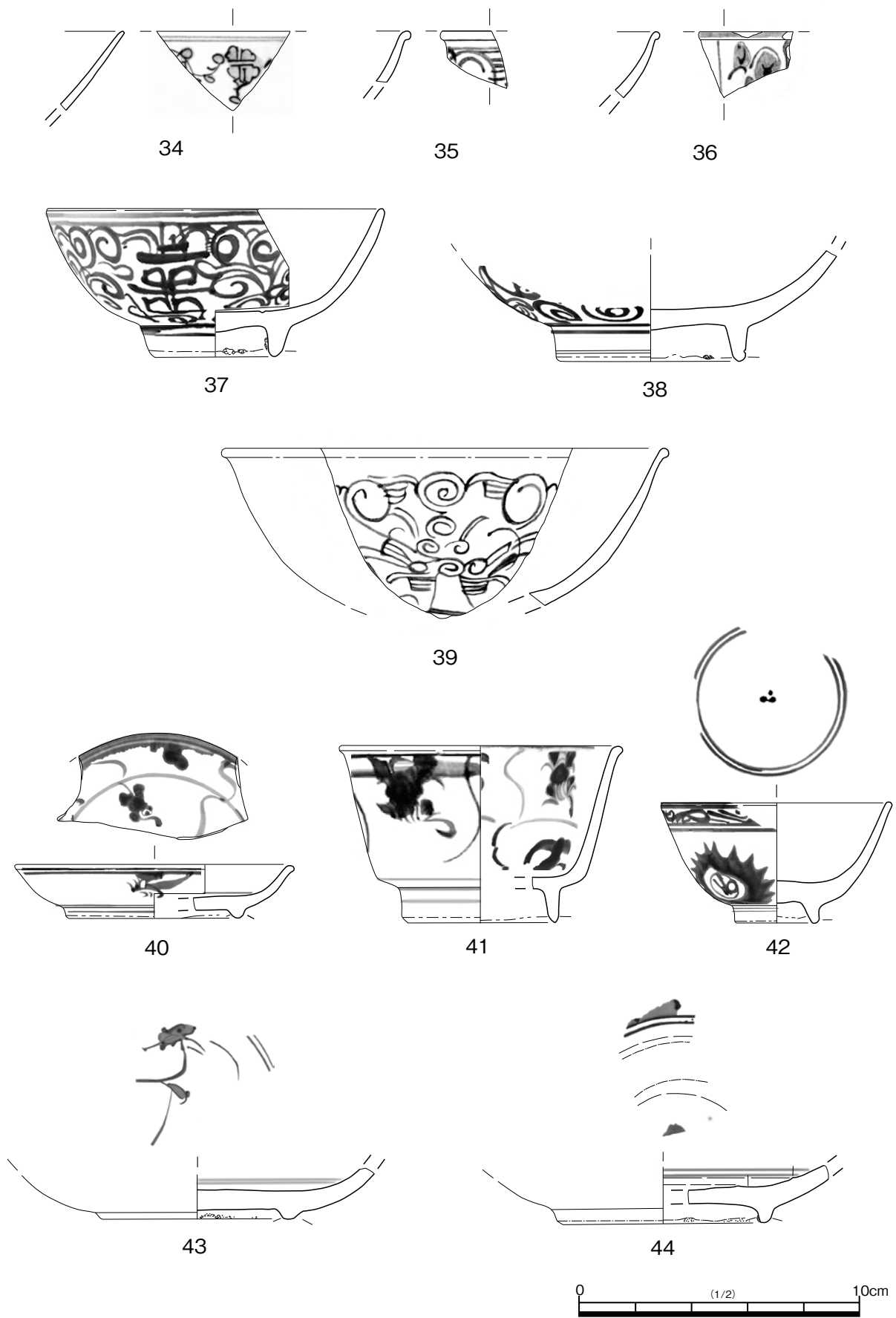


图4-9 平島採集資料実測図(1)

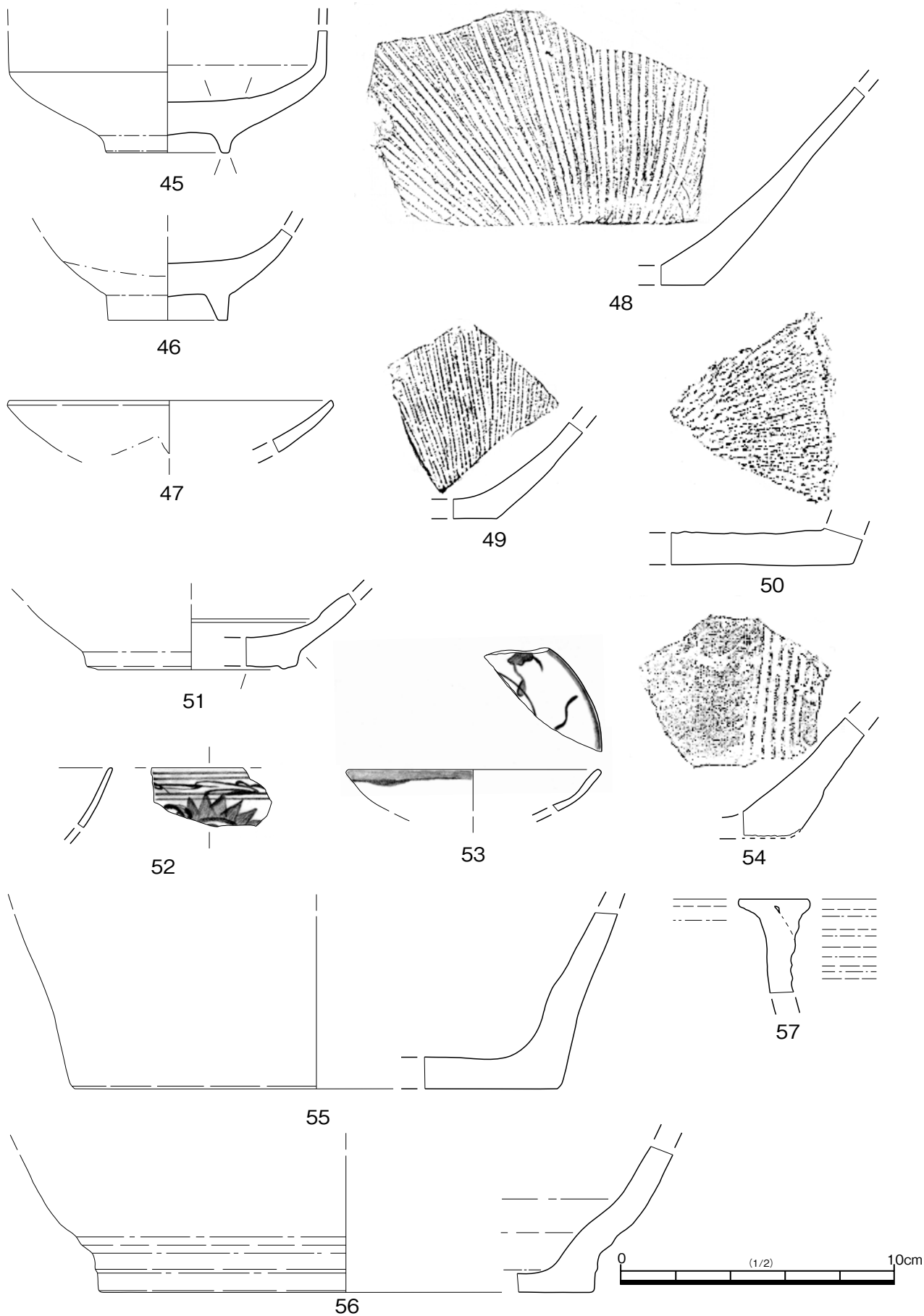


图4-10 平島採集資料実測図(2)・悪石島採集資料実測図(51~57)

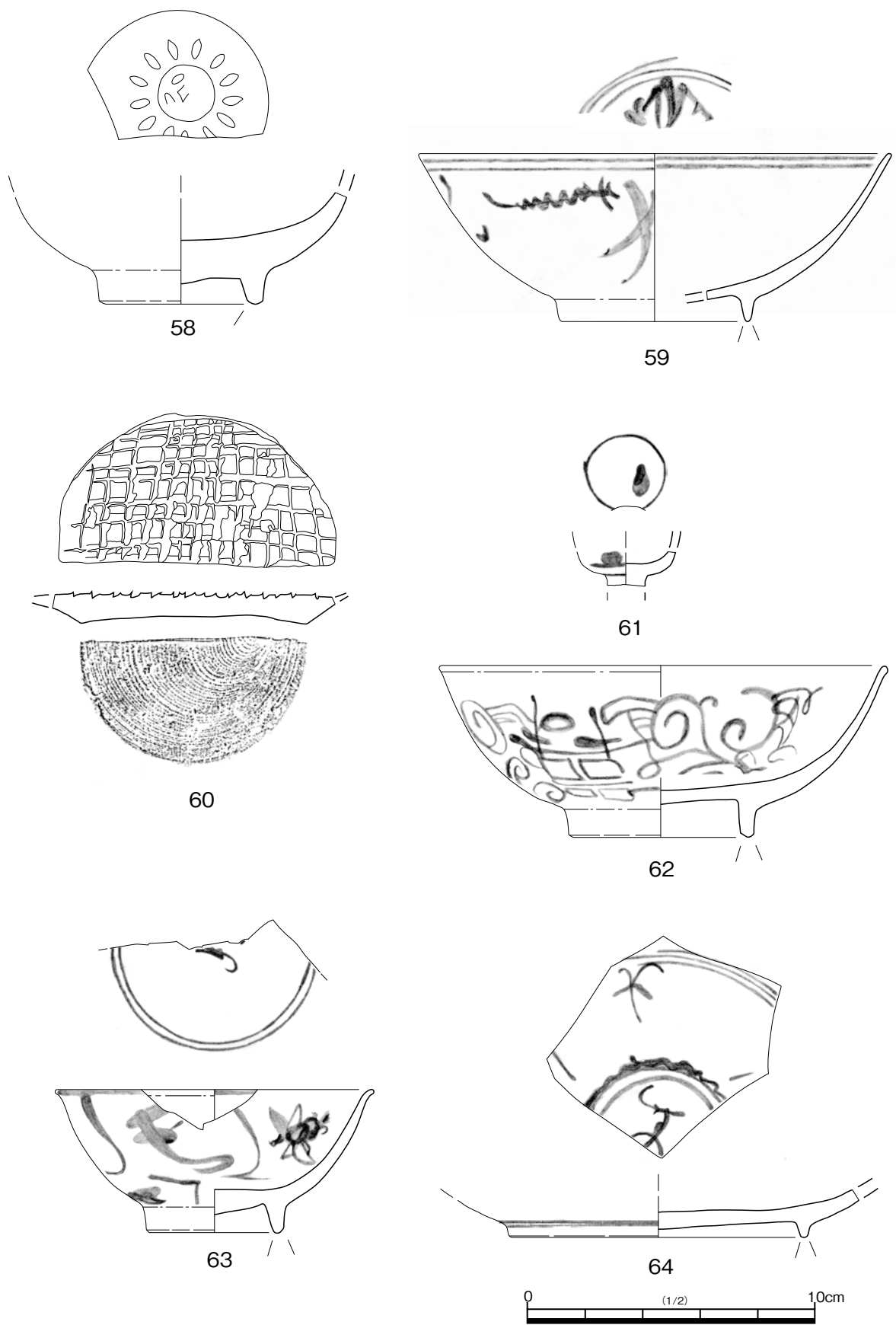


图4-11 宝岛採集資料実測图(1)

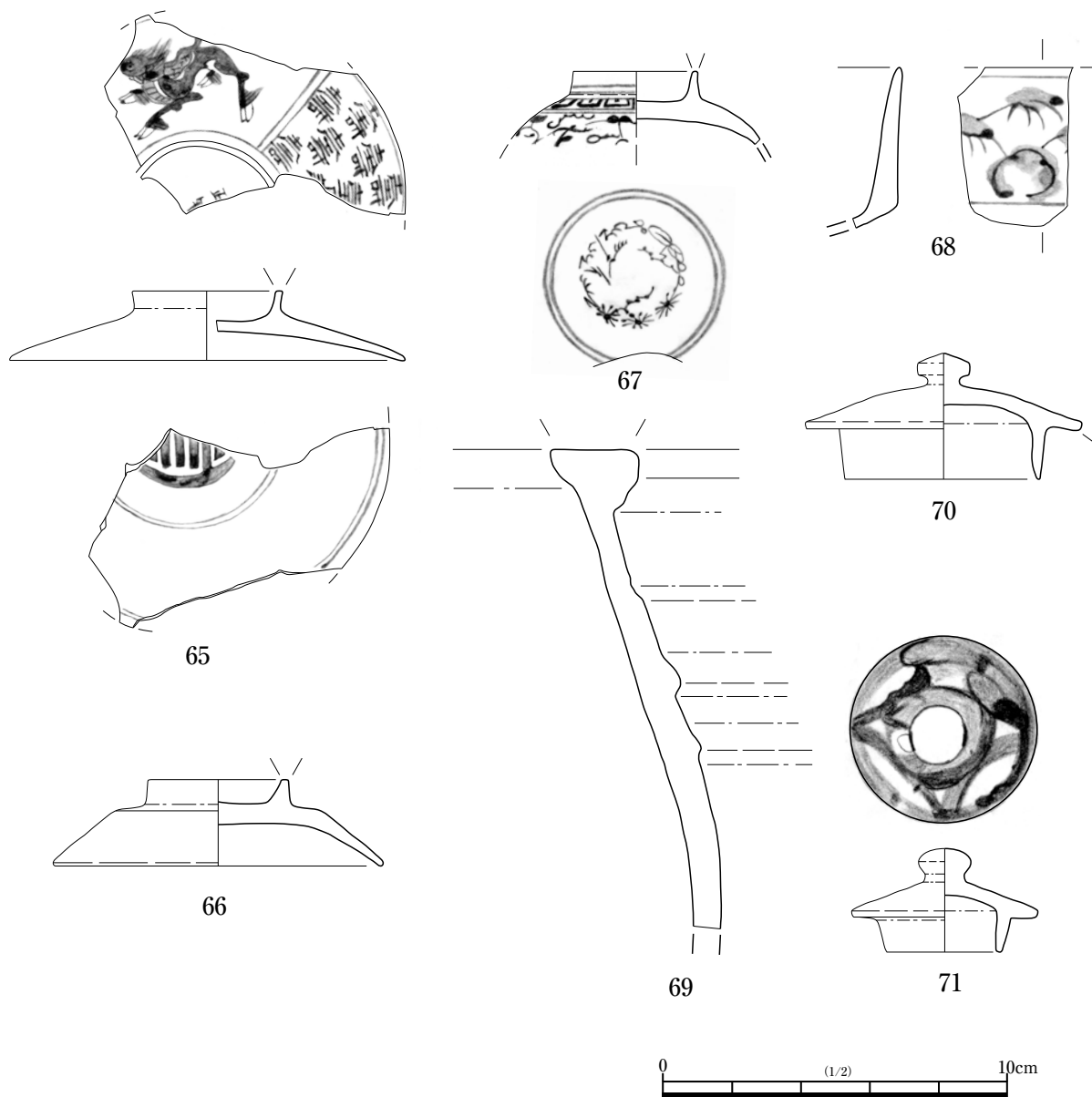
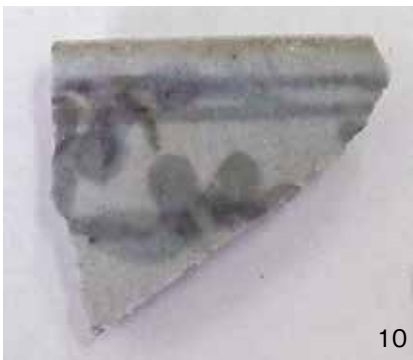


图4-12 宝島採集資料実測图(2)



写4-3 口之島採集資料(1)



15



16



17



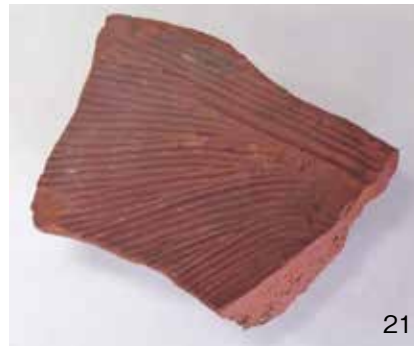
18



19



20



21



22



23



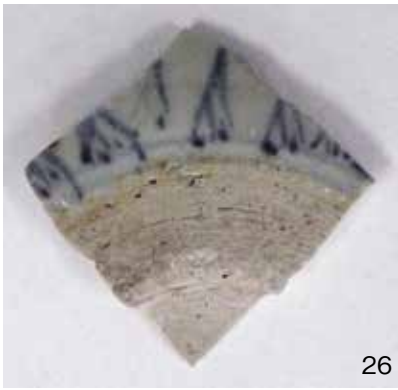
24



25

写4-4 口之島採集資料 (2)





写4-5 中之島採集資料(1)



38



39



40



41



42



43



44

写4-6 中之島採集資料(2)・諏訪之瀬島採集資料(No.42~44)



45 肥前天目碗



46 肥前天目碗



47 肥前内野山  
銅緑釉碗



48 肥前内野山  
銅緑釉碗

写4-7 臥蛇島伝来の近世陶磁器 (1)



49 肥前内野山  
銅緑釉碗



50 肥前内野山  
銅緑釉碗



51 肥前内野山  
銅緑釉碗



52 肥前内野山  
銅緑釉碗

写4-8 臥蛇島伝来の近世陶磁器 (2)



53 薩摩龍門司碗



54 薩摩龍門司碗



55 薩摩龍門司碗



56 薩摩龍門司碗

写4-9 臥蛇島伝来の近世陶磁器 (3)



57 薩摩龍門司皿



58 薩摩龍門司瓶



59 肥前染付笹文碗



60 肥前染付笹文碗

写4-10 臥蛇島伝来の近世陶磁器 (4)



61 肥前染付  
格子文碗



62 肥前染付  
格子文碗



63 肥前染付  
格子文碗



64 肥前染付  
格子文碗

写4-11 臥蛇島伝来の近世陶磁器 (5)



65 肥前染付松文瓶

写4-12 臥蛇島伝来の近世陶磁器(6)





66



67



68



69



70



71



72



73



74

写4-13 平島採集資料(1)



75



76



77



78



79



80



81



82

写4-14 平島採集資料(2)



83



84



85



86



87



88



89



90

写4-15 悪石島採集資料



91



92



93



94



95



96



97



98

写4-16 宝島採集資料(1)



写4-17 宝島採集資料 (2)



報告編

II

瀬戸内町立図書館・郷土館保管の  
旧家伝来陶磁器調査報告

## 第5章 瀬戸内町立図書館・郷土館保管の旧家伝来陶磁器調査報告

### 1. 調査の目的と概要

#### (1) 調査目的

本調査は、奄美大島瀬戸内町加計呂麻島の旧家である西家ならびに武家に伝来し、現在、瀬戸内町立図書館・郷土館が保管している陶磁器資料を調査することにより、奄美における近世・近代の陶磁器流通とその所有形態の一端を明らかにするために実施した。

#### (2) 調査方法

資料について1件ずつデジタルカメラで撮影し、同時に法量を計測した。その上で、先行研究を参照しつつ、産地・年代等を推定した。また産地・年代推定に際しては大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）のご教示を得た。記して感謝申し上げたい。なお西家・武家伝来資料には、陶器の甕・壺類、漆器類もあるが、今回は調査していない。

#### (3) 調査期間

予備調査：2013年9月12日（金）～14日（日）

本調査：2013年11月14日（木）～17日（日）

#### (4) 調査参加者

予備調査：渡辺芳郎

本調査：渡辺芳郎、真邊彩（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科、当時）

#### (5) 調査協力

瀬戸内町立図書館・郷土館（鼎丈太郎氏・鼎さつき氏）

### 2. 西家・武家について

#### (1) 西家：鹿児島県大島郡瀬戸内町伊子茂

##### 由来

記録には残っていないが、西家について以下の言伝えが残っている。

西家の初代能悦は、薩摩加世田の城勤めの際に、島流しになる。その後、18世紀の後半、五代目能悦の頃に加計呂麻島薩川から同島伊子茂へ移住した。五代目能悦は郷土格を得て、西姓を名乗る。西家は、代々、与人（藩政時代、島出身者が就くことが出来た最高位の役職）など役人や戸長をつとめた家柄で、現在の瀬戸内町一帯で力を持っていた。

良港であった伊子茂湾を拠点として、琉球との交易も深めていたようで、西家には、島外産の多くの品々が残されている。西家の繁栄を偲ばせる品々は、戦時中の混乱期にその多くを喪失してしまったが、それでも屏風、種子島銃、陣笠、風炉、化粧箱、敷物、ノロの祭祀具、錫製酒器、陶磁器などの品々が残され、現在重要資料として瀬戸内町立郷土館に保管されている。

##### 郷土館保管の経緯

戦火を逃れた西家資料は、加計呂麻島伊子茂の西家住宅（町指定有形文化財：建造物）に保管されていた。島外産の品々など当時の有力者の生活や交流など、島の歴史を知る重要な資料として、昭和56年（1981）5月13日に町指定文化財に指定された。



その後、西家資料は、管理者不在により保存・管理が困難になっていた。平成7年(1995)、瀬戸内町立郷土館が開館することもあり、平成7年1月16日西家管理者立会のもと、町へ寄託されるに至った。瀬戸内町立郷土館開館後は、町にて展示活用や保管管理を行っている。

(2) 武家：鹿児島県大島郡瀬戸内町瀬武

由来

『連官史』(松下編2006 pp.393-425)によると、武家は、寛政5年(1793)に朝恵喜が西間切黍見廻役となったのをはじめとして、西間切筆子、間切横目など、代々役職につくようになり、文政9年(1826)に、郷土格を得ている。現在でも加計呂麻島・瀬武集落では、重厚な石垣に囲まれた武家屋敷が残っている。

武家の墓所は、集落民の墓所とは別に設けられており、古い墓碑の年号は、文政11年(1828)、弘化2年(1845)、安政2年(1828)と書かれたものがある。

武家が所蔵していた資料は多種多様であるが、注目する資料として古文書群がある。享保13年(1728)と記載された「琉球大嶋西間切瀬武村御検地帳」をはじめとし、「津口横目辞令書」「竹木横目辞令書」「砂糖積船文書」「砂糖出入帳」「本払帳」などの資料の他、明治期の「座禅法」「論語」「三体千字文」「国史略」など貴重な文献資料が数多く残されている。

郷土館保管の経緯

武家所蔵資料は、加計呂麻島瀬武集落の武家に保管されていたものである。しかし、管理者が高齢になり、資料の保存・管理が困難となったため、武家管理者より、瀬戸内町へ数回に分けて資料の寄贈がなされた。現在、当該資料は、瀬戸内町にて展示活用や保管・管理を行っている。(鼎丈太郎)

3. 西家伝来陶磁器に関する報告

(1) 材質・装飾技法

表5-1 西家伝来資料の概要(件数、( )内は点数)

	計	磁器				陶器			備考
		白磁	染付	色絵(注)	染付金彩色絵	色絵金彩	白薩摩	他	
皿	大皿	9(9)		8(8)※	1(1)				※うち1点は角皿
	皿	4(34)		1(9)	2(15)	1(10)			
	小皿	1(2)				1(2)			
碗	4(39)		1(10)		3(29)				
鉢	3(24)		1(12)	1(2)※		1(10)			※うち1点は西家以外伝来
杯	1(1)					1(1)			
瓶	8(10)	1(1)	2(2)	2(4)		2(2)	1(1)		
盃台	2(3)		1(1)※	1(2)					※青磁染付
丁字風炉	5(5)		1(1)				3(3)	1(1)※	※白地黒土象嵌
唾壺	2(5)	1(3)					1(2)※		※千鳥印
蓋物	1(1)				1(1)				
水注	1(1)							1(1)	鉄絵呉須
合計	41(134)	2(4)	14(34)	5(17)	7(46)	6(25)	5(6)	2(2)	

(注) 染付色絵と色絵のみの両者を含む

調査した陶磁器は全体で41件134点である。このうち磁器が28件101点、陶器が13件33点で、磁器が件数比で68.3%、点数比で75.4%と、陶器より比率が高い。これは、多くが陶器製である甕や壺など

の貯蔵具が調査対象に含まれておらず、食膳具類が中心であったことによるものであろう。貯蔵具を含めると陶器の比率はもう少し増えると予想される。

磁器のうち染付が14件34点と、件数ではもっとも多いが、染付色絵金彩も7件46点と、点数ではこちらの方が多い。色絵（染付色絵を含む）は5件17点、白磁は2件4点である。陶器では色絵（一部金彩）を施すものが6件25点と件数・点数でもっとも多いが、白色素地に透明釉をかけた白薩摩も5件6点を占める（ただし1件2点には染付による「千鳥印」が描かれる。通常、千鳥印のみを有するものは白薩摩に含める）。ほかに白素地黒土象嵌製品と鉄絵呉須の製品が各1点ある。

## (2) 器種

### <磁器>

表5-2 西家伝来磁器の概要（件数、（ ）内は点数）

		磁器	近世	近代	肥前	薩摩	関西	九州	不明
皿	大皿	9 (9)	9 (9)	3 (3)	6 (6)	9 (9)			
	皿	4 (34)	3 (24)		3 (24)	2 (10)			2 (15)
	小皿	1 (2)							
	碗	4 (39)	4 (39)	4 (39)	4 (39)				
	鉢	3 (24)	2 (14)	1 (12)	1 (2)	2 (14)			
	杯	1 (1)							
	瓶	8 (10)	5 (7)	4 (6)	1 (1)	4 (6)			1 (1)
	盃台	2 (3)	2 (3)	2 (3)		2 (3)			
	丁字風炉	5 (5)	1 (1)	1 (1)			1 (1)		
	唾壺	2 (5)	1 (3)	1 (3)		1 (3)			
	蓋物	1 (1)	1 (1)	1 (1)		1 (1)			
	水注	1 (1)							
	合計	41 (134)	28 (101)	17	11				

磁器において件数が多いのが皿で、12件33点を数える。そのうち口径30cm前後の大皿が9件9点を占める点、西家伝来資料の特徴と言える。ただし1件1点は角皿である（西9）。西1には木箱が残っており、その蓋に「明治五申十月吉日／肥前焼大鉢入／西氏」の箱書きがある。この皿が明治5年（1872）10月に購入されたこと、また当時は大皿を「大鉢」と呼んでいたことがわかる。これら大皿は、本土地域においても庄屋など地域の有力者の旧家に伝来品としてしばしば見られるもので、地域でのさまざまな接待や宴席の場において使用されたものと推測される。西家が加計呂麻島伊子茂の「与人」と呼ばれる在地の有力者であったことによるものであろう。色絵金彩を施す1件（西3）以外はいずれも染付である。また近代の銅版転写の染付3件（西4・5・6）は、口唇部が波状を呈し、鉄釉が施される、いわゆる「イゲ皿」である。

大皿より小型の皿は3件24点で、いずれも9点（西10）、10点（西11）、5点（西12）の組物である。このうち西10は、白度の高い素地に、白い余白を大きく残して花文や蝶文などを色絵で描く、柿右衛門様式風の皿である。底部は7点が碁笥底を呈し、底の周囲が蛇の目釉剥ぎされている。ほかに高台を作るもの1点、平底で蛇の目釉剥ぎする底部のものが1点ある。底部が異なる2点は、他の7点と同時に製作され購入されたのではなく、破損等による補充として購入された可能性も考えられる。

碗は4件39点がある。いずれも10点前後の組物である。西14は色絵の半筒碗10点が木箱に入っており、残念ながら蓋は残っていないが、木箱側面に「茶之碗入」「□（西か）氏」と墨書がある。これらが喫茶用の碗であることが知られる。他の3件はいずれも蓋付碗である。西13もやはり木箱入りだが箱

書きはない。色絵の蓋付碗で、蓋が5点、身が9点残る。ほかに色絵蓋付端反碗（西15）と染付蓋付碗（西16）がある。前者は蓋9点・身10点、後者は蓋・身ともに10点である。西15は本来10客のセットだったのではないかと想像される。蓋付碗はいずれも口径が11cm以上をはかり、また後述する武家伝来資料（武9～12）の組み合わせから、飯碗と推測される。これらは大皿や組物の皿と同様に宴席などで用いられたと考えられる。

鉢は2件14点がある。西17は染付で唐草文を描く鉢12点である。また西18は色絵鉢であるが、うち1点は「永井島晴蔵」のシールが貼ってあり、西家伝来ではない。しかしもう1点と同じ法量・器形・文様であることから、本来はセットであった可能性も考えられ、ここに含めた。

瓶は5件7点がある。西23と西24はともに色絵製品で2点1組となっている。神棚や仏前での使用が想像される。他は染付2点、白磁1点である。西26・27は徳利と言える。

盃台は2件3点ある。西31は2点1組の色絵盃台で、西32は青磁染付である。後者は青銅製の鏝で2ヶ所補修されており、大事に扱われていたことがわかる。

染付丁字風炉が1件1点ある（西37）。後述するように西家には陶器製の丁字風炉が4件4点伝来しており、これを含めると5件5点となる。現段階で他の旧家所蔵品の様相は把握していないが、このように丁字風炉が数多く伝来している点は西家の特徴と言えるかもしれない。染付丁字風炉は、釉調がやや青みを帯び、呉須の発色も鈍いことから薩摩磁器である可能性が高い。

白磁の唾壺が1件3点ある（西39）。器高にわずかな違いがあるが、ほぼ同形同大であることから1件とした。唾壺と呼ぶが、盃台として使用されたと思われる。やや青みを帯びる釉調から薩摩磁器の可能性もある。なお後述するように白薩摩の唾壺1件2点（西38）があり、丁字風炉と同様に唾壺も両者が関係する可能性がある。

色絵の三足付蓋物が1件1点（西40）ある。

## <陶器>

表5-3 西家伝来陶器の概要（件数、（ ）内は点数）

		陶器	近世	近代	肥前	薩摩	関西	九州	不明
皿	大皿	9 (9)							
	皿	4 (34)	1 (10)	1 (10)			1 (10)		
	小皿	1 (2)	1 (2)	1 (2)			1 (2)		
碗		4 (39)							
鉢		3 (24)	1 (10)	1 (10)			1 (10)		
杯		1 (1)	1 (1)	1 (1)			1 (1)		
瓶		8 (10)	3 (3)	3 (3)		3 (3)			
盃台		2 (3)							
丁字風炉		5 (5)	4 (4)	4 (4)		4 (4)			
唾壺		2 (5)	1 (2)	1 (2)		1 (2)			
蓋物		1 (1)							
水注		1 (1)	1 (1)	1 (1)				1 (1)	
合計		41 (134)	13 (33)	6 (6)					

皿は1件10点がある（西19）。いずれも内底に山水文や果樹文、椿・あやめ・水仙などの花草文、印籠文を描く色絵製品で、赤絵で「乾」銘が記されることから、乾山を模した製品と思われる。無釉の高台内には3～4ヶ所のトチン跡が見られ、関西系の製品と推測される。同じような乾山風の製品には輪花鉢1件10点（西20）、輪花小皿1件2点（西21）、輪花小杯1件1点（西22）があり、おそらく本来

は皿+鉢+小皿+小杯よりなる10客の揃いではなかったかと想像される。

瓶は3件3点ある。西28は色絵で菊花文を胴部に施す双獣環耳花瓶で、幕末・明治期の輸出用色絵薩摩に近しいものである。ただし同製品には金彩が施されておらず、また文様で器表面を埋め尽くす金襴手様式ではない。色絵薩摩としても初期、幕末～明治初頭の製品ではないかと考えられる。西29は白薩摩の双耳花瓶である。緻密に締まった白素地から近代以後の製品と思われる。西30は銚子である。色絵と金彩で簡素な蔓草文を描き、赤絵で、胴部下端に「陶弘」銘を、底部に「サツマ」と書く。「陶弘」は、明治以後、鹿児島市内で多数の色絵薩摩を生産し、「陶弘山」銘を用いた隈元製陶所を指すと考えられる。

丁字風炉は4件4点ある。うち3件3点が白薩摩であり(西33・34・35)、1件1点が白素地黒土象嵌製品である(西36)。白薩摩の3点の風炉部分は、丸形(西33)、円筒形(西34)、釜形(西35)とそれぞれ異なる。このヴァリエーションは使用者の何らかの意図が反映されているのだろうか。白地黒土象嵌製品の象嵌文様は風炉の肩部から花卉文、格子文、花卉文、垂下文よりなる。類似の文様は鹿児島城本丸跡などで多数出土している豎野窯産と考えられる象嵌製品と共通し(戸崎他編1983)、白薩摩の丁字風炉とともに豎野窯製品の可能性が高い。

豎野窯は薩摩藩の藩窯であるが、その製品には御用品と商品(商売焼)があったことが、文献から知られている(深港2013)。橋口亘(2001)によれば奄美大島において「白焼」製品が本土地域より高額で売買されていた可能性が指摘されている。西家の白薩摩・象嵌製丁字風炉などが御用品なのか(藩庁からの提供?)、商品なのかは現段階で判別できないが、豎野窯製品の島嶼部における流通のあり方を考える上で、貴重な手がかりを提供していると言える。

白薩摩の唾壺は1件2点(西38)がある。ほぼ同形同大で、ともに胴部下端に染付の千鳥印が入ることから1件とした。先述の磁器の唾壺と同様、盃台として使用されたのであろう。

水注1件1点(西41)は、胴部に鉄絵と呉須で松文を描く。九州産と推測される。

### (3) 産地と時期

表5-4 西家伝来陶磁器の時期と産地(件数、( )内は点数)

年代	件数	磁器	肥前	薩摩	不明	陶器	薩摩	関西	九州
近世	23	17	15	2		6	5		1
幕末・近代初	1					1	1		
近代以後	17	11	8		3	6	2	4	

磁器の産地は、近世・近代あわせて28件中23件と、肥前産が大半を占める(一部「肥前か」を含む)。産地不明とした3件はいずれも近代以後の製品である。薩摩磁器も2件あるが、少数例にとどまり、その器種も丁字風炉、唾壺とやや特殊な形態である。幕末期には薩摩磁器の端反碗など量産品がかなり流通していたと考えられるが(渡辺2007 pp.117-124)、このような丁寧に扱われ伝来するような製品においては、やはり肥前産が多くを占めていたのであろう。ただし同じ肥前産でも有田製品と思われる製品(西40など)とともに、幕末期に大量に流通した塩田産(志田焼)の大皿(西2)など、その品質には若干の差異もある。

一方の陶器は近世・近代をあわせて13件中8件が薩摩産である。ただし近世についていえば、丁字風炉4件、唾壺1件と、かなり偏りがある。また薩摩磁器の器種が同じく丁字風炉と唾壺であること

と何らかの関係があるのであろう。甕や壺など貯蔵具については調査していないため、薩摩産陶器の全体的な比率は不明であるが、加治木・始良系の陶器製日用食器は含まれていない。奄美諸島の近世遺跡からは加治木・始良系陶器が出土しており（沖永良部島和泊町根皿原遺跡など、北野編2009）、文献でも龍門司製品の流通が確認されている（橋口2001）。加治木・始良系陶器の欠如は、伝来品という性格に由来すると考えられる。関西系陶器は4件とやや比率が高いが、この4件はいずれも乾山風の皿・鉢・小皿・小杯であり、一括してセットで購入したものと考えられる。

次に編年的研究が進んでいる肥前磁器を中心に、伝来資料の年代的推移を検討する。

近世の肥前磁器は15件を数える。うち18世紀代と推測されるものとして、西40の色絵三足蓋物（18世紀前半～中葉）、西14の色絵半筒碗（18世紀後半）、西25の染付瓶（18世紀後半）の3件があるが、他の12件はいずれも19世紀代（～幕末）である。薩摩磁器についても、染付丁字風炉（西37）は、幕末期に流行する楼閣山水文を描くことから19世紀中頃と推測され、唾壺3件（西39）は白磁なので年代判定が難しいが、同じ時期ではないかと想像される。

近代以後の磁器については年代推定が難しいが、銅板転写製品（西4～6・8）は明治後半～大正期に盛んに作られている。また型紙刷り製品（西7）はそれに比べやや先行するであろう。

陶器のうち豎野産薩摩焼については編年的研究が進んでいないため、白薩摩や象嵌製品については、素地の質から近世と考えられるが、詳しい年代は保留する。また九州産の水注（西41）も大橋康二氏のご教示によれば近世だという。西28の色絵双獣環耳花瓶は先述したように幕末～明治初頭の製品と考えられる。近代以後の製品では西30の「陶弘」銘色絵銚子、乾山風食器セットなどがある。

#### 4. 武家伝来陶磁器に関する報告

武家伝来資料は、合計12件と、西家に比べると少ない。それゆえその器種組成などは、武家所蔵陶磁器のそれを反映しているとは言いがたく、ここでは個別的に資料を検討していきたい。

##### (1) 大皿

染付の大皿4件4点がある（武1～4）。いずれも肥前産であるが、武1は白化粧土を用い、高台内のハリ支え痕が大きいことから、塩田産（志田焼）と考えられる。また武2・3の染付絵付けが精緻であり、有田産の可能性もある。いずれも19世紀代の製品である。

##### (2) 長皿

染付の長皿1件7点がある（武5）。内面は周囲に唐草文を巡らせ、中央に角形の松竹梅を描く。高台内には「大明／年製」の銘がある。18世紀末頃の肥前製品である。

##### (3) 八角鉢

同一デザインで法量の異なる染付八角鉢が3点ある（武6・7・8）。内底見込みには宝尽文、内面器壁には4面に区画され、窓絵花卉文とその背景に亀甲文と毘沙門亀甲文で埋める。口縁部は七宝繋ぎ文が巡り、外面は口縁下に雲文がめぐり、胴部は線文で8面に区画され、それぞれ窓絵花卉文が描かれる。高台内には二重枠線内に「宣徳／年製」銘が記される。佐賀県立九州陶磁文化館の柴田コレクションに同一文様を施す八角皿が見られ（佐賀県立九州陶磁文化館編2003 p.481 No.3789）、1780～1830年代とされる。有田産である。

##### (4) 輪花鉢・輪花皿・蓋付端反碗・輪花小杯

武9・10・11・12はいずれも染付と色絵、金彩で松竹梅文と鶴文を描く点で共通しており、デザイン

も同一である。また口唇部に金彩を施し、碗と小杯の内面口縁下に染付で四方襷文を巡らせ、内底に梅文を描く点など、規格性が高い。現存資料数はそれぞれで異なるとはいえ、本来は4点を一人分とした揃い物と考えられる。もっとも数の多い輪花皿が19点あるので、おそらくは20客が一揃いではなからうか。松竹梅文と鶴文という縁起のいい文様から、婚礼のようなハレの席に用いるために一括購入されたと推測される。肥前磁器で、年代は19世紀中頃である。なお輪花鉢・輪花皿・蓋付端反碗・輪花小杯に漆器製の汁椀が加わることで一揃いになると考えられることから、この蓋付碗は飯碗と考えられよう。

#### (5) 木箱

このほか陶磁器は残っていないが、箱書きに文化14年(1817)銘と「肥前焼井五ツ入」とある木箱がある(武13)。染付か色絵かは不明であるが、肥前磁器と考えられる。「井」とはおそらくは、やや深めの鉢類を指すのであろう。

### 5. まとめ

まず西家伝来資料には以下のような特徴がある。

- (1) 磁器の大皿の占める比率が高く、また陶器・磁器を問わず、皿・碗・鉢などの組物が多く見られる。これらは西家という地域有力者が、さまざまな宴席や儀式の場において使用したものと推測される。
- (2) 磁器の多くは肥前産であり、薩摩磁器は特殊な形態に限定されている。19世紀に入ると薩摩磁器がかなり流通していることが、近年の考古学的調査研究で明らかにされていること(渡辺2007など)から考えると、比率的に少ないようにも思える。しかし伝来陶磁器が上記のように宴席や儀式の場での用品であると考えれば、比較的質の高い物が選択されており、その場合、肥前磁器の占める比率が高くなったとも考えられる。
- (3) 近世と推測される白薩摩・象嵌の丁字風炉ならびに白薩摩の唾壺が見られる点は、近世における堅野窯製品の流通形態を考える上で興味深く、やはり西家の社会的地位と結びつくものと考えられる。丁字風炉がまとめて伝来していることが、なんらかの社会的要因によるのか、西家特有の趣味嗜好に由来するのかは現段階ではわからない。
- (4) 色絵双獣環耳花瓶は、幕末～明治初頭期の製品と推測される。これがいかなる経緯で西家に購入、伝来したかはわからないが、輸出入が多い色絵薩摩製品の国内流通の一端を知る上で興味深い資料である。

上記のうち(1)(2)については、武家伝来磁器にも共通する特徴であり、武家伝来資料も宴席・儀式の場での使用された磁器が伝来したのであろう。

遺跡から出土する陶磁器は、基本的に破損により廃棄されたものであり、その内容は日用品、量産品に偏る傾向がある。一方、旧家、とくに地域の有力者である西家や武家に伝来した陶磁器は、上記のように儀式や宴席などに使用された大皿や揃い物の高級品が多い。ともに流通し、使用された陶磁器ではあるが、その扱われ方には違いがあり、結果として一部は考古学資料として、一部は伝来資料として、現在、私たちが入手することになる。たとえば碗・皿などの食膳具は肥前磁器が多数を占め、近世後期に数多く流通していたであろう龍門司陶器や薩摩磁器の食膳具は見られない。また薩摩陶器

では丁字風炉や唾壺など、遺跡出土資料にはあまり見られない器種に偏っている。これらの差異は陶磁器の異なる性格、扱われ方に由来すると考えられ、それゆえ考古学資料と伝来品の陶磁器を総合して検討することが、ある地域における陶磁器の流通状況を把握、理解する上で重要であることを示唆している。本調査はそのための試みの一つである。



写5-1 調査風景

西家伝来資料(1)



No.	西1	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	内：芙蓉手鼠大根文 外：山水文3		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	47.4	8.7	24.4		
産 地	肥前		年 代	19世紀前半～中頃 (1872年購入)	
備 考	ハリ支え痕2, 外底染付銘「瑞」。 箱入り, 箱書き蓋「明治五申十月吉日／肥前焼大鉢入／西氏」, 箱側面「大鉢入／西氏」 明治5年=1872年				

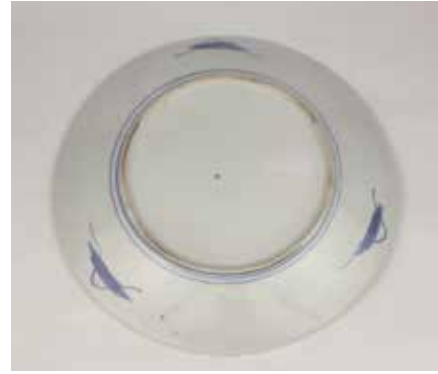


No.	西2	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	楼閣山水文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	28.8	4.8	16.6		
産 地	肥前(塩田か)		年 代	1820-60年代	
備 考	ハリ支え痕6, 外側に呉須流れ, 釉調青み				

※法量の数値の単位はすべてcm



西家伝来資料 (2)



No.	西3	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿	点 数	1
絵 付 け	染付色絵金彩	文 様	内：窓絵竹菊梅牡丹文 外：山水文3		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	34.4	4.6	20.3		
産 地	肥前		年 代	近代	
備 考	ハリ支え痕1, 印銘あり(不明)				



No.	西4	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿(イゲ皿)	点 数	1
絵 付 け	染付(銅版転写)	文 様	内：双鳳文 外：ザクロ(?)文3		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	25.7	3	16.5		
産 地	肥前か		年 代	明治後半~大正	
備 考	口唇部錆釉, 印銘あり(不明)				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (3)



No.	西5	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿 (イゲ皿)	点 数	1
絵 付 け	染付 (銅版転写)	文 様	内：双鳳文, 周囲：双雲龍文 外面：草花文3		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	24.8	3.0 ~ 3.2	15.7		
産 地	肥前		年 代	明治後半～大正	
備 考	口唇部錆釉, 「大山」(?) 銘の印銘あり, ハリ支え痕 1				



No.	西6	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿 (イゲ皿)	点 数	1
絵 付 け	染付 (銅版転写)	文 様	内：屏風窓絵山水文 外：七宝紐つなぎ文3		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	31.9	4.2	19.4		
産 地	肥前		年 代	明治後半～大正	
備 考	口唇部錆釉, ハリ支え痕 1				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (4)



No.	西7	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿	点 数	1
絵 付 け	染付 (型紙刷り)	文 様	内：松竹梅文・芥子文 外：唐草文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	29.8	3.8	17.8		
産 地	肥前 (塩田? 嬉野?)		年 代	明治	
備 考	ハリ支え痕6				



No.	西8	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	大皿	点 数	1
絵 付 け	染付 (銅版転写)	文 様	内：鳳凰文 外：草花文3		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	31.2	3.7	19.5		
産 地	肥前		年 代	近代	
備 考	ハリ支え痕1				

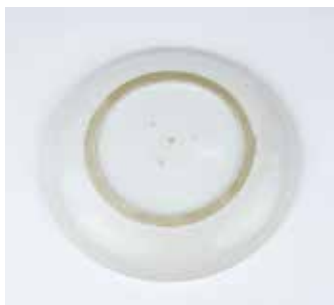
※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (5)



No.	西9	所蔵No.		
素材	磁器	器種	角皿	点数 1
絵付け	染付	文様	内：牛車文・雲文, 「桐菊」(?) 銘4つ 外：草花文	
法量	口径	器高	底径	最大径
	29.6×29.9	5.8	16.5	
産地	肥前		年代	1820-60年代
備考	ハリ支え痕1, 高台内に「忠」の染付銘。 「忠」は佐賀県有田黒牟田の梶原忠助の銘 (『近現代肥前陶磁銘款集』No.48)			

※法量の数値の単位はすべてcm



西家伝来資料 (6)



No.	西10	所蔵No.		
素 材	磁器	器 種	皿	点 数 9
絵 付 け	色絵	文 様	松文2, 蝶文2, 竹垣葡萄文1, 桜文1 岩梅枝文1, 竹文1, 蕪文1	
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径
	18.6~18.7	2.5~2.9	11.2~12.7	
産 地	肥前		年 代	近代
備 考	柿右衛門風。底部3種類：碁笥底（7点）・平底蛇の目軸剥ぎ（1点）・高台付1点。桜文皿に口縁外面に枝伸びる。外底中央に色絵の銘（不明）と色絵松文を描くものあり。ハリ支え痕1・3・4ヶ所例あり			

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (7)



No.	西11	所蔵No.	西97, 西98	点数	10
素材	磁器	器種	変形皿		
絵付け	染付色絵金彩	文様	内：唐草・富士・龍文 外：唐草文4		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	17.1×13.4	3.7	8		
産地	不明		年代	近代	
備考	口唇部金彩, 赤絵で銘 (不明)				



No.	西12	所蔵No.	西110	点数	5
素材	磁器	器種	変形皿		
絵付け	染付色絵金彩	文様	松竹梅文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	20.9×16.6	3.2	9.3		
産地	不明		年代	近代	
備考	口唇部金彩				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (8)



No.	西13	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	蓋付碗	点 数	蓋:5, 身:9
絵 付 け	染付色絵金彩	文 様	外：窓絵竹文・ダイダイ文・亀甲文 内：二重圏線松竹梅文，口縁下梅花文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	蓋：10.3 身：11.9	蓋：3.5 身：6.7	蓋：4.6 身：5.5		
産 地	肥前(有田)		年 代	19世紀前半	
備 考	総高8.0, 箱有り(箱書き無し)				



No.	西14	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	半筒碗	点 数	10
絵 付 け	染付色絵金彩	文 様	外：松竹梅文 内底：二重圏線・松竹梅文 口縁下：四方禪文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	8.1	6.6	4.4		
産 地	肥前		年 代	18世紀後半	
備 考	口唇部金彩。箱入り(蓋なし)，箱書き「茶之碗入」[□(西か)氏]				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (9)



No.	西15	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	蓋付端反碗	点 数	蓋9, 身10
絵 付 け	染付色絵金彩	文 様	外：鳥文・牡丹文 内：鳥文・草花文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	蓋：10 身：11.3	蓋：3 身：6.1	蓋：3.95 身：4.8		
産 地	肥前		年 代	1820-60年代	
備 考	総高：8.2				



No.	西16	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	蓋付碗	点 数	蓋10, 身10
絵 付 け	染付	文 様	外：草花文, 口縁下雷文 内底：二重圏線・松竹梅文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	蓋：11.4 身：12.1	蓋：3.5 身：6.5	蓋：4.5 身：4.5		
産 地	肥前		年 代	1840-60年代	
備 考	総高：8.1～8.6 類例：『九州陶磁の編年』p.102-11・12・15など				

※法量の数値の単位はすべてcm



西家伝来資料(10)



No.	西17	所蔵No.	西10, 西11	点 数	12
素 材	磁器	器 種	鉢		
絵 付 け	染付	文 様	外：唐草文 内：見込二重圏線松竹梅文 口縁下：四方禪文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	14.9	6.8	5.1		
産 地	肥前		年 代	19世紀前半～幕末	
備 考					



No.	西18	所蔵No.		点 数	2
素 材	磁器	器 種	鉢		
絵 付 け	染付色絵	文 様	内：打ち出の小槌文・鶴文 外：巴文ほか		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	26.8～27.3	11.1～11.2	10.6～10.8		
産 地	肥前か		年 代	近代か	
備 考	1点補修あり。また「永井島晴氏」のシールあり。西家資料ではないが、同種のもの。				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料(11)



No.	西19	所蔵No.			
素材	陶器	器種	皿	点数	10
絵付け	色絵	文様	山水文3, 果樹文2, 椿文1, あやめ文1 水仙文1, 梅文1, 印籠文1		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	22.2	3.3	20		
産地	関西		年代	近代	
備考	乾山風(赤「乾」銘), 上面灰白釉, 底部透明釉, 高台内トチン跡(3ヶ所4, 2ヶ所4, なし2), 水仙文皿1点補修 西19~22はセット				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (12)



No.	西20	所蔵No.	西109, 西110	点数	10
素材	陶器	器種	輪花鉢		
絵付け	色絵	文様	梅枝文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	16.2	4.1~4.5	10.5		
産地	関西(京都)		年代	近代	
備考	乾山風, 赤絵「乾」銘, 上面灰白釉, 底部透明釉 梅の枝ぶりで2種各5枚 西19~22はセット				



No.	西21	所蔵No.	西221	点数	2
素材	陶器	器種	輪花小皿		
絵付け	色絵	文様	かぼちゃ文・水仙文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	10.6	2.6	6		
産地	関西		年代	近代	
備考	赤絵「乾」銘, 上面灰白釉, 高台無釉, 乾山風 西19~22はセット				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (13)



No.	西22	所蔵No.			
素 材	陶器	器 種	輪花小杯	点 数	1
絵 付 け	色絵	文 様	草花文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	8.3	6.2	4.1		
産 地	関西		年 代	近代	
備 考	乾山風, 胴下部に赤絵「乾」銘, 畳付き無釉 西19~22はセット				



No.	西23	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	瓶	点 数	2
絵 付 け	色絵	文 様	松竹梅岩文, 鶴文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	1.5	22.2	5.9	8.9 (胴)	
産 地	肥前		年 代	19世紀後半	
備 考	1点口部欠け(残高20.9), 底部砂付着				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (14)



No.	西24	所蔵No.			
素材	磁器	器種	瓶	点数	2
絵付け	色絵	文様	窓絵松竹梅文, 蓮弁文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	2.0	19.8	5.5	9.1 (胴)	
産地	肥前		年代	19世紀後半	
備考	1点口部欠け, 底部無釉				



No.	西25	所蔵No.			
素材	磁器	器種	瓶	点数	1
絵付け	染付	文様	松竹梅文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	(推)11.5	21	5.7	8.7 (胴)	
産地	肥前		年代	18世紀後半	
備考	口部欠け, 底部砂付着				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (15)



No.	西26	所蔵No.	展示	点数	1
素材	磁器	器種	瓶		
絵付け	白磁	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	5.8	45.8	14	26.8 (胴)	
産地	肥前		年代	19世紀	
備考	高台内無釉				



No.	西27	所蔵No.		点数	1
素材	磁器	器種	瓶		
絵付け	染付 (コバルト)	文様	草花文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	4.1	26	8.5	15.7 (胴)	
産地	不明		年代	近代	
備考	口部内径：2.8 胴部に染みあり，畳付き無釉				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料(16)



No.	西28	所蔵No.			
素 材	陶器	器 種	双獣環耳花瓶	点 数	1
絵 付 け	色絵	文 様	表：菊花文，裏：菊花竹文 口縁下：瓔珞文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	13.7	36.2	12.5	19.3 (耳)	
産 地	薩摩		年 代	幕末～近代初期	
備 考	獣耳欠損，内底・畳付き無釉				



No.	西29	所蔵No.			
素 材	陶器	器 種	双耳花瓶	点 数	1
絵 付 け	白薩摩	文 様			
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	22.1	33.9	11		
産 地	薩摩		年 代	近代か	
備 考	口部欠，内面・畳付き無釉				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (17)



No.	西30	所蔵No.			
素材	陶器	器種	瓶 (銚子)	点数	1
絵付け	色絵金彩	文様	蔓草文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	2.5	15.4 ~ 15.5	5.2	6.6 (胴)	
産地	薩摩		年代	近代	
備考	外底中央赤絵銘「サツマ」、胴部下端赤絵銘「陶弘」(陶弘山か)				



No.	西31	所蔵No.	西91・92		
素材	磁器	器種	盃台	点数	2
絵付け	染付色絵	文様	内外とも：捻り文車軸流・唐草・白梅文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	14.8 ~ 15.8	10.8 ~ 11.6	9.6 ~ 10.1		
産地	肥前		年代	19世紀後半	
備考	底部無釉				

※法量の数値の単位はすべてcm



西家伝来資料 (18)



No.	西32	所蔵No.	西9	点数	1
素材	磁器	器種	輪花盃台		
絵付け	青磁染付	文様	内底：龍文 外面：草花竹文，蓮弁文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	11.8	9.1	8		
産地	肥前(有田)		年代	1820-60年代	
備考	畳付無釉，青銅製カスガイ2ヶ所補修				



No.	西33	所蔵No.	展示	点数	1
素材	陶器	器種	丁字風炉		
絵付け	白薩摩	文様	富士形・松葉形透かし 風炉：双獸耳・三獸足，釜身：双獸耳		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	蓋：— 釜：5.3 風炉：9.5	蓋：3.3 釜：9.6 風炉：16.2 総高：23.4	蓋：4.3 釜：4.4 風炉：7.4	蓋：6.3 釜：11.5(耳)，9.4(胴) 風炉：22.6(耳)，19(胴)	
産地	薩摩		年代	近世	
備考	風炉底部高台，畳付き無釉。釜下半部無釉。				

※法量の数値の単位はすべてcm



No.	西34	所蔵No.	展示		
素 材	陶器	器 種	丁字風炉	点 数	1
絵 付 け	白薩摩	文 様	窓形・丸形透かし, 風炉: 双獣耳・三獣足 釜: 双獣耳 (うち一欠け)		
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径	
	釜: 5.0 風炉: 9.2	釜: 9.9 風炉: 18.8 総残高: 25.5	釜: 4.0 風炉: 6.5	釜: 9.3 (胴) 風炉: 22.0 (耳), 17.6 (胴)	
産 地	薩摩		年 代	近世	
備 考	蓋なし。風炉底部高台, 壘付き無釉。釜下半部無釉。				



No.	西35	所蔵No.	展示		
素 材	陶器	器 種	丁字風炉	点 数	1
絵 付 け	白薩摩	文 様	壺形・扇形・雲形透かし, 獣耳2, 獣足3		
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径	
	8.1	14.2	7.6	19.2 (腰)	
産 地	薩摩		年 代	近世	
備 考	釜・蓋なし, 獣足裏面に径3mmの小孔, 底部無釉, 窯道具痕。受け口無釉, 重ね焼きの痕跡。				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (20)



No.	西36	所蔵No.	展示		
素 材	陶器	器 種	丁字風炉	点 数	1
絵 付 け	白地黒土象嵌	文 様	壺形・扇形・丸形透かし 象嵌：花卉・格子・垂下文 風炉：双獸耳・三獸足，釜：双獸耳		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	蓋：－ 釜：4.3 風炉：8.7	蓋：2.8 釜：8.6 風炉：16.5 総高：23.3	蓋：3.5 釜：4.0 風炉：6.35	蓋：5.0 釜：10.1 (耳)，8.4 (胴) 風炉：20.8 (耳)，18.2 (胴)	
産 地	薩摩		年 代	近世	
備 考	風炉底部高台，畳付き無釉。釜下半部無釉。				



No.	西37	所蔵No.	西93		
素 材	磁器	器 種	丁字風炉	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	楼閣山水文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	5.3	9.8	4.8	10.8 (耳)	
産 地	薩摩		年 代	19世紀	
備 考	釜・蓋なし，受け口・畳付無釉				

※法量の数値の単位はすべてcm

西家伝来資料 (21)



No.	西38	所蔵No.	西107・108		
素 材	陶器	器 種	唾壺	点 数	2
絵 付 け	白薩摩	文 様	ともに千鳥印 (胴部下端)		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	9.5 ~ 10	10.3	5.7 ~ 5.9	12.4 ~ 12.6 (胴)	
産 地	薩摩		年 代	近世	
備 考	底部無釉, 1点の千鳥印にじみ大				



No.	西39	所蔵No.	西104・105・106		
素 材	磁器	器 種	唾壺	点 数	3
絵 付 け	白磁	文 様			
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	9.2 ~ 9.7	8.6 ~ 9.1	6.2 ~ 6.4		
産 地	薩摩か		年 代	19世紀か	
備 考	釉調やや青み, 底部無釉。1点は貫入多。				

※法量の数値の単位はすべてcm



No.	西40	所蔵No.	西90	点数	1
素材	磁器	器種	三足蓋物		
絵付け	染付色絵金彩	文様	窓絵鶴文, 柴垣草花文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	蓋：— 身：15.4	蓋：4.7 身：7.7	蓋：14.8 身：9.9	蓋：16.1 身：15.4 (胴)	
産地	肥前(有田)		年代	18世紀前半～中葉	
備考	総高12.3, 受け口・畳付き無釉				



No.	西41	所蔵No.		点数	1
素材	陶器	器種	水注		
絵付け	鉄絵呉須	文様	表裏に松文各1		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	蓋：— 身：10.2	蓋：3.0 身：11.8	蓋：7.7 身：6.9	蓋：10.2 身：12.6 (胴), 20.1 (把手～注口)	
産地	九州産		年代	19世紀	
備考	総高：13.8, 高台・受け口無釉				

※法量の数値の単位はすべてcm

武家伝来資料(1)



No.	武1	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	皿	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	松竹梅文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径	
	28	5.2	15		
産 地	肥前(塩田)		年 代	1820-60年代	
備 考	ハリ支え痕6, 内面白化粧土				



No.	武2	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	輪花皿	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	内：楼閣山水文, 口縁：花唐草文 外：七宝繋ぎ文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径	
	38.4	6.6	21.7		
産 地	肥前(有田)		年 代	19世紀前半～中葉	
備 考	ハリ支え痕6, 高台内染付銘(「嘉慶年製」か)				

※法量の数値の単位はすべてcm

武家伝来資料 (2)



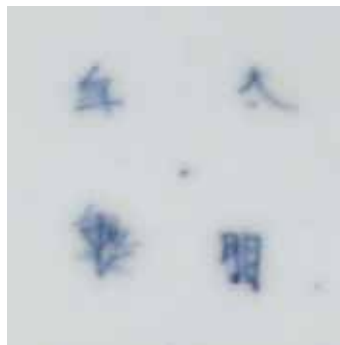
No.	武3	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	輪花皿	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	内：舟遊山水文, 外：帆船山水文	口縁：赤壁賦	
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	35.9	5.3	20.4		
産 地	肥前(有田)		年 代	19世紀前半	
備 考	ハリ支え痕6, 口唇部一部欠け				



No.	武4	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	輪花皿	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	内：見込雲龍文, 周囲：龍鳳文 外：雲文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	25.5 ~ 25.8	4.3 ~ 4.5	14.7		
産 地	肥前		年 代	19世紀初頭～幕末	
備 考	ハリ支え痕3				

※法量の数値の単位はすべてcm

武家伝来資料 (3)



No.	武5	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	長皿	点 数	7
絵 付 け	染付	文 様	内：松竹梅文, 花唐草文 外：唐草文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	18.5×10.8	9.5	12.6×6.2		
産 地	肥前		年 代	18世紀末	
備 考	高台内「大明／年製」染付銘				



No.	武6	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	八角鉢	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	内：見込宝尽くし文, 窓絵花卉文 外：花卉文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	20.1～21.7	9.5	10.5		
産 地	肥前(有田)		年 代	1780～1830年代	
備 考	高台内, 二重枠「宣徳／年製」染付銘。高台砂付着。 武6・7・8はセット。 類例：『柴田コレクション総目録』No.3789				

※法量の数値の単位はすべてcm



武家伝来資料(4)



No.	武7	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	八角鉢	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	内：見込宝尽くし文、窓絵花卉文 外：花卉文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	16.6～17.6	7.7	8.7		
産 地	肥前(有田)		年 代	1780～1830年代	
備 考	高台内、二重枠「宣徳/年製」染付銘。高台砂付着。 武6・7・8はセット。 類例：『柴田コレクション総目録』No.3789				



No.	武8	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	八角鉢	点 数	1
絵 付 け	染付	文 様	内：見込宝尽くし文、窓絵花卉文 外：花卉文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	14.3～14.9	6.6	7.7		
産 地	肥前(有田)		年 代	1780～1830年代	
備 考	高台内、二重枠「宣徳/年製」染付銘。高台砂付着。 武6・7・8はセット。 類例：『柴田コレクション総目録』No.3789				

※法量の数値の単位はすべてcm

武家伝来資料 (5)



染付八角鉢3点 (武6・7・8)



No.	武9	所蔵No.			
素材	磁器	器種	輪花鉢	点数	19
絵付け	染付色絵金彩	文様	内：松竹梅鶴文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	17		5.6	10.5	
産地	肥前		年代	19世紀中頃	
備考	口唇部金彩、凹形蛇の目高台 武9～12はセット。				

※法量の数値の単位はすべてcm

武家伝来資料 (6)



No.	武10	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	輪花皿	点 数	7
絵 付 け	染付色絵金彩	文 様	内：松竹梅鶴文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	20.7	3	13.7		
産 地	肥前		年 代	19世紀中頃	
備 考	口唇部金彩，ハリ支え痕（4ヶ所：3点，3ヶ所：3点，無し：1点） 武9～12はセット。				



No.	武11	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	蓋付端反碗	点 数	蓋9，身13
絵 付 け	染付色絵金彩	文 様	蓋：外：松竹梅鶴文，花卉文 内：見込花卉文，口縁下四方禪文 身：外：松竹梅鶴文 内：見込花卉文，口縁下四方禪文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	蓋：9.8 身：10.95	蓋：2.8 身：6.1	蓋：4.1 身：5.1		
産 地	肥前		年 代	19世紀中頃	
備 考	蓋身とも口唇部金彩，総高：8.0 武9～12はセット。				

※法量の数値の単位はすべてcm

武家伝来資料 (7)



No.	武12	所蔵No.			
素 材	磁器	器 種	輪花小杯	点 数	6
絵 付 け	染付色絵金彩	文 様	外：松竹梅鶴文 内：見込花卉文, 口縁下四方禪文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	7.2	5.2	3.7		
産 地	肥前		年 代	19世紀中頃	
備 考	口唇部金彩 武9～12はセット。				

※法量の数値の単位はすべてcm



色絵輪花鉢・輪花皿・蓋付端反碗・輪花小杯のセット (武9・10・11・12)

武家伝来資料 (8)



No.	武13	所蔵No.			
素 材	木製	器 種	箱	点 数	1
絵 付 け		文 様			
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	26×26.5	17.5			
産 地	不明		年 代	文化14 (1817)年	
備 考	箱書き蓋「文化十四丑年四月／肥前焼井五ッ入／龍郷方與人／朝恵喜」 箱正面「文化十四年／肥前焼井／與人／朝恵喜」 箱側面 (不詳)				

※法量の数値の単位はすべてcm



# 考察編

## 第6章

池田榮史「考古学資料からみる近世琉球の流通と消費」

## 第7章

関根達人「アイヌ社会における日本製品の考古学的痕跡」

## 第8章

渡辺芳郎「南西諸島域における近世陶磁器流通」

## 第6章 考古学資料からみる近世琉球の流通と消費

池田 榮史 (琉球大学法文学部)

### 1. はじめに一琉球・沖縄史研究における地域区分と時代区分一

日本列島は東アジアの東縁に位置し、南北に長く連なる島々である。このため、日本列島の周辺にはいくつかの内海とも呼ぶべき海域が存在する。もっとも身近では日本列島とアジア大陸沿海州、韓半島との間に日本海(韓国では東海)があり、韓半島とアジア大陸、そして日本列島の九州島から南に連なる琉球列島、台湾島の間には東シナ海(韓国では東中国海)が存在する<sup>(1)</sup>。

さて、本稿の対象地域となる琉球列島は上記の東シナ海の東に位置する島嶼地域であり、日本の九州島から中華民国台湾島までの間、約1,200kmの海洋中に点在する。大小約200の島々からなり、現在、九州島に近い与論島までの約40島は鹿児島県、残りの約160島が沖縄県に属する。この琉球列島については、気候や動植物の分布相、あるいは歴史的文化的相違から北・中・南に三分する考え方と、南北に二分する考え方が提示されている。この中の三分案では大隅諸島を北部圏、奄美諸島から沖縄諸島までを中部圏、宮古諸島から八重山諸島までを南部圏とする。また、二分案では大隅諸島から沖縄諸島までを北琉球、宮古諸島から八重山諸島までを南琉球とする。三分案と二分案の違いは、二分案で北琉球とした範囲について、三分案ではさらに二分する点にある。二分案は日本列島の縄文文化の影響が及ぶ北琉球と、及ばない南琉球の文化内容を説明する際に有効である。これに対し、三分案では弥生文化以降、基本的には九州島の影響下に含まれる大隅諸島と、九州島を通して日本文化との関係を持ちながらも独自の展開を遂げ、ついには琉球国の成立を見る奄美諸島から沖縄諸島までの島々の文化内容を説明するのに有効である。

そこで、地理的区分三分案に基づいて、それぞれの区分地域の歴史的歩みを概観すれば、北部圏については基本的に日本史の枠組みの中に位置づけることが可能である。これに対して、中部圏は縄文文化段階では縄文文化の分布範囲に含まれるが、弥生文化段階に入っても引き続き縄文文化と同じ狩猟・漁労・採集経済に依存した文化を維持する。この文化は沖縄貝塚後期文化と呼ばれ、10世紀頃まで続く。沖縄貝塚文化段階には弥生文化をはじめとする日本文化の影響を散発的に受けるものの、日本文化の中に含み込まれることはない。しかし、11世紀に入ると中部圏全域に農耕生産が定着し、これを基盤として次第に社会的発展を遂げる。これは古代末～中世日本からの強い影響を受けた結果であると推測されている。その後、14世紀後半に明王朝が成立すると、中部圏の中の沖縄島に明王朝の冊封を受ける複数の政治勢力が出現する。そして、15世紀前半に沖縄島の政治勢力は一つに統合され、これが次第に周辺の島々の政治勢力を支配下に収め、琉球列島全域の統合を図る勢力へと成長することとなる。

一方、南部圏では11世紀にいたるまで、中部圏や北部圏とは全く異なった狩猟・漁撈・採集に依存する文化が断続的に認められる。この段階の南部圏と琉球列島中・北部圏とは全く交流がなかったと考えられる。しかし、中部圏が農耕社会へ移行する11世紀段階に入ると、中部圏の影響の下に南部圏も次第に農耕社会へと移行する。

この段階から琉球列島中部圏と南部圏には交流が生じ、同じ文化圏を形成し始める。さらに、16世紀に入って沖縄島を統合した政治勢力が南部圏の島々を支配下に組み込むことによって、中部圏と南部圏はいわゆる琉球文化圏に統合される。14世紀後半に明王朝の冊封を受け、朝貢国となった沖縄島



の勢力とその支配領域について、明王朝では琉球国と呼んだが、琉球国の版図が琉球列島中部圏と南部圏を含めた範囲に広がるのは、南部圏が中部圏に成立した政治勢力の支配下に入る16世紀のことである。

しかし、17世紀初頭に日本の軍事的支配権を掌握した徳川幕府の認可の下、1609年島津氏が琉球国への武力侵攻を図る。島津氏は琉球国制圧後、琉球国の支配下にあった中部圏北半の奄美諸島を直轄領地として裂き取り、沖縄島以西の中部圏と南部圏の島々を琉球国の版図として残した。ただし、冊封関係は明王朝とその後を継いだ清王朝との間でも途切れることはなく、19世紀にいたるまで明・清王朝との朝貢関係が存続する。すなわち、島津征服後の琉球国は従前通り独立国家としての体裁を取り、明・清王朝への冊封関係を維持するものの、実質的には島津氏を通して日本の幕藩体制に組み込まれることとなる。この両属関係は徳川幕府が滅びるまで続くが、明治維新後の日本政府は1879年に沖縄県を設置し、琉球国を強制的に日本国家へ編入する。

明治政府による併呑に対して、沖縄県内では数々の抵抗運動が起こるが、1895年日本が日清戦争に勝利すると、抵抗運動は次第に終息に向かい、沖縄県としての本格的な日本化が進行する。しかし、太平洋戦争末期には日本本土防衛の前哨戦と位置付けられた沖縄島を中心とする地上戦（沖縄戦）が起こり、多大な被害をもたらした。さらに、沖縄戦後の沖縄県は日本の行政下から離れ、27年間にわたる米軍支配を経験した。琉球国の存在と沖縄戦および米軍支配の歴史的経験は、今日においても琉球列島の人々が国家としての日本に属することを問う心情を強く抱き続けることに繋がるとともに、かつて琉球列島に存在していた琉球国に対して、憧憬を含む強い関心を持ち、琉球国を含む琉球の歴史や文化についての研究が盛んに行なわれる土台を生み出している<sup>(2)</sup>。

このような琉球列島の歴史について、琉球・沖縄史研究では狩猟・漁撈・採集段階を先史沖縄、11世紀代の農耕社会への移行から琉球国の成立、その後の島津氏による琉球侵攻までの間を古琉球、島津氏侵攻から明治政府による沖縄県の設置までを近世琉球、その後を近代沖縄、アジア太平洋戦争終結後の米軍支配以降、今日までを戦後沖縄に区分することが一般的に行なわれている<sup>(3)</sup>。

## 2. 近世琉球の流通と消費—文献史学による研究成果—

琉球列島の考古学研究は考古学編年の構築をはじめとして基本的に戦後の米軍統治下で開始された。その後、1972年の日本復帰を経て、文化財に関する行政的な体制や大学などの研究組織の拡充が進められ、今日に至っている。琉球列島における考古学的調査の中で、特に強い関心が向けられた遺跡に沖縄諸島を中心として見られるグスクがあり、琉球国の形成過程との関わりを意識した積極的な調査が実施された。しかし、グスクの調査成果については、古琉球段階を対象とした文献史学による研究成果に摺り合わせる傾向が強うかがわれる。近年に至り、考古資料に依拠した集落構造や貿易陶磁器をはじめとする遺物の組成を踏まえた考古学独自の分析や立論が行なわれはじめ、考古学研究の深化が図られつつある。このような文献史学研究が先行し、これに考古学研究が追従する傾向は近

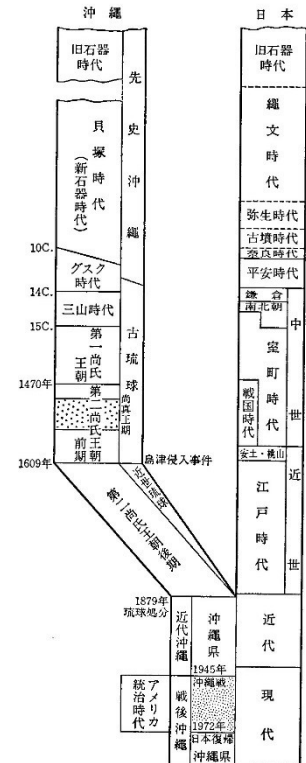


図6-1 琉球・沖縄史の時代区分 (高良1980より)

世琉球についても同様であり、文献史学による研究成果をふまえながら、瓦や沖縄産陶器などの考古資料の分析・検討に依拠した新たな研究成果が提示されはじめた状況にある<sup>(4)</sup>。

当然、本稿で取り扱う近世琉球の流通と消費についても、これまでの文献史学研究による膨大な成果の蓄積がある。これらを見ると、近世琉球の流通と消費に関する研究は基本的に明・清王朝との進貢貿易に基軸を置いた研究であり、ここから琉球国内の物品生産や流通、消費に言及する研究が進められているように見受けられる。これは近世琉球の流通や消費が進貢貿易と密接に連結していたことを物語っていると同時に、流

通や消費についての史・資料の多くは琉球国が行った進貢貿易に関わらない限り残存していない状態にあること、言い換えれば近世琉球国内における流通や消費については、進貢貿易と同様に琉球王府が強く関与していたことを示している。

これを如実に示すのが、琉球国が進貢貿易によって入手した輸入品に関する真栄平房昭の研究成果である。真栄平は中国北京檔案館から刊行された『清代中琉関係檔案選編』の分析を行っており、これによれば1767(乾隆32・

表6-1 進貢貿易による福州から琉球への輸入品(真栄平2003より)

1767(乾隆32)年の輸入品目・数量

品目	数量	品目	数量	品目	数量	品目	数量
土糸	720斤	漆木箱	88隻	砂仁	11,100斤	蛇皮	5張
中軸共	2,270疋	白紙扇	950把	廣木香	30斤	小皮鼓	30個
中縐紗	385疋	連史紙	7,720張	蜂蜜	1,400斤	綿紗帶	110斤
中綾	74疋	粗夏布	1,837疋	黄蠟	1,070斤	小麝脂	3,000張
中緞	278疋	錫器	199斤	蘇木	500斤	苧線	200斤
土絹	135疋	小油紙	3,000張	粗毡條	1,740斤	中葛布	50疋
土紬	30疋	甲紙	19,040斤	虫糸	1,105斤	寿山石	900斤
湖綿	20斤	川連紙	266斤	粗香餅	130斤	雄黄	20斤
緞腰帶	10条	糸布	4疋	速香	100斤	宜興罐	15斤
粗薬材	30,420斤	白礬	1,010斤	漆木盤匣	1,150個	蜜浸糖果	850斤
毛辺紙	33,120張	玳瑁	2,919斤	沈香	95斤	淨綿花	20斤
油傘	2,252把	白糖	15,120斤	安息香	560斤	浸油香料	170斤
中茶葉	22,744斤	徽墨	195斤	生漆	250斤	繭紬	37疋
斜紋布	501疋	冰糖	5,500斤	織絨	150疋	粗磁碗	1,925斤
粗冬布	1,602疋	桔餅	3,850斤	水銀	3,100斤		
細磁器	2,837斤	線香	11,200斤	故紬衣	24件		
粗扇	33,250把	銀硃	7,110斤	故布衣	8件		
篋箕	74,250個	白苧麻	5,500斤	色紙	3,600張		
牛筋線	2,755条	胡椒	4,850斤	紙裱字画	12張		

『清代中琉関係檔案選編』より作成。

到着後薩摩藩を経由して日本で売買される薬種や絹織物、白糖、香木などの他に、琉球国内で用いる農具の篋箕(竹箕=ミーゾーキー)や文房具の紙、お茶(サンピン茶)、粗扇(安物の扇)、三線の蛇皮、油傘(唐傘)、細磁器・粗磁器・宜興罐などの雑器を含めた大量の日常生活必需品が含まれている(真栄平2003・2004など)。このことは進貢貿易は薩摩藩を通じて日本で転売することを念頭においた高級品のみではなく、琉球国内の日常生活必需品を調達する役割を果たしていたことを示す。なお、進貢貿易で輸入された日常生活必需品は琉球王府によって官人に給付された他、那覇の市場を通して販売されたと考えられる。

この結果からすれば、近世琉球ではかなりの日常生活必需品について、清からの輸入に依存していた状況が想定されることとなる。これに関連して、明・清交替期の動乱が起こった17世紀半ばから後半にかけては、台湾鄭氏勢力の活動があり、進貢船の派遣が滞る事態が生じた。これに対応するため、1666年に琉球王府の摂政に就任した羽地朝秀(向象賢)は財政を含む内政改革を断行している。この政策は1728年に三司官となった具志頭親方文若(蔡温)に引き継がれ、17世紀後半から18世紀前半にかけて、黒砂糖生産をはじめとする琉球国内での産業育成が図られた。琉球近世陶器に見られる

生産の拡大や作風の変化もこのような施策の反映と考えられる(池田2003など)。しかしながら、18世紀後半代の進貢貿易での輸入品目には前述の通り、数多くの日常生活必需品が上げられており、琉球国内での日常生活必需品における清からの輸入品への依存度は依然としてかなり高かったことが知れる。このことからすれば、琉球国では日常生活必需品の調達について、清からの輸入品と国内生産品の使い分けを行っていたことが推測されるのである。

なお、琉球王府は明・清王朝に対して、動乱期を除けば基本的に二年一貢の周期で進貢船を派遣し、進貢船貢期の間には接貢船を派遣していた。すなわち、実質的には毎年交易船を派遣していたことになる。琉球侵攻以降、薩摩藩はこの進貢貿易に介入し、鎖国後の長崎における中国貿易を補完する対外貿易の窓口化を図った。この際、明・清王朝の貨幣経済は銀本位制であったことから、薩摩藩は銀を産出しない琉球国に対して、主に日本の上方商人からの借銀を行ない、これを原資として提供することが日常化した。また、琉球王府も進貢貿易で入手した中国産品について、薩摩藩および薩摩商人を通じて販売し、新たな進貢貿易の原資を得ることとしたため、薩摩藩と琉球王府の関係は進貢貿易を通じる限り相互の利害が一致する状況となった。

このような動きの中で、進貢貿易の際に琉球から福州へ持ち運ばれる産物として、17世紀後半からは南九州で生産される鰹節が加えられ、18世紀後半からは江戸時代の北前船航路によって上方に持ち運ばれた昆布や乾海鼠などの俵物をはじめとする海産物が加わった。これにより、琉球による清への朝貢貿易は清と琉球と薩摩、さらには日本の上方を通じた北前船交易との連鎖を生じたのである。

このことは琉球による進貢貿易が鎖国下の江戸幕府の対外貿易の一翼を担う存在であったことを示す。その史料として、江戸幕府は1687年に薩摩藩と琉球国に対して、清への進貢貿易に際して日本から運び出す銀(渡唐銀)の上限を進貢船では804貫、接貢船では402貫とする規制を行った。また、江戸幕府が17世紀末の元禄年間に行なった貨幣改鑄(慶長銀の品位80%→元禄銀の品位64%)の影響により薩摩藩が調達する銀の品位が低下し、清へ持ち込んだ銀の信用度が失墜した際には、江戸幕府がその対応策を講じなければならなくなることも起こっている。すなわち、1715(正徳5)年に薩摩藩は江戸幕府に対して琉球の進貢貿易に用いる銀の品位を慶長銀の品位に戻すことを願い出て認められているのである。これを見れば、薩摩藩による琉球の進貢貿易への介入について、江戸幕府は鎖国下の対外貿易の窓口の一つであることを十分に認知した上で、その統制下に置いていたことが知れる(前掲、真栄平2003・2004など)。

### 3. 考古資料にみる近世琉球の流通と消費—陶磁器組成を中心として—

文献史学による研究成果に対して、考古資料からの近世琉球における流通と消費をめぐる研究は、さほど意識的に進められてきたとは言い難い状況にある。ただし、沖縄の施政権が米軍から日本政府に返還された後、日本政府は琉球王国の王城であった首里城とその周辺地域について、観光資源としての復元整備を進めることとなり、これにともなって首里城とその周辺地域の考古学的調査が進められた。この結果、中・近世琉球の流通と消費に関するさまざまな考古学的情報が蓄積された。

首里城は第一尚氏が登場する15世紀初頭から琉球国の王城として用いられたと考えられ、その後に興った第二尚氏王統も継続して首里城を王城とした。1879(明治12)年明治政府による沖縄県の設置が行なわれると首里城は明治政府へ明け渡され、熊本鎮台分遣隊営所が置かれた。1903(明治36)年に至って陸軍省から首里区へ払い下げられたが、老朽化のため次第に維持管理が難しくなり、1923

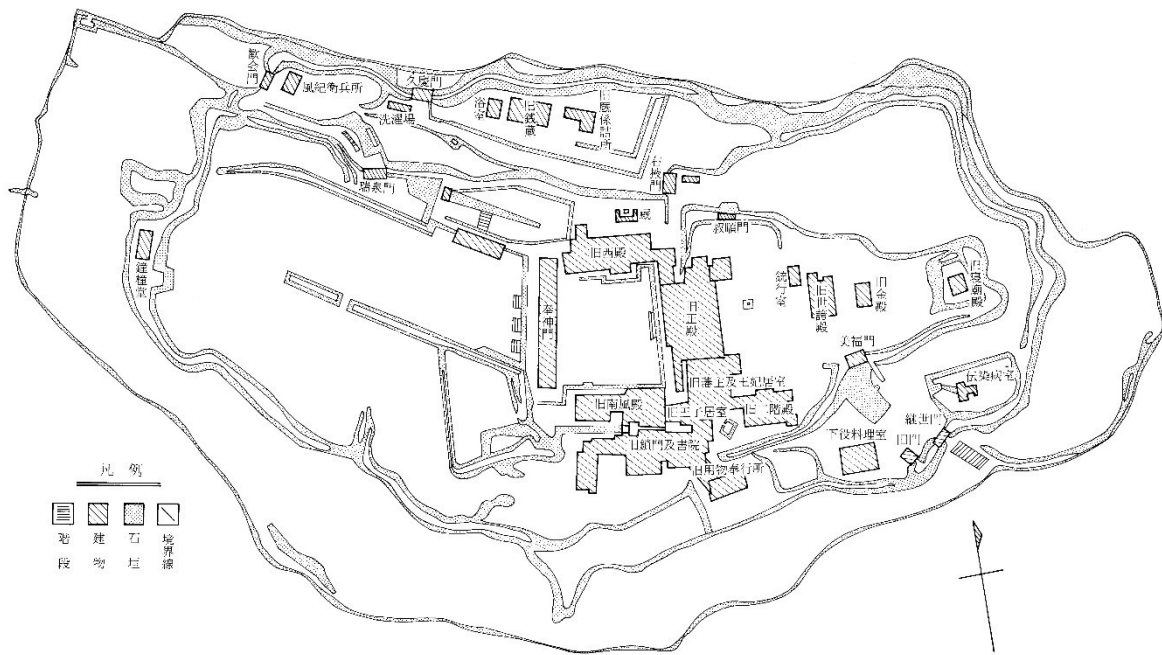


図6-2 昭和期の首里城復元図（「首里城跡」『沖縄文化財調査報告書』第88集1988より引用）

（大正12）年には取り壊しが決定された。その際、東京帝国大学教授伊藤忠太や元、沖縄県立女子師範学校および県立第一高等女学校教諭であった鎌倉芳太郎の奔走により、首里城正殿を新たに創設する沖縄神社拝殿とすることによって、1897（明治30）年に制定されていた古社寺保存法による対象建造物として取り扱うことが可能となり、保存が図られた。その後、1929（昭和4）年の国宝保存法制定と同時に首里城正殿は国宝に指定され、文部省の補助金を得た修理工事が行なわれて、1934（昭和9）年に完成した。なお、首里城正殿復元工事の完成を前にした1933（昭和8）年には、首里城内の守礼門・歓会門・瑞泉門・白銀門の他、首里城に近接して設けられていた円覚寺総門・右掖門・左掖門・放生池・三門・仏殿・龍淵殿・鐘楼・獅子窟、園比屋武御嶽石門、および那覇市泊にある崇元寺総門・右掖門・左掖門・第二門・正廟が国宝に指定されている。首里城正殿の修復後の1936（昭和11）年には、首里城内の北殿に沖縄県教育会附設郷土博物館が設けられたが、これらの首里城及び周辺の国宝建造物は沖縄戦によってすべて灰燼に帰した（池田1994・2008）。

沖縄戦後の1950年、首里城跡に琉球大学が設置されることとなり、円覚寺を含む首里城周辺には琉球大学の建物が建築された。しかし、1972年の施政権返還後、首里城の復元を望む声が高まるとともに、首里城跡のキャンパスが手狭となった琉球大学は西原町へ移転した。これを受け、1992（平成4）年の復帰20周年記念事業として首里城正殿の復元工事が行なわれることとなり、これに先立って沖縄開発庁の委託を受けた沖縄県教育委員会による考古学的調査が実施された。復元工事に先行して発掘調査を実施する方式はその後も引き継がれ、首里城内および周辺の各建造物復元の前には必ず事前の考古学的調査が行なわれるとともに、調査報告書が刊行される体制が構築されている<sup>(5)</sup>。

首里城跡および周辺の各建造物は古琉球段階に構築されたものも多い。また近世には王都としての使用が続けられたことから、15・16世紀代に位置付けられる貿易陶磁器をはじめとして、近世琉球段階の陶磁器・瓦質陶器・瓦磚・銅器・鉄器、さらには近代沖縄段階の陶磁器・軍用品、そして沖縄戦時の

遺物や琉球大学に関係すると思われるさまざまな資料が得られている。また、遺構も古琉球段階、近世琉球段階、近代沖縄段階、沖縄戦関係、そして戦後沖縄段階の琉球大学関連施設の痕跡等が重層的に確認されている。

しかしながら、長期間にわたる首里地域の歴史的歩みは同一地区の重複使用が頻繁に行なわれる状況を生じた。このため、現代沖縄あるいは近代沖縄段階の遺構が近世琉球および中世琉球段階の遺構を掘り壊した状態で配されることが多く、時期別遺構の明確な検出がきわめて難しい。このこともあって、首里城跡および周辺の琉球王国関連遺跡に関する調査報告書の多くでは検出した遺構と遺物を分けて報告することが一般的であり、報告書の記載内容から遺構ごとの遺物組成を把握することはかなり難しい。その点において、2000（平成12）年6月27日付けで国重要文化財に指定された「首里城京の内跡出土陶磁器」の一括資料はきわめて希有な事例である（沖縄県教育委員会1998）。

これを念頭に置きながら、近世琉球の流通と消費に関わる考古学的情報を抽出してみれば、首里城跡および周辺の琉球王国関連遺跡の多くからは琉球産陶器に混じって、清代の青花磁器や日本産陶磁器、中国および日本の銭貨などが例外なく出土していることが知れる。この中で、清代磁器は碗・皿を主体として鉢・盤・瓶などがあり、福建・広東系、漳州窯系、景德鎮系、徳化窯系などの製品が見られる。また、日本産陶磁器ではやはり碗・皿類を中心として瓶などの肥前系染付や陶器、薩摩焼陶器がある。銭貨では日本産の寛永通宝が多く、鳩目銭を含む無文銭がこれに次ぎ、中国清代銭（順治通宝・康熙通宝・乾隆通宝・嘉慶通宝・道光通宝・咸豊通宝・同治通宝など）は少ない傾向にある。

瀬戸哲也や新垣力らはこのような首里地域での琉球王国関連遺跡に対する考古学的調査成果に加え、周辺離島を含む近世・近代墳墓の考古学的調査資料の分析を踏まえて、中世琉球から近世琉球段階の陶磁器組成や編年に関する研究を進めつつある（瀬戸2007・2014、新垣2003・2009、瀬戸・仁王・玉城・宮城・安座間・松原2007、沖縄考古学会2013など）。

この中で、瀬戸は沖縄出土中世陶磁器の青磁について、大宰府分類Ⅰ～Ⅳ類を引き継いだⅣ～Ⅶ類分類案を提示するとともに、中国産青花磁器については小野および森分類・編年案に亜種、白磁については森田分類・編年案に亜種を加えた分類を行なった。そして、15～17世紀代の沖縄における陶磁器組成をⅠ期（15世紀前半～後葉）、Ⅱ期（15世紀後葉～16世紀前半）、Ⅲ期（16世紀中頃～16世紀後半）、Ⅳ期（17世紀前半）とする区分案を提示している（前掲、瀬戸2007）<sup>6)</sup>。

また、新垣は大橋康二の研究（大橋1995）などを受け、近世沖縄出土の清朝陶磁器について、①江西省景德鎮窯およびその周辺諸窯、②福建省徳化窯およびその周辺諸窯、③福建省漳州窯およびその周辺諸窯、④福建・広東系磁器（具体的生産地不詳）、⑤浙江省宜興窯およびその周辺諸窯、⑥銅緑釉軟質陶器に大別した。その上で、染付（青花）、褐釉染付（青花）、色絵、白磁、紫砂などの製作技術による区分と、碗、小碗、小杯、皿、小皿、壺などの器種細分を行なっている。

新垣はそれぞれの生産窯跡地域を前提とした大別の中で、①江西省景德鎮窯およびその周辺諸窯の製品について、2003年の段階では17世紀後半から19世紀代までの年代を与えていたが、古墓出土資料を加えた2009年には17世紀後半から18世紀前半に位置付けられる資料が多いことを指摘した。これに対して、②福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品については18～19世紀を中心として出土する傾向があるとする。また、③福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品については、2003年には16世紀末から17世紀前半の年代を想定していたが、やはり古墓出土資料を加えた2009年には17世紀後半代まで下る年代を想定している。④福建・広東系磁器製品については2003年の段階で17・18世紀代の年代を想

定し、沖縄産灰釉陶器との類似を指摘する。⑤浙江省宜興窯およびその周辺諸窯の製品は17世紀後半から19世紀代を通じて生産されたとし、⑥銅緑釉陶器については中国南部地域での生産の可能性を指摘しつつも、不明な点が多いとする(前掲、新垣2003・2009)。

これらの研究成果からすれば、中・近世琉球への中国産陶磁器の流入は瀬戸が設定したⅠ期(15世紀前半～後葉)に最盛期を迎え、Ⅱ期(15世紀後葉～16世紀前半)までその影響が続く。しかし、Ⅲ期(16世紀中頃～16世紀後半)の前半を過ぎた段階から中国産陶磁器の流入が減少するとともに、16世紀末から17世紀前半にかけてはそれまでの中心的な製品であった浙江省竜泉窯系および福建省同安窯系青磁に代わって、福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品や福建・広東系磁器製品の割合が高くなる。17世紀後半にはこれらの製品に加えて、江西省景德鎮窯および周辺諸窯の製品の流入も見られ、18世紀中頃から後半にかけて福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品が他地域の製品を圧倒する状況となり、この傾向が19世紀まで続くことになる。なお、浙江省宜興窯およびその周辺諸窯の製品については17世紀後半から19世紀にかけて継続的な流入が認められる。

また、中国産陶磁器だけではなく、17世紀中葉～後半には日本産肥前系磁器の碗・皿・杯・瓶や肥前系陶器である内野山窯系銅緑釉碗なども出土する。さらに、18世紀に入ると、薩摩系陶器の白釉碗や褐釉陶器壺、土瓶、薩摩系磁器の平佐窯系染付碗、京・信楽系陶器の皿なども見られることが指摘されている。

これらの出土状況について、先の文献史学による研究成果と対比すると、中国産陶磁器に関しては真栄平による『清代中琉関係檔案選編』の輸出品として細磁器・粗磁器・宜興罐などの記載があった。この中の宜興罐については明らかに浙江省宜興窯およびその周辺諸窯の製品に比定されるが、細磁器・粗磁器についてはその名称から前掲した各窯業地域に当てはめることはできない。むしろ、各窯業地域で生産されていた製品の中で、精製品と粗製品に区分することが穏当と考えられる。ただし、新垣の分析によれば、①江西省景德鎮窯およびその周辺諸窯の製品や、②福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品は基本的に薄手の精製品が多いのに対して、③福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品や、④福建・広東系磁器製品には薄手の精製品に区分される製品とともに、比較的厚手の粗製品が認められる。この点について、新垣は2003年の論考で、沖縄において③福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品は「集落遺跡での出土例は少なく、首里城跡などの特殊な遺跡に集中する傾向が見られる。また出土量も一般に少ないため、優品としての性格が窺われる資料である」と述べており、近世琉球においては基本的に精製品としての取扱いを受けていた可能性を指摘している。

ただし、ここで参考にした『清代中琉関係檔案選編』は、主に18世紀代の取引に関する記録が採録されている文献である。このことからすれば、ここに記載された細磁器と粗磁器について検討するには18世紀代に位置付けられる考古学的調査資料を対象にすることが必要であることはいまでもない。この場合、先の近世琉球における中国陶磁器の出土傾向を踏まえれば、細磁器は②福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品、③福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品、粗磁器は④福建・広東系磁器製品に比定することも可能かもしれない。

これに対して、日本産の肥前系染付や陶器、薩摩焼陶器については、琉球への流入に関する明確な記録がない。基本的には薩摩藩を通じて入手したと考えられるが、どのようにして入手が図られたかについては判然としないところが多い。

また、陶磁器以外の出土資料の中で、銭貨についてはこれまでの文献史学研究において近世琉球で

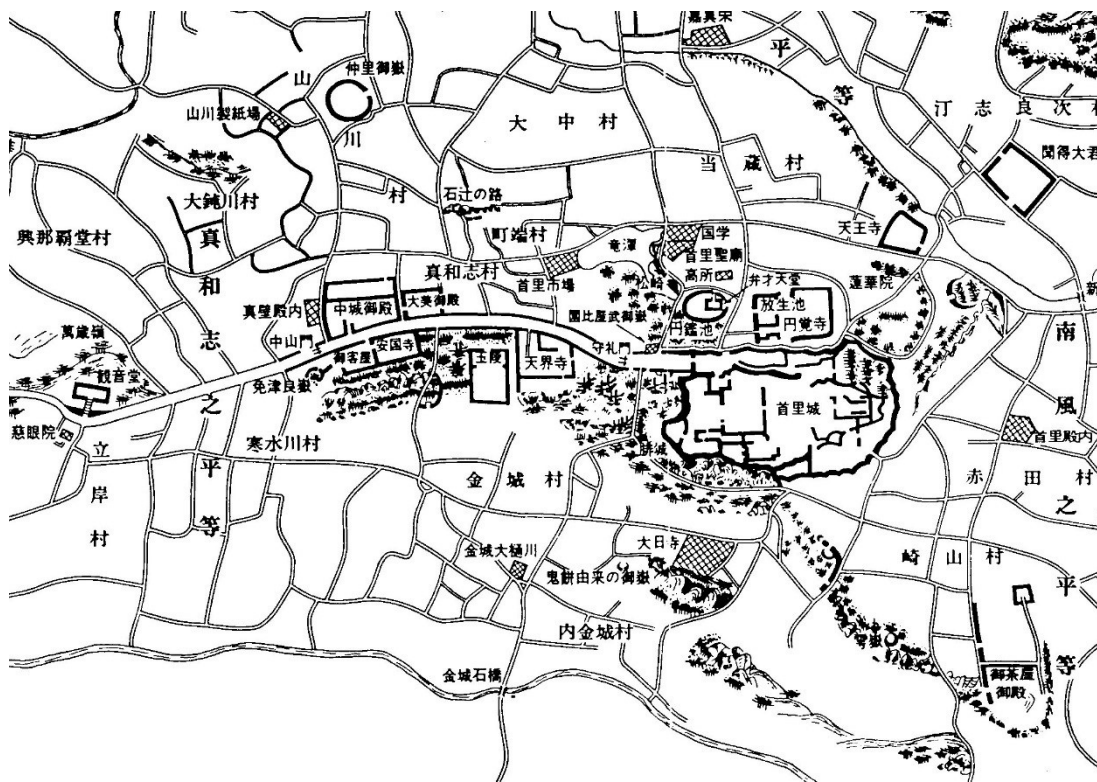


図6-3 嘉手納宗徳による『首里古地図』(1700年代製作)を下にした復元(沖縄県教育委員会1985より引用)

は日本銭の寛永通宝や無文銭が流通していたことが知られており、これと矛盾しない調査成果が得られている。このような近世遺物の出土状況は首里城周辺の配置されていた寺院や王府に関係する建造物跡の発掘調査でも検出されている<sup>(7)</sup>。これらからすれば、近世琉球の流通と消費については、文献記録による研究からは説明できない多くの資料が考古学的発掘調査成果から提示されつつあることが明らかであり、考古学研究からの積極的な検討が望まれる。

#### 4. 結論—仮説的理解論の提示—

以上の内容をまとめると、近年の考古学的調査成果からすれば近世琉球では文献記録に見える中国からの輸入品だけではなく、薩摩藩を経由してもたらされた日本産物や琉球国内産物が多数存在し、琉球国内では明らかにこれらの使い分けが行なわれていた状況が窺われる。しかし、その使い分けの実態については、今のところ、文献記録と考古学的調査資料に対する分析を総合化した明確な理解論を構築するには至っていない。そこで、ここでは本稿で多く用いた沖縄出土の陶磁器資料を手がかりとして、琉球国内における近世琉球の流通と消費についての仮説的理解論を提示してみたい。

琉球国内では16世紀中頃まで陶磁器生産は行なわれておらず、中国陶磁器を中心とする貿易陶磁器がもたらされ、これを分配する流通システムが存在していた。この琉球国内での陶磁器生産が開始される前の14世紀中頃から16世紀頃までについては、宮城弘樹による今帰仁城跡とその周辺遺跡である今帰仁城主郭、志慶真門郭、今帰仁ムラ跡、天底後原遺跡から出土した陶磁器をはじめとする出土遺物を対象とした分析がある。宮城が取り扱った今帰仁城主郭は沖縄本島北部を支配地域とした北山王の居住域であり、志慶真門郭はその家臣団的集団の居住域、今帰仁ムラ跡は今帰仁城跡の城下の居住域・城下町的集落、天底後原遺跡は農業等に従事する一般集落である。それぞれの遺跡から出土する

遺物の中で、今帰仁城主郭では遺物出土量の総量が多い（収蔵用コンテナ約180箱）ばかりでなく、陶磁器優品とされる元青花や青磁酒会壺、瓶、天目碗、色絵、三彩などが大量に出土している。これに対して、一般集落である天底後原遺跡では出土陶磁器（収蔵用コンテナ約10箱）の中にこれら優品とされる陶磁器はほとんど含まれていない。また、銅銭についても今帰仁城主郭では1000枚の出土が見られるのに対して、志慶真門郭（掘立柱建物4軒）では60枚、今帰仁ムラ跡（掘立柱建物3軒）では10枚、天底後原遺跡（掘立柱建物1軒）では数枚程度となり、この他の遊具や硯、鉄製品などの出土頻度も、主郭を頂点として段階的に少なくなる傾向がある。宮城はこの出土遺物から見出した傾向について、それぞれの政治的、あるいは経済的な上位下位の位置づけ、格差を示すとし、ここに階層的な関係を見出すことが可能であるとしている（宮城2006）。

このことは14～16世紀の中世琉球では、琉球列島外からもたらされたさまざまな産物について、階層による所有の多寡があったことを示す。言い換えれば、宮城が取り扱った今帰仁城跡とその周辺遺跡での出土遺物の偏差は北山王権による獲得産物の分配システムの在り方を示すと考えられる。すなわち、中世琉球において、島嶼を含む各地に起こったさまざまな勢力やこれを集権化した王権は、琉球列島外からさまざまな産物を獲得し、これを分配するシステムを掌握することによって、自らの勢力や王権の維持と拡大を図る社会であったと理解されるのである。

これに対して、島津氏による琉球侵攻が起こった後の17世紀初頭には、島津氏の管轄の下に中山王権による琉球国の統治が行なわれる。中山王権は中国明・清王朝との朝貢関係を維持してさまざまな産物を入手するとともに、琉球国内産業の育成を図った。また、島津氏を通じた日本産物の流入があったことも前述したとおりである。このことからすれば、近世琉球では前代から続く中国産物に加えて、日本産物の流入があり、さらには琉球国内産物の生産が増加して、これら三者が混在する状況になったのである。

これを前段で取り扱った沖縄出土の陶磁器を手がかりとしてみれば、琉球侵攻後の17世紀段階では福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品や福建・広東系磁器製品の割合が高かった。しかし、17世紀後半にはこれらの製品に加えて、江西省景德鎮窯および周辺諸窯の製品、さらには日本産肥前系磁器の碗・皿・杯・瓶や肥前系陶器である内野山窯系銅緑釉碗などが出土していた。また、17世紀後半から18世紀前半には琉球国内での陶器生産が本格化し、施釉陶器である碗・皿・杯・瓶などを中心とする上焼と、泥釉掛けの焼き締め陶器である壺・甕・鉢・皿などを中心とする荒焼が次第に増加する。このような琉球国内の窯業の発展の中で、18世紀中頃から後半にかけての中国陶磁器は、福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品が他地域の製品を圧倒する状況が起こるのである。

これについて、18世紀代に関する文献史料に基づく琉球史研究では、中国産陶磁器について細磁器と粗磁器、宜興窯系製品に区別して輸入したことを前述したが、これに考古学研究成果を加えれば、この時期の琉球では中国産陶磁器とともに、琉球産陶器の上焼製品と荒焼製品、さらには薩摩焼製品等の本土産陶磁器が混在して用いられていた状況となる。

前段の検討で、これらの陶磁器の中の中国陶磁器細磁器と粗磁器についてはそれぞれ精製品と粗製品、あるいは細磁器は福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品、粗磁器は福建・広東系磁器製品に比定できる可能性を指摘した。なお、沖縄の古墓出土近世陶磁器の流通に関する検討を行った新垣は、18世紀代の古墓から福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品が多く出土することを踏まえ、琉球で生産する近世陶器の中の上焼については近世琉球の国内陶磁器需要を満たしたとは考え難いとする（前



掲、新垣2009)。このことからすれば、新垣は18世紀代における中国産陶磁器の流入は、琉球産陶器の生産が国内需要を満たせないことによる補完的な役割を果たしていたと理解するのである。

これに対して、筆者は今日の壺屋焼に繋がる近世琉球の陶器生産について、18世紀代には十分に琉球国内の需要を満たす程度の確立を見たと考えている(池田1995・2000ほか)。さらに、本稿で述べたような外部からの獲得産物の分配システムが中世琉球において存在した状況からすれば、中国産陶磁器をはじめとする琉球国外からの輸入品は、近世琉球においても所有者(使用者)の地位や富を表すステータスシンボルとして、依然として機能していた可能性があると考えている。近世琉球社会においては、内部で生産された琉球国産品と、中国や日本から持ち込まれる輸入品との間に、何らかの価値基準や使用場所などの相違を意識し、使い分けを行っていたと推測されるのである。これについて、本稿ではこの推測に基づく近世遺跡からの出土陶磁器を対象とした詳細な検討作業を行っていない。しかし、従前からの沖縄窯業史研究成果を踏まえれば、琉球国内における壺屋焼の生産体制が確立した18世紀代においても、外部から持ち込まれる中国産陶磁器あるいは本土産陶磁器に対しては、中世琉球から引き続くこのような潜在的認識が存在していたとする理解の蓋然性は高いと考えられる。

近世琉球の流通と消費に関する研究では、近年の考古学的調査の進展によってさまざまな産物について、琉球国内産品とともに清からの輸入品や日本からの輸入品がかなりの頻度で用いられていたことは明らかとなった。今後はこれらのさまざまな産物それぞれについて、当時の社会における人々の認識の在り方を探っていくなければならない。そのためには各遺跡におけるこれらの産物の取り扱い方に関する検討が必要である。しかしながら、本論では陶磁器を除いて検討の俎上にのせることができなかつた。次の課題としたい。

## 注

- (1) 1980年代以降、日本では東アジア史の研究手法として、二国間の関係を前提とする対外交渉史や対外交流史に止まらず、日本海や東シナ海を取り巻く周辺諸国、さらにはこれを越えて広がる国際関係を取り扱う視点の必要性が提起された(村井章介1988など)。これに基づき、「環日本海海域」や「環東シナ海海域」などの設定が行なわれ、海を介したヒト・モノ・コトの動きを対象とする研究が進められつつある。
- (2) 琉球・沖縄史を概説した近年の図書には、豊見山和行(豊見山2003)や、安里進・高良倉吉ら(安里他2004)などのものがある。
- (3) この琉球・沖縄史の時代区分案は、高良倉吉による1980年の著作などに認められ、今日では一般的に用いられている。
- (4) 近年の琉球窯業史の成果を踏まえて、2011年には沖縄県立博物館・美術館と那覇市立壺屋焼物博物館による合同企画展『琉球陶器の来た道』が開催され、研究成果をまとめた図録も刊行された。
- (5) 沖縄県教育委員会によって刊行された首里城跡関連の発掘調査報告書は下記のとおりである。

沖縄県教育委員会発行『沖縄県文化財調査報告書』

- |       |                                 |
|-------|---------------------------------|
| 1986  | 『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』              |
| 1988  | 第88集 「歓会門・久慶門内側の復元整備事業にかかる遺構調査」 |
| 1992  | 第107集 「首里城正殿跡の遺構調査」             |
| 1995  | 第120集 「南殿・北殿跡の遺構調査」             |
| 1998a | 第132集 「京の内跡発掘調査報告書(1)」          |
| 1998b | 第133集 「御庭跡・奉神門跡の遺構調査」           |

沖縄県立埋蔵文化財センター発行『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』

- |       |  |
|-------|--|
| 2001a | 第1集 「管理用道路地区発掘調査報告書」                       |
| 2001b | 第3集 「下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書」 |
| 2002  | 第9集 「継世門周辺地区発掘調査報告書」                       |
| 2003a | 第13集 「首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書」                  |
| 2003b | 第14集 「右掖門及び周辺地区発掘調査報告書」                    |
| 2004a | 第18集 「城の下地区発掘調査報告書」                        |
| 2004b | 第19集 「城郭南側下地区発掘調査報告書」                      |
| 2004c | 第20集 「東のアザナ地区発掘調査報告書」                      |

- 2005a 第27集 「上の毛及び周辺地区発掘調査報告書」  
 2005b 第28集 「書院・鎖之間地区発掘調査報告書」  
 2005c 第29集 「二階殿地区発掘調査報告書」  
 2006a 第32集 「首里城跡真珠道地区発掘調査報告書(1)」  
 2006b 第33集 「淑順門地区発掘調査報告書」  
 2006c 第34集 「御内原地区発掘調査報告書」  
 2007a 第42集 「首里城跡真珠道地区発掘調査報告書(2)」  
 2007b 第44集 「御内原西地区発掘調査報告書」  
 2008a 第47集 「下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書」  
 2008b 第48集 「首里城跡真珠道地区発掘調査報告書(3)」  
 2009a 第49集 「京の内跡発掘調査報告書(2)」  
 2009b 第51集 「首里城跡守礼門東側地区・真珠道起点及び周辺地区発掘調査報告書」  
 2011 第56集 「京の内跡発掘調査報告書(3)」
- (6) 瀬戸が発表した2007年の論文(瀬戸2007)による15・16世紀の沖縄出土貿易陶磁器Ⅰ～Ⅳ期区分について、その後、仁王浩司らと連名で執筆した同年の論文(瀬戸ら2007)では、11世紀代からの沖縄出土貿易陶磁器を加えて、Ⅰ～Ⅶ期区分とした。両者の関係は、前者Ⅰ～Ⅲ期がそれぞれ後者Ⅴ～Ⅶ期、前者Ⅳ期が後者Ⅶ期以降にほぼ相当する。
- (7) 首里城周辺の寺院として円覚寺跡や天界寺跡、王府に関係する建造物跡として中城御殿跡、御茶屋御殿跡などの発掘調査が実施されている。
- 1995 『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査—』沖縄県立博物館  
 2001 「天界寺跡(1)—首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第2集  
 2002a 「円覚寺跡—遺構確認調査報告書—」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第10集  
 2002b 「天界寺跡(2)—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査—」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第8集  
 2003 「御茶屋御殿跡—遺構確認調査報告—」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第17集  
 2006 「御茶屋御殿跡—平成15・16・17年度遺構確認調査報告—」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第40集  
 2010 「中城御殿跡—県営首里城公園中城御殿発掘調査報告書(1)—」『沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書』第53集

※本章に関わる参考引用文献は、巻末の「参考引用文献」にまとめている。

## 第7章 アイヌ社会における日本製品の考古学的痕跡

関根 達人 (弘前大学人文学部)

### はじめに

北海道島・樺太(サハリン)・千島(クリル)を含む「蝦夷地」は、日本国の領域の北縁境界域にあたり、中世・近世期を通して北に向かって内国化が図られた。また、「内地」にあっても、津軽半島や下北半島の北端、津軽海峡に面した地域には、「狃(狄)」などと呼ばれ異民族視された人々(「本州アイヌ」)が暮らしており(浪川1992、青森県2001、榎森2003、関根2007c・2007d・2009)、17世紀代の弘前藩や盛岡藩は幕藩体制下でありながら、領民支配上、和人と本州アイヌを区別した二重規範を取らざるを得ない状況にあった。

蝦夷地の考古学は「アイヌ考古学」と呼ばれるように、先住民であるアイヌの人々を専ら研究対象としており、これまで中世・近世考古学とはあまり接点をもつことなく、進められてきた。しかし、蝦夷地の歴史は、アイヌをはじめとする北方民族と北方へ進出した和人の双方によって営まれた歴史であり、さらには中国やロシアとの関係性のなかで形成された歴史である。既成のアイヌ史や日本北方史の枠を超え、新たに蝦夷地の歴史(「蝦夷地史」)を描くためには、従来別々に進められてきたアイヌ考古学と中世・近世考古学を融合する研究が不可欠である(関根2014d)。

蝦夷地の大部分を占める北海道島が完全に日本に組み込まれたのは、政治史的には遡っても松前・蝦夷地全域が幕領化された文化4年(1807)以降である。あるいは、東在木古内村以東、西在乙部村以北の上知が松前藩に命ぜられ、箱館が開港した安政2年(1855)を以て、蝦夷地の内国化が完成したとみる研究者もあろう。しかし、例えば寛政11年(1799)の段階で知内川以東の和人地と東蝦夷地全域が幕府の直轄地となったように、政治的側面に限ってみても蝦夷地の内国化はそれ以前から段階的に進行していた。蠣崎氏や下国安東氏など和人館主よる北海道島南部渡島半島先端部(松前半島・亀田半島周辺)の和人地化に到っては、15世紀にまで遡る。

注目すべきは、こうした「政治的な内国化」に一步先んじる形で常に「経済的な内国化」すなわち、日本製品(和産物)の大量流入によるアイヌ社会の経済的自立性の喪失(=日本国内経済圏の北方への拡大)が生じていたと考えられる点である(図7-1)。日本国内経済圏へ取り込まれることで、アイヌの人々の生業は、和人の求めに応じて、次第に特定の狩猟・漁撈に専門化し、和人との交易を前提とした社会へと変容していったのである。

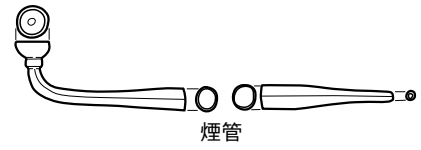
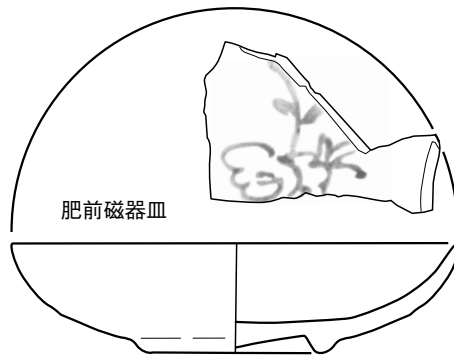
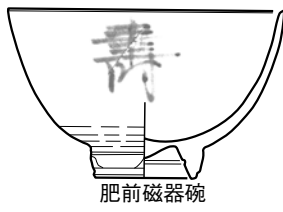
一方、アイヌ社会に受容された和産物では、木綿などの衣類や酒を醸すための米、鉄素材・鉄製品などの生活物資が重要なのは言うまでもないが、同時に漆器・武器・武具・ガラス玉など、アイヌの人々が宝物とするような威信財が常に大きな比重を占めているのが特徴的である。そうした威信財は、アイヌ社会の集団関係や和人との関係性を維持・保障する重要な役割を果たしていた。

本稿では、そうしたアイヌ社会に受容された日本製品のなかから、陶磁器、ガラス玉、武器・武具など考古学的検討に適した遺物を取り上げ、その概要を述べることとする。

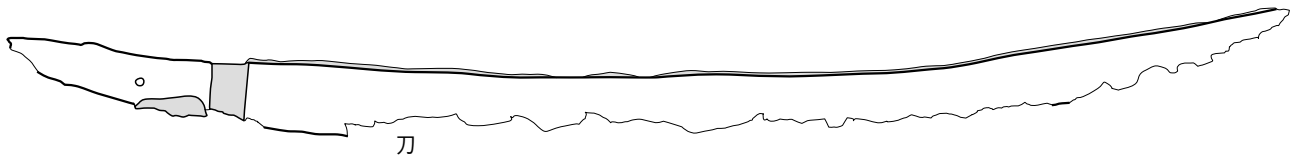
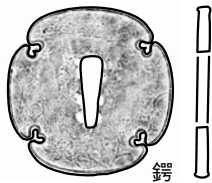
### 1. 蝦夷地出土の近世陶磁器

アイヌの人々の食膳具・貯蔵具は漆器などの木製品を基本とし、陶磁器を使用する伝統がないと考えられていたことや、北海道からは稀にしか陶磁器が出土しないことから、北海道における近世陶磁

【飲食関連具】



【刀・刀装具】



【生産用具】

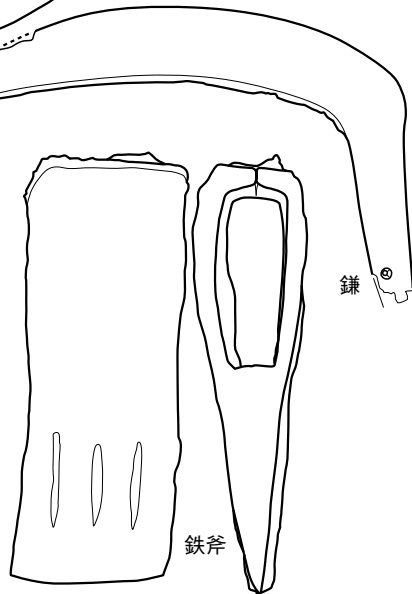
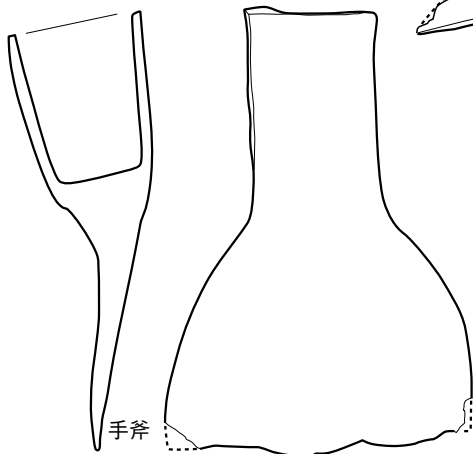
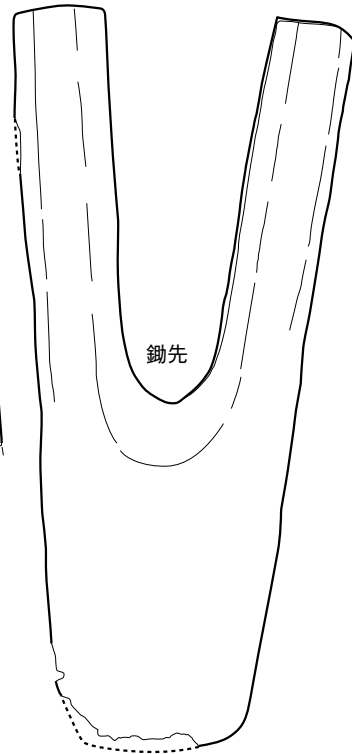
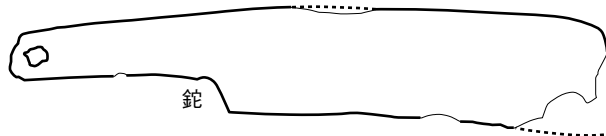


図7-1 アイヌ社会に受容された日本製品の例（北海道新ひだか町シベチャリチャシ跡周辺出土：関根2014bより）

器研究は立ち遅れていた。

北海道、サハリン、千島列島から出土した近世陶磁器の集成・分析を行った結果、次のことが明らかとなった(関根・佐藤2009)。

蝦夷地における近世陶磁器の出土量は、19世紀前半まで一貫して「西高東低」で推移する。経済的・習俗的に内国化が進む時期は、東西蝦夷地で異なり、西蝦夷地において早く進行することや、東蝦夷地においては、シャクシャインの戦いやクナシリ・メナシの戦いといった和人とアイヌ民族との抗争が、物資の流通にも大きく影響している。シャクシャインの戦い以前には、中国産の青磁や肥前磁器がアイヌの首長者層に威信財として一定量受容されていた。西蝦夷地では、海産物を求める和人の進出が移住をともなう形で進み、それに連動して主たる交易場がセタナイ(17世紀)からヨイチ(18世紀以降)へと変化する。一方、東蝦夷地では、18世紀末以前には和人が移住した形跡はほとんど認められず、和人の本格的な進出は、ロシアと幕府との間で国境を巡る問題が顕在化する19世紀代に入る。西蝦夷地への和人の進出が主として経済的理由によるのに対して、東蝦夷地への和人の進出は政治的色彩が濃いと考えられる。

窯業技術が拡散する19世紀の陶磁器は、産地同定が困難なものが多いが、上野・高取系の甕を特定できたことで、それらが日本海交易により内国化の進む蝦夷地全域へ多量に搬入されていることが明らかとなった。

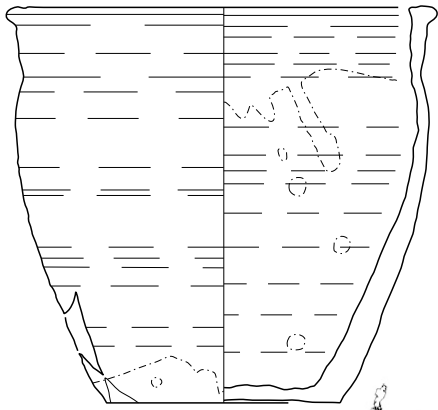
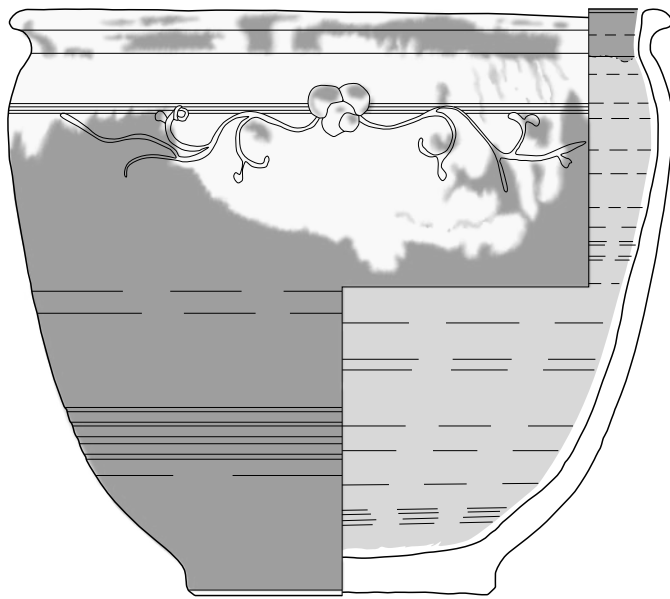
19世紀には北海道島から出土する陶磁器は爆発的に増大し、流通範囲も拡大する。主体を占めるのは、「幕末蝦夷地3点セット」と名付けた徳利・中甕・膾皿である(図7-2)。このうち徳利と中甕は本来的には北前船で酒や味噌・塩を運ぶ際の容器であり、肥前系磁器の膾皿は労働者の食事に相応しい碗と皿の両方の機能を兼ね備えた便利で安価な食器であった。それらは、本州から労働者として移住してきた和人とともに、漁場などで和人に混じり半ば強制的に働かされていたアイヌの人々も使用していたと考えられる。「幕末蝦夷地3点セット」は、結果的にアイヌの伝統的な食文化にも多大な影響を与え、和人への同化を促進させたと考えられる。上野・高取系の甕と「松前徳利」と呼ばれた越後産の焼酎徳利は、主として蝦夷地向けに特化した焼き物である。また、幕末の蝦夷地にコンプラ瓶や越後産の焼酎徳利が大量に運ばれた背景には、日米修好通商条約による安政6年(1859)の箱館・新潟・長崎の開港が大きく作用していると思われる。

## 2. アイヌのタマサイ・ガラス玉

北太平洋の先住民は、交易により中国・日本・ロシア、さらには遠くヨーロッパや中東で作られたガラス玉を入手した。彼らは遠く海を越えてもたらされた神秘的なガラス玉に高い価値を見だし、時に宗教儀礼に結びつくユニークな玉文化を生み出した。ガラス玉は、価値観の異なる「未開」と「文明」が接触したことを示す重要な証であり、玉にあげられた孔を通して北太平洋を舞台とする国家と民族の歴史が見える。

アイヌの物質文化を特徴づけるものでありながら、基本的にアイヌ文化圏以外の地で作られ運びこまれたもののひとつがガラス玉である(関根2007a・2007b・2008)。

初現期、すなわち15世紀代のタマサイは、最も大陸的・北方的色彩が強い。15世紀は明朝が朝貢関係を軸にアムール川下流域やサハリンの諸民族に対する支配体制を強化した時期にあたる。北海道から出土する15世紀のタマサイは、そうした北東アジアの政治情勢の変化が間接的とはいえ、北海道島



上野・高取系甕



肥前系磁器皿



図7-2 「幕末蝦夷地3点セット(甕・徳利・三平皿)」とその生産地

のアイヌ民族にも影響を与えたことの証左といえよう。

16世紀～17世紀のタマサイは、青玉が高い割合を占めており、おそらくこの時期にアイヌ玉＝青玉という図式ができあがったと考えられる。北まわりで大陸からもたらされた青玉は、北奥に暮らす本州アイヌにも受容された。北奥青森県域は、北のガラス玉の道の終着点といえる。

出土品からは18世紀以降とだけしか言えないが、文献史料などから推察するに、おそらく18世紀末から19世紀にかけて、ガラス玉の大型化や黒系色玉・トンボ玉の増加、シトキへの加飾が進んだ可能性が高い。それはちょうど日本とロシアとの緊張関係が高まり、俄に蝦夷地への関心が高まった時期と符合する。19世紀、和人の蝦夷地への本格的な進出に伴い、江戸周辺でアイヌ向けに作られたガラス玉がタマサイをより華美なものとし、形式化を促進したと考えられる。

### 3. イコロ (宝物)としての武器・武具

アイヌの宝物には、役に立つがゆえに価値あるもの(イヨクペ)と豪華で素晴らしいもの(イコロ)がある。美しい金属で飾られた刀や矢筒など多くのイコロを所持する者がニシパ(ニシは「空」、パは「上の・長」を表す)と呼ばれるように、イコロは威信財であった。アイヌに伝わった漆器や刀類には、鎌倉・南北朝・室町時代に製作されたものや、それを真似たものが少なくない(金田一・杉山1943)。こうしたアイヌの嗜好について、小林真人氏は、「アイヌ民族が衛府の太刀、打掛け鎧、行器などに接するのは、それらが実際に使われていた時代であって、おそらくはアイヌ民族が土器文化を捨てるという大転換の過程と深くかかわっていたであろう」との見方を提示した(北海道開拓記念館2001)。

アイヌの人々が本州から渡来した古い武器・武具やそれを写したものを宝物として珍重し、時にこれらの道具が社会の様々な問題を解決する術として機能する様は、アイヌ社会を観察する機会を得た和人の眼には奇異に映ったようであり、紀行文などに記録された。

一方、中世の和人社会においても、中国産の倣古銅器や高級陶磁器類が座敷飾りや茶道具として珍重され、大名物の茶道具に破格の値が付き、武功に対する恩賞となるなど、特別な扱いを受けた。例えば、日本社会では、鎌倉時代以降ずっと中国産の天目茶碗に対する需要があり、中国で天目茶碗の生産が衰退した明代以降も中国から宋や元代に作られた古物が輸入され、あるいは瀬戸窯などで古い唐物天目碗を模した製品が作られ続けた。それは本州で武器・武具としての太刀や大鎧・胴丸が廃れた後も、アイヌの人々がそれらを求め続けた姿に重なる。日本の武家社会が宋風の宗教文化に根差した唐物を良しとしたように、アイヌ社会では中世前期の和製武器・武具が好まれ続けた。

和人によって書き留めた古記録類や出土資料を通してアイヌの宝物の頂点に和製の武器・武具やそれを写したものがあり、それらはアイヌ社会の中で、あるいは和人と関わり合いの中で、集団関係を円滑化する機能を持っていたことが確認できる。そうした価値観は、出土品からみてアイヌ文化成立期にまで遡る可能性が高く、古記録から19世紀に至るまで長く保持され続けたことが判明する(関根2012・2014c)。

アイヌ墓の副葬品を検討した結果、17世紀以前のアイヌの刀は、日本刀を含めて鉄製の刀身を有しているものが多かったが、18世紀頃にはほとんどが平造の所謂「蝦夷刀」や真鍮刀、あるいは木刀、刀身を持たず柄と鞘を木片で繋ぐものとなり、近代以降は「蝦夷刀」や真鍮刀さえも墓に副葬されないような状況となったと考えられた(関根2004)。アイヌの刀は、利器としての十分な機能を有する「切れる刀」から、専ら宗教儀礼具に特化した「切れない刀」へと変容した可能性が高い。刀の副葬率

は、1667年に降下した樽前b火山灰を挟んで急速に低下していることは明らかで、それは寛文9年(1669)の蝦夷蜂起(シャクシャインの戦い)と時期的に符合する。アイヌの葬制に関する聞き取り調査では、男性の墓に太刀を副葬するとの報告がなされていることからみて、刀の副葬率の低下は、単なる葬法上の変化、要するに刀を副葬しなくなったことに起因するとは思われない。むしろ刀は、刀身を失ったにせよ副葬され続けたと理解するべきであろう。むしろ問題は刀身の喪失にあり、それはシャクシャインの戦いを契機として、松前氏がアイヌから日本刀のような武器となりうる刀をとりあげ、さらには武器に転用可能な蝦夷刀やその原料となる鉄製品の移出制限を強化したためと考えられよう。

アイヌの刀類は、彼らの手になる木製あるいは金属板に簡単な加工を加えた刀装具を除き、基本的に和製であり、古くは交易品であったが、時代が下るにつれ贈答儀礼品となり、最終的にはウイマムやオムシャの際の下賜品になったと思われる。また、京で作られた上手の製品を除き、蝦夷刀・蝦夷拵の主たる生産地は、中世には上之国・下之国や津軽・南部といった津軽海峡周辺域、近世には松前城下と推定できよう。

#### 4. カラフト(サハリン)島出土の日本製品

カラフト(サハリン)島の出土品には日本製のキセル・刀装具・漆器・鉄鍋・銭(寛永通寶)が確認される一方、近世陶磁器類はほとんどみられない(関根2014a)。キセルや刀装具のなかには17世紀代の製品も含まれており、アイヌの人々による宗谷海峡を越えた交易が17世紀代に遡るのは確実である。また、これらの分布状況から、日本製のキセル・刀装具・鉄鍋が樺太アイヌのみならず北部に住むニブフの手に渡っているのに対して、漆器は南部の樺太アイヌにしか受容されなかったと考えられる。カラフト(サハリン)島から出土している漆器は、漆椀・耳盥・行器で、全てアイヌの酒儀礼に関する道具であることから、樺太アイヌもまた、18世紀以前から北海道アイヌと同じく日本産の漆器を使った酒儀礼を行っていたとみられる。

#### まとめ

アイヌの人々の生活は時代を下るにつれ、威信財から生産用具にいたるまで、次第に日本製品への依存度を高めていったとみられる。彼らが和人からモノづくりの技術を学んだ痕跡はほとんど認められない。蝦夷地が政治的内国化に先行して「日本国内経済圏」へ組み込まれた結果、18世紀には第三者的立場から見ればアイヌ側に極めて不利な「不平等交易」が常態化するとともに、蝦夷地向けの製品が生まれた。アイヌの人々は、一貫して日本製品を彼らの価値観の中で位置づけており、しばしば本来のコンテクストとは異なる独自の使用法が見られる(図7-3・4)。

江戸幕府・松前藩の成立と、それによって生じた一般和人とアイヌとの直接交易の禁止が、アイヌ社会に与えた影響については判然としない。しかし寛文7年(1667)に起きた支笏湖の南側に位置する樽前山の噴火と、その翌々年に発生したシャクシャインの戦いがアイヌ社会に与えた影響は、考古学的にも顕著である。シャクシャインの戦いによって北海道島における和人とアイヌの形勢は逆転し、アイヌの物質文化は急速に貧弱化する。シャクシャインの戦いを境にアイヌ民族による津軽海峡の自由な往来が見られなくなり、津軽半島や下北半島に残っていた本州アイヌは急速に和人に同化する。





1. 和鏡（山吹双鳥鏡）を鍔形に加工したシトキ（14世紀）  
（北海道厚真町オニキシベ2遺跡1号墓：厚真町教育委員会蔵）



2. 太刀拵の金具（七ツ金・革先）が使われたタマサイ（14世紀）  
（北海道伊達市有珠オヤコツ遺跡配石墓Ⅱ号：伊達市教育委員会蔵）



3. 太刀の足金物をシトキに転用したタマサイ（16世紀）  
（北海道恵庭市カリンバ2遺跡第Ⅳ地点 AP-5：恵庭市郷土資料館蔵）



4. 17世紀の和鏡に中茎櫃を穿け鍔に転用したもの  
（ロシア連邦サハリン州 Kuznetsov1 遺跡：サハリン大学考古学・民族誌研究所蔵）



5. 雁首の火皿が使われているカラフトアイヌの飾り帯（19世紀）  
（ロシア連邦サハリン州 Korsakow 採集：サハリン州立郷土誌博物館蔵）

図7-3 アイヌの物質文化にみられる本来のコンテキストとは異なる使用例（1）



1. 「藤原光政」銘の柄鏡をシトキに転用したタマサイ  
 (函館市北方民族資料館蔵児玉コレクション N0.691)



タマサイに使われた米国コネチカット州  
 SCOBILE 社製金ボタン  
 (1854 ~ 1875 年製造、陸軍将校用)



2. 銭と米国製の金ボタンが使われているタマサイ  
 (函館市北方民族資料館蔵児玉コレクション N0.689)

【参考資料】 タマサイに使われたのと同じタイプの金ボタン  
 苫小牧市弁天貝塚出土 (苫小牧市勇武津資料館蔵)

図7-4 アイヌの物質文化にみられる本来のコンテキストとは異なる使用例 (2)

シャクシャインの戦いの後、東蝦夷地ではアイヌと和人の交易が低調となり、西蝦夷地では主たる交易場がセタナイからヨイチへ移る。セタナイからヨイチへ主たる交易場が移動した背景には、海産資源を求め日本海沿岸を奥地（北）へ向かった和人の進出があったと考えられる。

西蝦夷地では18世紀代に既に場所請負に関連して和人の経済的進出がみられるが、東蝦夷地では18世紀末以前には和人が移住した形跡はほとんど認められず、19世紀初頭にロシアとの緊張関係により一時的に北方警備関係者の進出が見られるものの、民間人による漁場への進出が活発化するのには19世紀中葉と推察される。和人の経営する漁場で労働力として駆り出された結果、幕末以降、アイヌの人々の生活様式は急速に和風化に傾いていったとみられる。

※本章に関わる参考引用文献は、巻末の「参考引用文献」にまとめている。

## 第8章 南西諸島域における近世陶磁器流通

渡辺 芳郎 (鹿児島大学法文学部)

### はじめに

九州島の南方に連なる大隅諸島、三島、十島(トカラ列島)、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島などの南西諸島は、古くより中国・東南アジアへとつながる文化交流・物資流通のメインルートのひとつであった。その文化交流・物資流通については、弥生時代のゴホウラなど南海産貝輪の流通(木下1996など)や中国産を中心とした貿易陶磁器の流通(亀井1993など)などが古くより注目されている。また近年では硫黄(山内2009など)やヤコウガイ(高梨2005など)、徳之島カムイヤキ(新里2003など)などの流通が解明されてきており、喜界島城久遺跡群の発掘調査では、古代～中世の南西諸島の歴史を考える上で注目すべき調査研究成果があがっている(池田編2008など)。

近世になると、1609年の島津氏による琉球侵攻を契機として、奄美諸島までが薩摩藩の直轄地となり、琉球も王府は存続するものの島津氏の支配を受け、幕藩体制に組み込まれる。しかしその一方で、琉球は中国王朝(明・清)との冊封体制を維持しつづける。このような近世国家領域の境界域において物資流通、とくに陶磁器におけるそれがいかなるものであったかを考古学的に解明することが筆者の問題意識である。近世では肥前地方における磁器生産の開始、鹿児島における薩摩焼、沖縄における壺屋焼など沖縄産陶器の出現など、中世までの陶磁器生産が大きく変化する時代であり、南西諸島における陶磁器流通のあり方も大きく変わる。陶磁器は考古学資料として残存しやすく、大量に入手できることから、近世の南西諸島における物資流通の一端を明らかにするための有効な資料となる。

筆者は以上の問題意識に基づきつつ、「報告編Ⅰ」で報告したように三島・十島における考古学的踏査を実施してきた。本章ではその中でも近世陶磁器(清朝磁器を含む、以下同)を取り上げ、その流通の具体相を整理するとともに、流通形態・ルートについて、文献史料なども手がかりとしながら、検討を試みる。

### 1. 三島・十島における近世陶磁器の概要

まず三島・十島採集資料から判明している近世陶磁器の概要について、改めてまとめておきたい。

採集された本土産陶磁器は、三島、十島ともにほぼ共通していると言える。肥前磁器は17世紀前半の初期伊万里から近世を通じて流通していたと考えられる。肥前陶器は17世紀初頭の砂目積み陶器の段階から、内野山産銅緑釉陶器や刷毛目陶器など18世紀前半まで、つまり肥前陶器が食膳具市場から撤退するまで流通している。一方、薩摩焼陶器のうち貯蔵具(甕)や調理具(摺鉢)は、17世紀の苗代川の甕が採集されているが、流通量が増大するのは18世紀、とくに後半になってからで、この時期より土瓶も流通するようになる。加治木・始良系陶器、龍門司陶器は主として食膳具であり、18世紀前半の龍門司製品が臥蛇島伝来資料に見られ、18世紀後半以後の白化粧土+高台露胎の量産品も見られる。さらに18世紀末以後の薩摩磁器も流通するようになる。そのほか京焼陶器の色絵も少数ながら採集されている。

以上のような近世陶磁器の流通様相は、鹿児島本土域におけるそれ(橋口2003、渡辺2003・2010など)と共通するものである。つまり三島、十島における本土産陶磁器の入手先は鹿児島本土域であっ

た可能性が高い。また三島における初期伊万里大皿、肥前三彩大鉢、白薩摩製品、十島における上質の肥前磁器や京焼色絵陶器は、その所有者が島における有力者である可能性が推測される。

一方、三島と十島との間に見られる差異として清朝磁器の流通がある。三島では硫黄島で17世紀後半～18世紀前半の青花小杯が1点採集されたにとどまるのに対し、十島では踏査した6島すべてで採集されている。17世紀の製品も見られるとともに、18世紀以後の徳化窯産と推測される粗製の青花磁器が数多く採集されている。

沖縄産陶器は三島・十島ともに大壺や摺鉢などの無釉陶器（荒焼）と、土瓶などの施釉陶器（上焼）が採集されている。また民家の庭先などに無釉陶器が並ぶ事例も多く観察できた。これらは沖縄から直接運ばれてきたものと鹿児島本土域を経由して運ばれてきた両者の可能性が考えられる。しかし沖縄産陶器は、施釉陶器におけるコバルトのあるなしなどにより近世と近代とを区分する基準があるものの、とくに無釉陶器においては両者の区別が難しいのが現状である。しかし近世までさかのぼる推測される無釉の徳利なども採集されているので、ある程度、沖縄産陶器が流通していた可能性もある。

また各島嶼において、近世以来継続していると思われる集落のほぼ全域で満遍なく陶磁器が採集された。ただし諏訪之瀬島は文化10年（1813）の御岳噴火堆積物が厚く積もっており、採集資料数はきわめて少ない。また中之島において明治以後に形成された集落（船倉・寄木・日之出地区）ではほとんど採集できなかった。

遺物散布が密な地点として、ひとつは現在の村役場支所や住民センターなどが所在する集落の中心部がある。居住領域の限定される島嶼においては、このような地域は古くより集落の中心となる役所などの公的施設や在地有力者などの居宅があった可能性があり、散布密度の濃さはそれを反映している可能性がある。ただしこの点については、古地図などとの比較対照が必要である。

もうひとつの散布密度が高い地点として、三島では神社周辺（黒尾神社など）、十島では祠（「島中どん」など）や墓地、ガジュマルの木の下などが挙げられる。また諏訪之瀬島切石遺跡では祭祀遺構が検出され、陶磁器はその遺構中より出土している（熊本大学考古学研究室編1994、大橋・山田1995）。それゆえこれらの陶磁器は何らかの信仰対象に対する奉納品的な性格が想像される。

今回の調査で明らかにされた以上のような三島、十島における近世陶磁器流通のあり方が、どのような流通ルートや入手契機によって形成されたのか、以下、笹森儀助が明治28年（1895）に三島・十島を視察した際の記録『拾島状況録』を手がかりとしながら、検討していきたい。

なお現在は三島村と十島村は別の行政単位であるが、明治28年においては両村をあわせて「十島」という一つの行政単位であった。本章では混乱を避けるため、以下とくに断らない限り、「三島」「十島」という呼称を現在の行政単位にもとづいて用いている。

## 2. 笹森儀助と『拾島状況録』について<sup>(2)</sup>

笹森儀助は、弘化2年（1845）陸奥国弘前在府町（現青森県弘前市）に士族の子として生まれる。明治初期、青森県の地方行政官を勤めるが、明治14年（1881）に退職。旧士族の授産を目的とした牧場経営会社・農牧社を設立、副社長・社長に就任する。同25年（1892）退職。

同年、千島列島を探検し、その内容を『千島探験』にまとめる。その翌年、沖縄に渡り、沖縄諸島、八重山諸島を探検し、当時の沖縄の様子を詳しく伝える『南嶋探験』（笹森（東校注）1982・1983）を執筆する。同書はすぐれた民族誌としても高く評価されている。同27年（1894）、その経験が買われ、奄

美大島島司に就任する。28年、当時、島司の管轄下にあった「十島」、現在の三島村と十島村を視察し、さらに29年には日清戦争で日本の領土となった台湾を視察している。同31年（1898）辞任。

その後、明治32～34年（1899～1901）年には朝鮮に渡り、帰国後の翌年には第二代の青森市長に就任。また私立青森商業補習夜学校を設立、初代校長となっている。同36年（1903）市長を辞任し、大正4年（1915）死去。享年70歳。

『拾島状況録』とは、先述した三島・十島の視察報告である。明治28年4月27日に奄美を出発し、8月27日に帰島するまでの4ヶ月間に渡る行程である（表8-1）<sup>(3)</sup>。定期船などがなかった当時、漁船を借り上げながらの渡航は困難をきわめたという。

『拾島状況録』は「竹島記」「硫黄島記」「黒島記」「口之島記」「中之島記」「臥蛇島記」「平島記」「諏訪之瀬記」「悪石島記」「宝島記」よりなる。途中、口之永良部島にも立ち寄っているが、当時、同島は種子島庁の管轄だったせいか含まれておらず、また小宝島に関しては「宝島記」に包括されている。各島の記述の体裁はほぼ統一されているが、島ごとに若干の異同もある。代表的な項目を整理すると以下ようになる。

第一編 土地：「地形、山岳、沿岸、港湾」「山林、原野、耕地、道路、用水、地質、温泉、池沼、洞窟」「村落」「潮流」「古跡」「家畜類及自然、獣鳥類、虫類」<sup>(4)</sup>

第二編 住民：「沿革」「産業」「生活」「財産」「売買及交換」「貸借」「島外（ヨリ）ノ収入」「租税及公費」「風俗」「体格」「疾病」「教育」「智識」「行（交）通」<sup>(5)</sup>

第三編 村治：「行政組織」「村民協議会」「（村中）規約」

第四編 寺社：「寺院」「神社」「神仏崇信」

第五編 雑件：「犯罪及訴訟」「書信」「吏員渡航」「徴兵」「災害」「菓樹」「難破船」「変死」

以上のように『拾島状況録』の内容は、自然・社会・文化・歴史など幅広い分野に渡っているが、本章では、この中から商業活動や物資流通、陶磁器に関する記述を抽出し、明治中期の三島・十島におけるそれらの様相について整理、検討したい。そしてそれを手がかりとして近世における物資流通のあり方を検討する。

表8-1 笹森儀助の視察行程

明治28年	行程
4月27日	6:00奄美大島発
4月28日	10:00鹿児島着
5月3日	10:00鹿児島発、17:00知覧着
5月4日	10:00知覧発、12:00枕崎着
5月11日	10:30枕崎発、16:30竹島着
5月14日	15:00竹島発、16:50硫黄島着
5月20日	10:30硫黄島発、15:00黒島（大里）着
5月22日	07:35大里発、10:10片泊（黒島）着
5月28日	11:40片泊発
5月29日	02:20口之永良部島着
5月31日	09:30口之永良部発、16:35口之島着
6月4日	10:00口之島発、12:00中之島着
6月18日	09:00中之島発、14:30臥蛇島着
6月28日	09:00臥蛇島発、17:00平島着
7月11日	07:30平島発、11:25諏訪之瀬島着
8月5日	10:00諏訪之瀬島発、13:00悪石島着
8月11日	09:00悪石島発、小宝島上陸、20:30宝島着
8月26日	08:35宝島発
8月27日	08:40名瀬港着

表8-2 『拾島状況録』における物資流通関係記事抜粋

		商業活動	日用品の購入方法	陶磁器の記述	その他
三島	竹島	①「土地ニ商人ナリ又行商ノ来ルコトナシ」(p.125)	②而シテ毎年収獲スル鰹節其他ノ海産物及菜種ノ収獲ヲ容ルルノ約束ヲ以テ、枕崎ノ金主ヨリ島中需要ノ物品ヲ前買シ、其報酬トシテ海産物ニ在テハ代価ノ貳割、農産物ニ在テハ其壹割ヲ金主ニ納ム。日用品ハ金主ノ仕入ヲ受ケ」(p.124) 「島民ノ需要ハ何レモ枕崎ニ仰キ、金主ノ供給スル処アリ」(p.125) 「竹島ヨリ内地ニ航スルノ地ハ一ニ枕崎ニシテ、毎年旧曆二三月一度、旧五六月一度、十月又ハ十一月一度、其他荷渡船(松魚船造り)ヲ以テ渡航シ、主トシテ漁獲ノ海産物ヲ金主ニ納シ、米穀其他ノ日用諸品ヲ仕入シテ帰ル。時トシテハ一ヶ年二回ノ外渡航セサルコトアリ。其他内地ヘ渡航スルコトナシ」(p.130)	③(聖神社)「陶器類多数ヲ納ム。其内朽葉色、青磁、梓色ノ小皿七個ト白色ノ大碗、年代古キカ如シ。其他見ルヘキモノナシ」(p.134)	
	硫黄島	④「本島商估ナシ。又比較的多数ノ出入アルモ旅宿ナシ。曾テ加世田ノ商人商船ヲ仕立テ反物行商ニ来リタルコト一度、其他斯類ノモノ来リタルコトナシ」(p.143)	⑤「本島古来内地トノ行(交通)、拾島中尤モ頻繁ナルヲ以テ、日用什器ハ常ニ内地ヨリ輸入スル便ヲ得」(p.142) 「島民日常ノ物品ハ其大部を鹿児島ヨリ輸入ス。硫黄運搬船ノ交通アレハナリ。然ルニ海産物ハ金主ノ所在地タル枕崎及加世田ニ輸出シ、他ニ之ヲ輸スラ許サス。之レ配当ヲ要スレハナリ」(p.144)		
	黒島	⑥「島中相互間ニ於テ物品売買ナク、又商人若クハ行商人ノ来リタルコトナシト云フ」(p.158)	⑦「需要ハ枕崎若クハ鹿児島ニ就キ之ヲ購ヒ若シクハ漁船ニ托シ、購求スルコトアリ。其便硫黄島ニ及ハサル事遠キモ、竹島ニ譲ルコトナシ」(p.157) 「島民ノ需要ハ枕崎ニ金主ヲ措キ、毎年每家ノ需要ヲ受ク。其代価ハ約シテ卸売ノ価額ヲ以テシ、鰹節ヲ納メテ出入ヲ相殺ス、故ニ鰹節ニ在テハ他ニ売買スラ許サス」(p.158)		
十島	口之島	⑧「島中商人ナク又行商人ノ来リタル事ナキヲ以テ売買ナク、又土人相互中ノ売買全クナク、又島中各種ノ交換行レス」(p.177)	⑨「毎年三月ノ末四月ノ初メニ於テ一度、十月頃一度、海産物或ハ自然生ノ木耳(キクラゲ)ヲ積テ、鹿児島ニ渡航販売シ、島中ノ需要品ヲ仕入ス」(p.181)		
	中之島	⑩「島中商人ナク、又曾テ行商人ノ来リタルコトナシ」(p.195)	⑪「本島ハ口之島ト同ク、内地ニ金主ヲ措ス、故ニ漁獲ノ海産物等ハ毎年一回又は二回鹿児島ニ輸出シ、一ヶ年ノ需要品ヲ買入来ルヲ例トス」(p.194)		⑫「其他材木ヲ口之島、平島、諏訪ノ瀬島、臥蛇島、悪石島ニ、刳舟ヲ口之島ヲ除クノ外ノ四島ニ、又時トシテ材木ヲ沖縄人ニ、蘭筵ヲ臥蛇島若シクハ漁船ノ寄港スル者ニ売却スルノ外、売買スル者ナシ」(p.194)

	商業活動	日用品の購入方法	陶磁器の記述	その他	
十 島	臥蛇島	⑬「廿二三年間内地ヨリ船ヲ仕立テ、穀物若クハ反物等ヲ搭載シ来リタル商人アリシカ、爾后絶エ之ナク、亦島内商業ヲ為スモノナシ」(p.209) 「土地ニ商業ヲ為スモノナシ。又曾テ枕崎ノ商人某反物、茶、小間物等ヲ積ミ行商ニ来リシコトアリシカ、当時之ヲ買入ルル者寡ク、爾后又来ラスト云フ」(p.224)	⑭「一カ年ノ需要ハ鹿児島若クハ枕崎ニ渡航ノ時仕入ルモノナリト云フ」(p.209) 「島中相互間金銭ヲ以テ売買、若クハ交換スルコトナシ。島中ノ需要ハ鹿児島、枕崎若クハ大島ノ土地ノ海産物ヲ搭載渡航シテ、輸出品ノ価額ニ応シ、相当ノ物品ヲ購求シテ還ル」(p.224)	⑮「宗社ヲ八幡宮ト云フ。(中略)自然石若クハ貝殻ヲ蔵メテ神体ト為シ、陶器少許ヲ納ムレトモ、言フニ足ルヘキモノヲ見ス」(p.230)	
	諏訪之瀬島	⑯「本島、他島ト異リ島中相互ニ売買ヲ為ス。(中略)然ルニ明治二十四年ヨリ、口ノ永良部島ノ商人袈裟助ナル者、毎年一回又ハ二回茶、油、米、大豆、反物、煙草、摺付木、□若クハ糸類、味噌、醤油、塩等ノ類ヲ、其自船艦船ニ搭載シ来リ、砂糖ト交換シ若クハ現金ヲ以テ売却シ、砂糖ヲ買入レ販航ス」(p.254)	⑰「島中ノ需要ハ毎年一回或ハ二回収穫ノ砂糖ヲ、大島ニ輸出シ、其代価ヲ以テ購求スルヲ例トス」(p.254)		
	悪石島	⑱「其他土地ニ商人ナク、必要ヲ生シタルトキ相互ニ之ヲ融通スル事、他島ニ於ルカ如シ。又廿年七月、口之永良部島寄留給黎ノ商人、鈴木四郎助船ヲ仕立テテ米、茶、烟草及布其他日用諸品ヲ搭載シテ行商シ、廿六年一回、廿八年亦一回、同上ノ諸品ヲ携帯シテ来ル。廿五年口之永良部島寄留加世田ノ商人清水袈裟五郎一回、廿四年谿山ノ商人児玉仙次郎同ク一回、同上ノ諸品ヲ携帯シテ来リ、鯉節ト交換シ又ハ売買セリ」(p.267)	⑲「毎年鹿児島ニ渡航シ、土地ノ物産ヲ販売シ、一カ年ノ需要物品ヲ購求スルノ例ナリシガ、近来毎年六月末ヨリ八月初頃一回大島ニ渡航シ、其売買ヲナセリ」(p.267)	⑳「本島、宗社ヲ八幡宮ト云フ。(中略)神体ヲ備エス、古鏡方形壹個、円形四個、同ク柄付六個、貝殻、花瓶、皿、茶碗等ヲ納ム。陶器類中見ルヘキモノナシ」(pp.272-3)	
	宝島	㉑「島人互ニ売買ヲスルコトアルノ外、全ク売買ナルモノナシ。商人ハ明治十六年、内地商人船ヲ仕立テ反布、茶、其他ノ雑品ヲ搭載シ行商ニ来リタルコトアリシカ、左程商売モナカリシ。爾后来ラス。島中ニ於テハ素ヨリ常住ノ商人ナキナリ。然ルニ大島ヨリ時ニ甘藷若クハ牛ヲ買入イ来ル事アリ。亦本島ノモノニシテ、大島沖縄間ヲ商売セシモノ一人アリシカ、今之ヲ中止シタリト。小宝島ハ魚類、枇榔蓑等ヲ搭載シ、大島ニ渡航シ之ヲ売却シ、其用品ヲ仕入ル事、本宝島ニ同シ。然シテ島中売買等ナキ事勿論ナリ」(pp.285-6)	㉒「藩代毎年一回郡司上臈セシカ故ニ、鹿児島ニ渡航シ、売買ヲ為シ、爾后亦然リシカ、明治十九年ヨリ鹿児島渡航ヲ罷メ、一ヶ年三四回或ハ四回大島ニ航シ、砂糖、牛、屋久貝殻等ヲ搭載シ、之ヲ大島山下店若クハ松枝分店等ニ売却シ、島中入用ノ物品ヲ仕入レ帰ルヲ例トス」(p.285)	㉓「本島ノ宗社ヲ鎮守神社ト云フ。村落ヲ下ニ去ル大凡貳町許ノ山中ニアリ。籬竹ヲ以テ家ヲ造リ、花瓶数百個ヲ納ム。之レ鹿児島渡航ヲ終ヘ販リタル時寄進セシ処ナリト。共ニ粗品ニシテ見ルヘキモノナシ。其他神体神具ヲ納メス」(p.293)	㉔「藩代以来毎年一回百貳拾貳石積(拾四反帆、巾壹丈七尺、長不明)ノ船ヲ以テ、六月頃上臈、九、十月頃販島シ、大島ヘハ牛ヲ積ミ、毎年一回渡航スルノミナリシカ、明治十九年以来全ク大島渡航スルコトナリ、(中略)之同年ヨリ大島ニ於テ売買ノ便ヲ為シ得ベキニ至リタルカ故ナルト、航海ノ容易ナルトニ依レリ」(p.291)



### 3. 『拾島状況録』に見られる物資流通

『拾島状況録』(以下『状況録』と略称)における商業活動や物資流通、陶磁器に関する記述を抽出して整理したものが表8-2である。以下、この表に基づきながら論を進めたい。なお表8-2各欄には便宜的に①～④の数字を当てており、下記本文中で示されたそれと一致する。

#### (1) 各島嶼における商業活動

まず各島における商業活動であるが、諏訪之瀬島(⑩)を除いて、「商估」(商店)がなく、「行商人」も来ることはないとされている(①④⑥⑧⑩⑬⑮⑲⑳)。島によっては個別に行商人の来訪を記述しているが(④⑮⑲)、そのことは逆に行商人の来島が珍しかったことを示していよう。つまり三島・十島の人々は日常的に陶磁器を含めた日用品を購入する機会がほとんどなかったと言える。

#### (2) 日用品の入手方法

では島民はどのようにして日用品を入手していたのか。そのあり方は三島と十島とではやや異なる。

##### (2-1) 三島

三島においては、造船のための「金主」が枕崎や加世田などにおり、島民は彼らに鯉節などを売却する見返りに日用品の供給を受けることが、竹島や黒島における記述に見られる(②⑦)。供給される物資が、基本的に金主が入手しえるそれに限定される傾向があることが想像されよう。ただしこのようなあり方は明治以後のこととされており(松永1972 p.446)、近世にはさかのぼらせることは難しい。

金主から供給された物資の具体的な内容については、竹島に「明治一六年十二月二十二日／所中江諸品物渡付帳／今塩屋森山清八方／竹島元中」という文書が残っており、枕崎の森山清八に鯉節を納めた際の「見返品」が記載されている(表8-3、三島村誌編纂委員会編1990 pp.302-303)。食品から衣料、細々とした日用品、薬など、竹島の人々が金主からの供給品に大きく依存していたことがうかがいしれる。またその中には陶磁器の碗・皿類も含まれており、詳細は不明ながら、明治中期の竹島の日用陶磁器の流通状況を知る手がかりとなる。

表8-3 明治16年(1883)の鯉節売却の「見返品」

食品等	衣料等	日用品等
真米一俵(一円五五銭八厘)	上島一反(五六銭)	蠟燭四斤半(三銭)
昆布一斤(五銭)	中島一反(五〇銭)	傘一本(一八銭)
餅米六升(二九銭四厘)	形付一反(七四銭)	はっ駄一(一四銭)
茶一斤(二二銭)	打綿一反掛(二二銭)	半田紙一束(十二銭五厘)
素麺五百目(一三銭六厘)	白地木綿一反(三一銭)	呉座三枚(三〇銭三厘)
大豆一斗五升(六七銭五厘)	かすり縞一反(九五銭)	ふり一つ(四銭八厘)
	ギンカケ浅黄一反(五五銭)	百田紙二帖(六銭五厘)
		仙香一〇把(一〇銭)
		薬一斤(二二銭)
		油一升(二〇銭)
		石油四半箱(六一銭三厘)
		茶茶わん一束(一六銭)
		飯茶わん二束(二八銭)
		なら茶一束(三六銭)(奈良茶碗か?)
		中皿一束(三五銭)
		小皿一束(三一銭)

このほか竹島には、同島の安永善右エ門が注文した物品に関する記録もある。年代不詳であるが、「筆一〇本（一一銭）・セキ筆一〇本（四銭）・せくばん二つ（一三銭）・墨三丁（九銭）・猪口一束（九銭）・エツキ茶家一つ（三銭五厘）・健胃固腸丸一服（一〇銭）・黒砂糖二斤・白砂糖一斤」とある。安永は明治16年（1883）に寺子屋を開き、竹島校の基礎を築いた人物であり、そのため注文品には文房具などが含まれている。また猪口や茶家（土瓶）といった陶磁器もあり、注文により物品を購入する場合もあったことがわかる（三島村誌編纂委員会編1990 p.303）。

一方、硫黄島の場合は、硫黄の運搬という、他島に比べて鹿児島本土地域とのより頻繁な往来があり、「島民日常ノ物品ハ其大部を鹿児島ヨリ輸入ス」(⑤)とある。ただし近世においては、『薩藩政要録』(文政11年(1828))に「御勝手方証文を以他国出品々之事」、つまり他国へ販売するためには藩の許可が必要な物品のひとつとして「硫黄」が挙げられており（鹿児島県史料刊行会編1960 p.183）、その流通については藩の支配下に置かれていたことが推測される。それゆえ硫黄運搬にともなう物資流通が近世において同様であったかどうかは不明であるが、硫黄島には三島を支配する「硫黄島在番」が置かれており（三島村誌編纂委員会編1990 p.181）、鹿児島本土との往来は、近世においても他の二島に比べ、より密であったろう。

近世三島では、第3章で先述したように『元禄国絵図』には山川湊⇔竹島、山川湊⇔硫黄島、竹島⇔硫黄島、硫黄島⇔黒島（大里）の航路が描かれている。山川湊は薩摩藩の藩港であり、また同国絵図が幕府に提出したものであることを考えると、上記の航路は藩の公的ルートと考えることができる。『三島村秘史』によれば、近世の船には、年貢を納めるための「年貢船」、公用の書類や役人を送る「御用船」、「漁船」、年貢船・漁船に附属する「伝馬」の4種類があり、年貢船・御用船の建造費は藩から貸し付け、代わりに魚や鰹節を納めさせたという（松永1972 p.446）。また三島の庄屋太夫は藩主への御目見えが許されていたという（同上pp.220-222）。このような年貢船・御用船、あるいは御目見えのための渡航には、おそらく上記の公的ルートが使用されたと考えられる。

ほかにも漁船に物品購入を託す場合もあり(⑦)、多様な入手方法が併存していたことがうかがわれる。

また『三国名勝図会』巻ノ二十八（1846年）には、硫黄島の物産の項に以下のようにある（原口監修1982 p.902）。

「△鱒魚 方言 永良部鰻魚（エラブウナギ） 当島の海中に産す、琉球国人来て多く取る」

「永良部鰻魚」とは、沖縄で「イラブー」と呼ばれる高級食材であり、それを入手するために硫黄島近海に「琉球人」が来航したという。もちろんこのことが、三島と琉球間で物資流通があったことを直接意味するわけではないが、近世において両者の接触が十分にありえたことを暗示している。

## (2-2) 十島

十島では、三島のように造船の金主がおらず(⑩)、各島の生産物（海産物や砂糖、屋久貝（ヤコウガイ）など）の出荷先の土地で日用品を購入したという(⑨⑩⑭⑰⑱⑲⑳㉑㉒)。ここで興味深いのは、島や時期によって出荷先が異なる点である。

口之島：鹿児島(⑨)

中之島：鹿児島(⑩)

臥蛇島：鹿児島・枕崎・奄美大島(⑭)

諏訪之瀬島：奄美大島(⑰)

悪石島：鹿児島、近来は奄美大島 (19)

宝島：藩政時代は鹿児島だったが、明治19年 (1886)以後は奄美大島 (22②4) (6)

このうち諏訪之瀬島は文化10年 (1813)の噴火により全島民が離島し、明治16年 (1883)になって奄美大島の藤井富伝らが移住・開拓していることから、大島との結びつきが強いのは、そのためと考えられる。そのまま近世までさかのぼらせることはできない。

一方、近世においては、周知のように慶長14年 (1609)の島津氏の琉球侵攻以来、奄美諸島までは藩の直轄地になっており、当然、十島も藩の支配を受けている。宝島の記事は、鹿児島との往来が当時の公的ルートであったことを示していよう。

ところで『十島村誌』には元治元年 (1864) 6月24日から慶応2年 (1866) 4月20日までの約2年間における中之島をめぐる公用船の往来が整理されている (十島村誌編集委員会編 1995 pp.614-621)。それをまとめると表8-4になる。もっとも多いのが中之島・悪石島間で、53例 (57.0%)にのぼり、ついで中之島・口之島間の24例 (25.8%)となり、両者で8割以上を占める。近世においては口之島・中之島・宝島に「在番」が置かれており、十島の行政の中心であったが、幕末期には悪石島にも置かれたようである (十島村誌編集委員会編 1995 pp.616)。上記の往来頻度の高さは、そのような行政的な状況を反映していると言える。また回数こそ少ないものの鹿児島への派遣は重要であったろう。さらに諏訪之瀬島に公用船が派遣されていることは、同時期、無人島であったとされる同島に、なんらかの形で人が居住していた可能性を示唆している (同上p.621)。

このような公用船の渡航にともない、さまざまな物資流通が付随したことは、たとえば与論島の役人の日記などからうかがいしれる (先田編著2012 pp.127-128など)。三島・十島における陶磁器流通の一端も、このような公的渡航に付随していた可能性がある。

このほか鹿児島・琉球間の米穀などの輸送船に、十島の船乗りが関わっていた。元文5年 (1740)に鹿児島を発した薩摩船は、琉球に着いた後、久米島へ向かう途中で遭難し、清国・舟山列島に漂着した。寛保2年 (1742)に長崎に戻ってきた彼らの調書と推測される「薩州船清国漂流談」(山下編1992 pp.205-219)が残っている。同書によれば、琉球で病死した「最初の船頭」である伝兵衛は「薩州諏訪之瀬島」の者で (同上p.207) (7)、また水主として「薩摩国河辺郡七島の内諏訪之瀬島」の仲兵衛 (56歳)・与左衛門 (35歳)・彦次郎 (24歳)・覚内 (44歳)・吉兵衛 (38歳)の5人が乗船していた (同上p.218および松浦2013 p.322)。このような往来も、他の物資流通の重要な機会となったであろう。そしてこの場合、鹿児島からだけでなく、琉球からの物資流通の存在も考えておく必要があることを示唆している。

『状況録』の記述からわかることは、口之島・中之島といった北部の島嶼は鹿児島との結びつきが強く、南に下るとともに、鹿児島とのつながりを持ちつつも、奄美大島との結びつきが強くなる傾向があると言える。つまり宝島では「航海ノ容易ナルトニ依」り、大島への出荷を選択しており (22②4)、また悪石島においても、元は鹿児島であったのが、近来、大島への渡航も始まったとしている (19)。ただし近世までさかのぼると、むしろ政治的な理由から南の島嶼においても鹿児島との結びつきが強

表8-4 中之島をめぐる公用船の往来 (1864-66年)

航路	回数	比率
中之島→悪石島	49	52.7%
悪石島→中之島	4	4.3%
中之島→口之島	24	25.8%
中之島→平島	3	3.2%
平島→中之島	2	2.2%
中之島→諏訪之瀬島	5	5.4%
中之島→臥蛇島	4	4.3%
中之島→鹿児島	1	1.1%
不明→中之島	1	1.1%
計	93	

かったと推測される。しかしそれはあくまで公的なルートであり、十島の船乗りが鹿児島・琉球間の運送に関わっていたこと、また近代以後の大島との結びつきが強まることを考えると、近世においても北からだけでなく、南からの往来および物資流通があったことも想像される。また中之島の材木が島嶼間、さらに沖縄も含めて取引されているという記述(⑫)や、各島を結ぶ公用船の往来は、さらに島嶼間での重層的な交易ルートの存在を示している。

### (3) 陶磁器に関する記述

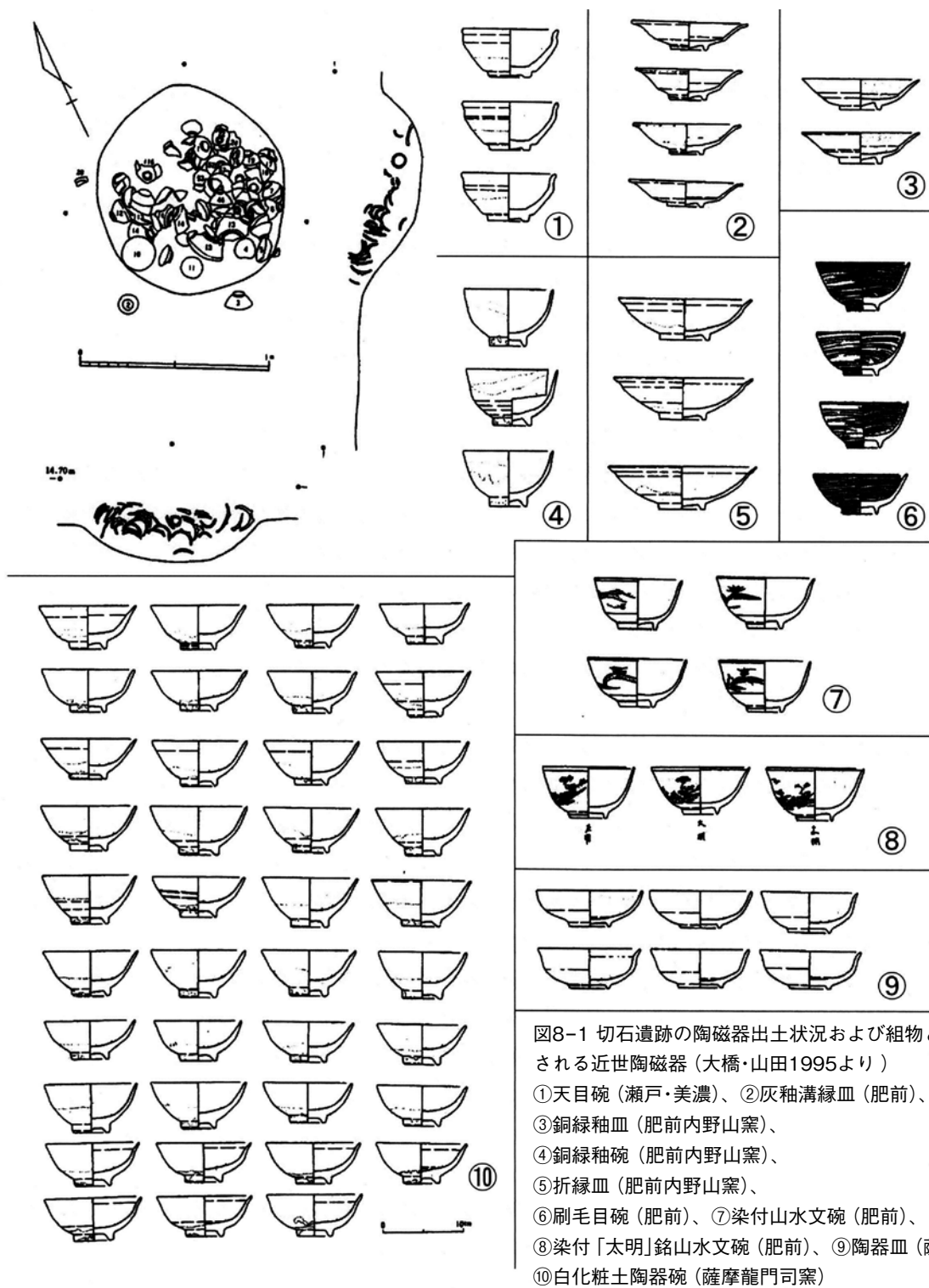
各島の陶磁器のあり方については神社との関係で言及されている。竹島の聖神社(③「陶器類ヲ多数納ム」)<sup>(8)</sup>、臥蛇島の八幡宮(⑮「陶器少許ヲ納ム」)、悪石島の八幡宮(⑳「花瓶、皿、茶碗等ヲ納ム」)、宝島の鎮守神社(㉓「花瓶数百個ヲ納ム」)などである。

これら神社や祠などに納められた陶磁器は現在まで伝来しているものもあり、中世の貿易陶磁については亀井明徳が検討している。その中で亀井は、それらが当初より奉納品・祭祀品としての性格が付与されており、また生産年代・産地が散発的であることから、難破船や漂着船などの「寄船」の際に、偶発的に入手された可能性を指摘している(亀井1993 pp.34-35)。また諏訪之瀬島切石遺跡の祭祀遺構からは中世から近世にかけての中国・ベトナム・日本産陶磁器の出土が確認されている(熊本大学考古学研究室編1994、大橋・山田1995)。このほか硫黄島の熊野神社周辺および黒島大里の黒尾神社周辺では、中国産陶磁器片が多数採集されており、神社と関係があった可能性が示唆されている(橋口・若松2011a・b・2013、市村2013、渡辺2014a)。

さて『状況録』において注目されるのが宝島の鎮守神社の記述で、「花瓶数百個ヲ納ム。之レ鹿児島渡航ヲ終へ販リタル時寄進セシ処ナリト。共ニ粗品ニシテ見ルヘキモノナシ」(㉓)とある。つまり鹿児島への渡航から無事に帰島できたことを感謝して、神社に花瓶(仏花器の類か)を奉納する習慣があり、それが繰り返されるうちに「数百個」に達したのであろう。奉納品は、それまで使用していた日用品を転用したとは考えにくいことから、鹿児島において新たに入手したものと想像される。また「粗品」とあることから、特別なものではなく、容易に入手しうる量産品であった可能性が考えられる。陶磁器が日用品としてだけでなく、このような奉納品としても島嶼に持ち込まれていたことを示す事例と言えよう。

さらにここで諏訪之瀬島切石遺跡出土の近世陶磁器に注目したい。同遺跡では配石・積石遺構、土坑よりなる祭祀遺構が検出されており、土坑内部から138個体の陶磁器と16個体の土師器皿(灯明皿)が出土し、陶磁器について周辺出土例も含め148個体が報告・検討されている。14世紀後半から18世紀の中国磁器、ベトナム磁器、日本(瀬戸美濃・肥前・薩摩)陶磁器が出土しており、その下限は、先述したように文化10年(1813)の噴火による全島避難に設定できる(大橋・山田1995)。

切石遺跡出土の近世陶磁器の特徴として、いずれも完形率がきわめて高いこと、器種が碗・皿(鉢)に限定されること(甕・壺など貯蔵具の不在)、また同一器形・法量・文様を有する組物と推測されるものが含まれる点などが挙げられる(図8-1)。完形率の高さと器種の限定は、これらの陶磁器が奉納品的性格を有していた可能性を示唆する。また筆者は、熊本大学考古学研究室に保管されている同資料を観察する機会があったが(2004年6月3日)、高台畳付や碗内底部に使用痕・摩耗痕などがほとんど見られないことから、未使用に近い状態で奉納されたのではないかと考えている。このことは逆に、これらが当時の諏訪之瀬島の日用陶磁器のあり方をそのまま反映したものかどうか、疑問を残すことになる。



また組物が含まれる点について大橋・山田は、「九州本土から遠く離れた小島という性格から、頻繁に陶磁器が搬入されたのではなく、購入などの入手できる機会にまとめて入手した結果を表しているように思われる。とくに肥前陶磁をみると、佐賀県嬉野町の内野山窯の陶器が多く、取扱う商人が単一もしくはそれに近い小数(マ)のためにそうした内容的に偏った傾向が出てくるように思われる」(大橋・山田1995 p.163)と推測している。この推測は先に示したように、三島・十島において物資の入手機会が限られていたという『状況録』の記述とも符合する。

さらに十島村立歴史民俗資料館に収蔵されている臥蛇島伝来資料中の近世陶磁器には、第4章でも触れたように、完形率が高いこと、使用痕跡が見られないこと、同じ器形・文様の器種が2あるいは4個体セットになっていることが特徴として認められる。このことは先に検討した切石遺跡出土近世陶磁器と同じである。長嶋俊介によればこれら臥蛇島伝来資料は、同島の八幡神社関係の文化財であるという（長嶋2009 p.120）。おそらく、やはり日用品としてではなく、最初から奉納品として入手された可能性が考えられるのである。

これら奉納品的性格を有すると思われる切石遺跡の出土陶磁器や臥蛇島伝来資料は、前述した宝島・鎮守神社への奉納の記述と重ね合わせると、日用品としてではなく、あらかじめ奉納品として島内に搬入された可能性も想定できる。つまり三島・十島における陶磁器入手の契機として、日用品としてのそれとともに神社への奉納があった可能性が推測されるのである。

### おわりに

以上、『状況録』に見られる商業活動、物資流通、陶磁器に関する記述を整理し、他の史資料も含めて検討してきた。三島・十島における採集陶磁器の様相と重ね合わせると、以下のようにまとめられる。

- (1) 三島・十島ともに商店・行商人の来島がなく、日用品の入手は、鹿児島からの供給（三島、とくに竹島・黒島）や、鹿児島や奄美大島、沖縄への渡航に際して、個別的な注文などによって入手された。つまり三島・十島では独自の市場を形成することはなく、鹿児島や奄美大島、あるいは沖縄などの市場に依存する形で物資が流通していたと言える。

三島・十島において採集された近世陶磁器のうち、本土産陶磁器の様相が鹿児島本土域のそれと共通することは、近世においても上記のような流通のあり方によるものと理解することができる。また十島における清朝磁器の分布は、その中でも沖縄への渡航に際して入手され、流通した結果と考えられる。

- (2) 上記のような市場へのアクセスは、近世においては政治・行政的な理由から鹿児島に偏る傾向があったと推測される。しかし明治以後になると、物理的な距離が要因となり、北部の島嶼では引き続き鹿児島とのつながりが強いが、南部へ行くほど奄美大島との結びつきが強くなる傾向がある。ただし近世においても島嶼間におけるさまざまな契機による多層的な交易ルートが想定できる。三島・十島における本土域と共通する本土産陶磁器の様相ならびに十島における清朝磁器の流通はそのような多層的な交易ルートによって運び込まれたと考えられる。

- (3) 宝島における記述および切石遺跡出土の近世陶磁器の様相から、日用品としてだけでなく神社等への奉納品としても陶磁器が島に持ち込まれたことがうかがいしれる。また臥蛇島伝来の近世陶磁器についても、その特徴から奉納品的な性格を持っていたものが離島の際に持ち出さ

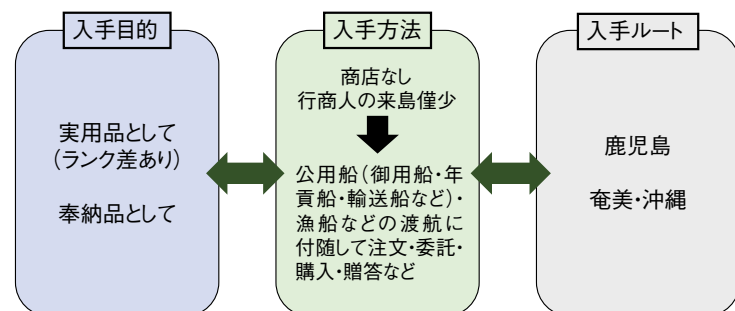


図8-2 近世三島・十島における陶磁器の入手目的・方法・ルート

れた可能性がある。

以上の検討結果に基づき、近世の三島・十島における陶磁器の「入手目的」「入手方法」「入手ルート」を整理すると図8-2のようにまとめることができる。

また上記のうち(1)(2)については図8-3<sup>(9)</sup>ならびに以下のようにまとめられる。独自の市場を形成しない島嶼部において、その物資流通の様相は、各島嶼がアクセスする頻度の高い、より大きな市場の様相に大きく影響を受ける。そのアクセスの頻度は、地理的条件だけでなく、政治・社会的条件によって規制される。

またそのアクセスの目的は必ずしも経済的なものだけではなく、政治・社会的な場合もあり、物資流通はそれに付随して注文や贈答など個別的行われることも多い。

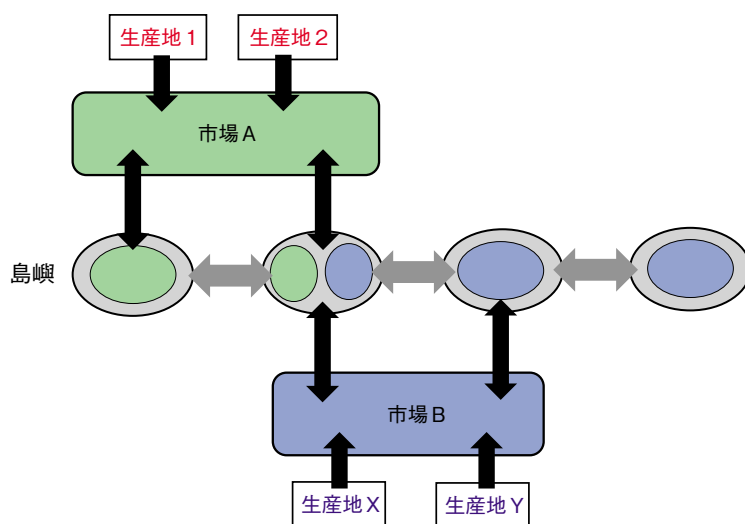


図8-3 島嶼における物資流通模式図

## 注

- (1)『拾島状況録』に先行する三島・十島に関する明治期の記録として、明治17年(1884)の白野夏雲『七島問答』、明治20年(1887)に鹿児島県令・渡辺千秋に提出された『島嶼見聞録』があるが、両書とも、本稿で取り上げる物資流通や陶磁器に関する記述はきわめて少ない。以下、注の中で適宜触れたい。なお両書とも鹿児島大学附属図書館所蔵版を参照した。
- (2)本章の記述は青森県立郷土館編2005、東2002、横山1968を参照した。また本稿における『拾島状況録』の内容は笹森1968による。
- (3)表1は、笹森儀助自筆の『鹿児島縣薩摩國 川邊郡拾島巡廻日記』に基づく東2002pp.112-123の記述を整理したものである。
- (4)「硫黄島記」と「口之島記」には「硫黄山」の項目がある。
- (5)「諏訪之瀬島記」には明治16年(1883)に奄美大島から移住した藤井富伝および移住・開拓の経緯についての詳しい記述がある。
- (6)明治17年(1884)の『七島問答』の「宝島記」の「物産」の項に、黒糖を「鹿児島ニ輸出シ年中欠乏ノ諸品ニ交易ス」とある。
- (7)ただし文末の乗員一覧では「薩摩河辺郡泊浦」の「船頭 伝兵衛」となっている(山下編1992 p.218)。この齟齬の理由は不明であるが、諏訪之瀬島の水主5人が乗船していたことは間違いなからう。
- (8)明治20年(1887)の『島嶼見聞録』によれば、聖神社には「多ク陶器類ヲ蔵ス」とある。
- (9)三島・十島では確認できなかったが、大きな市場(A・B)に直接アクセスせず／できず、島嶼間のアクセスのみで物資を入手する島嶼の存在も想定可能であるため、図8-3にはそのようなケースも含ませている。

※本章に関わる参考引用文献は、巻末の「参考引用文献」にまとめている。

## 第9章 総括

本研究では、近世日本国家領域の南と北のふたつの「境界域」における物資流通の様相を比較検討することで、境界域のあり方を考古学的に明らかにしようと試みた。

「報告編」では、南の境界域である琉球と鹿児島をつなぐ三島村、十島村の考古学的踏査と奄美大島瀬戸内町の旧家伝来陶磁器を実施することで、近世南西諸島域における陶磁器流通の実態についての基礎資料を蓄積した。

三島・十島における踏査により、近世本土産陶磁器の流通の様相は、鹿児島本土地域と大きな違いはなく、基本的に鹿児島経由の北からの流通圏に依存していたことが明らかにされた。ただし十島においては、清朝磁器が踏査した有人島すべてで採集されたことから、沖縄からの流通も密度が濃かった可能性を示唆していると言えよう。また明治中期の文献史料を参照しつつ、三島・十島における陶磁器流通の特徴をまとめると以下ようになる。

- (1) 陶磁器は、公用船をはじめとした、さまざまな理由による渡海に付随して入手された。
- (2) 陶磁器の入手先は、鹿児島と奄美、沖縄の南北両方向があった。とくに十島においてその特徴が顕著である。
- (3) 陶磁器入手の目的は、日用品とともに、神社や祠への奉納があった。後者の場合、使用することなくそのまま奉納された可能性が、諏訪之瀬島切石遺跡出土例や臥蛇島伝来陶磁器から推測される。

奄美大島瀬戸内町加計呂麻島の旧家に伝来した陶磁器の調査により、南西諸島域における在地の有力者(与人)が必要としていた陶磁器の内容の一端が明らかにされた。基本的に廃棄物である考古学的資料としての陶磁器と、伝来陶磁器とでは、その組成・内容において違いが見られることが確認できた。つまり島嶼に限らず、ある地域における陶磁器流通の実態を明らかにするためには、両者を総合して検討する必要があることを指摘できる。

「考察編」において、関根達人は、アイヌ社会における日本系の考古学的資料の出土状況を精査することで、蝦夷地(北海道)の政治的な「内国化」に先行して、経済的なそれが進行していたことを示している。つまりアイヌ社会における威信財から生産用具にいたるまで、日本製品(和産物)の大量流入によるアイヌ社会の経済的自立性の喪失(=日本国内経済圏の北方への拡大)が生じていたと考えられると指摘している。その結果、18世紀にはアイヌ側に極めて不利な「不平等交易」が常態化するとともに、蝦夷地向けの製品(漆器・ガラス玉・蝦夷刀など)が生まれたとしている。

一方、池田榮史は、近世琉球における物資流通、とくに陶磁器流通について文献史料と考古学資料とを比較検討している。文献史料には、琉球と清朝との進貢貿易による物資流通については詳しく記録され、近世琉球の日用品が清朝製品に深く依存している状況がうかがえるとした。しかし考古学的資料を見ると、清朝磁器のほかに、薩摩藩経由と考えられる本土産陶磁器(肥前・薩摩)や沖縄産陶器もまた使い分けされながら流通している状況を示していることを指摘している。

また渡辺は、上述したように三島、十島が、本土産陶磁器については鹿児島本土地域の流通圏に依存しつつも、とくに十島において沖縄経由の清朝磁器が流通している状況を示し、多層的な流通ルートがそれらの陶磁器を島嶼にもたらしたことを指摘している。

以上の調査研究成果は、境界域をめぐるいくつかの論点を浮かび上がらせる。



ひとつは政治と経済との関係である。関根が指摘しているように、蝦夷地では政治的内国化に先行して経済的なそれが進行している。一方、近世琉球では、琉球王府が清朝との進貢貿易を掌握することにより、政治的枠組みが経済活動を規制する状況が見いだせる。同じ国家領域境界域でも異なる様相が把握できる。

このような違いの生じる理由を考える上で、もうひとつの論点として、国家と非国家との関係性がある。琉球王府と薩摩藩(幕府)とは、必ずしも対等な関係ではないとはいえ、国家と国家という関係で経済活動に対する規制・統制が可能になったのに対し、松前藩(幕府)とアイヌ民族とは国家と非国家という関係であるがゆえに、しばしば政治的枠組みを逸脱して進行する経済活動に対してアイヌ側が規制するだけの権力を持ち得ず、日本国内経済に依存せざるをえない状況が生み出されたと考えられる。ただしその中であってアイヌが日本製品を改変しながら、みずからの文化的コンテクストに取り込んでいる点は、政治、経済、さらに文化との関係性を考える上で重要であろう。

一方、政治と経済、国家と非国家という関係を考える際に、物資流通という形で示される経済活動の復元において、考古学資料が有効なアプローチであることが今回の研究成果としてあげられる。池田が指摘しているように、文献史料には清朝との進貢貿易には詳しい記録が残っているが、考古学的には、それ以外にも薩摩経由の本土産陶磁器や沖縄産陶器の流通が確認されている。また経済の内国化は、アイヌ社会における考古学資料の出土状況から明らかにされたものである。また三島、十島における陶磁器流通も、文献には現れにくい多層的な交易ルートが存在したことを指摘した。

以上、本研究の成果として、国家領域境界域の歴史的具體相の解明には、政治と経済、国家と非国家、文献史料と考古学資料という多面的なアプローチの必要性を指摘しえた点にあると言えよう。

最後に本研究を踏まえての今後の課題と展望についてまとめたい。

近世日本には、今回取り上げた「松前口」(対アイヌ)「琉球口」(対中国)とともに、「長崎口」(対オランダ・中国)「対馬口」(対朝鮮)を加えた「四つの口」があったことが知られている。「四つの口」は近世日本の対外交渉地として、他の地域とは異なる性格が付与され、独自の歴史を歩んできた。それゆえに考古学的資料により示される物資流通の様相も、他地域とは異なる状況が予想される。もちろんその特殊性ゆえに、「四つの口」はそれぞれ個別的な調査研究の蓄積がある。しかしそれらを相互比較することによって、近世対外交渉地＝境界域としての共通性と個別性の検討は、いまだ十分になされていない。本研究の成果を相対化し、位置づけていく作業として、「四つの口」の比較研究が必要であろう。

また今回の三島、十島の踏査は、その考古学的調査の端緒に過ぎない。分布調査はあくまで地表面に散布する資料の把握にとどまり、考古学資料としての情報はけっして多くない。明確な遺跡、遺構、層位といった考古学的情報をともなう考古学資料が求められる。南西諸島域の人々が、具体的などのような陶磁器の組み合わせを日用品として使用していたか、それが時代的にどのように変化したかを明らかにするためには、近世遺跡の考古学的発掘調査が必要である。

以上、近世日本の国家領域境界域に関する考古学的研究は、まだ緒に就いたばかりであり、今後の課題も数多く残っている。しかし近世日本の「形」を考える上で、これら境界域の具體相の解明は必要不可欠であり、本研究がその進展の一助になれば幸いである。

## 参考引用文献

- 安里嗣淳2011『先史時代の沖縄』(南島文化叢書25)第一書房
- 安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭2004『沖縄の歴史』(県史47)山川出版社
- 青森県2001『青森県史』資料編近世1(近世北奥の成立と北方世界)
- 青森県立郷土館編2005『辺境からのまなざし 笹森儀助展』図録 同館
- 新垣力2003「沖縄出土の清朝磁器」『紀要沖縄埋文研究』1 pp.73-88 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力2009「古墓出土資料から見た近世陶磁器の流通」『紀要沖縄埋文研究』6 pp.1-12 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 池田榮史1994「沖縄県博物館史」『國學院大學博物館學紀要』第18輯
- 池田榮史1995「琉球近世窯業考—窯構造の検討—」『琉大アジア研究』創刊号 琉球大学法文学部附属アジア研究施設
- 池田榮史2000「琉球近世灰釉碗考—上焼施釉技法と目積み技法についての覚書—」『琉球・東アジアの人と文化』上巻(高宮廣衛先生古稀記念論文集刊行会)
- 池田榮史2003「第3部 近世～現代の考古学」『沖縄県史』各論編2(考古)沖縄県教育委員会
- 池田榮史2008「沖縄における文化財保護の歩み」『國學院大學考古学資料館紀要』第24輯
- 池田榮史2011「施釉陶器の成立と展開」『琉球陶器の来た道』展図録 pp.129-133 沖縄県立博物館・美術館
- 池田榮史編2008『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』高志書院
- 市村高男2013「中世日本の西の境界領域と黒潮トライアングル研究—鹿児島県三島村硫黄島の調査を踏まえて—」『黒潮圏科学』6-2 pp.174-187
- 伊藤慎二2009「10～13世紀前後の琉球列島：対外交流と文化的主体」『考古学ジャーナル』591 pp.11-14
- 伊藤慎二2011『琉球文化圏の北限に関する考古学的基礎研究(中間報告)』國學院大學研究開発推進機構
- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 pp.55-70
- 榎森進2003「北奥のアイヌの人々」『アイヌの歴史と文化』I、創童社、pp.154-163
- 大橋康二1995「九州における明末～清時代の中国磁器の出土分布とその内容について」『青山考古』12 55-67
- 大橋康二・山田康弘1995「鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪之瀬遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』15 pp.141-164
- 沖縄県教育委員会1985『沖縄県歴史の道調査報告書—国頭・中頭方西海道(1)・弁ヶ嶽参詣道—』
- 沖縄考古学会2013『琉球近世墓の考古学—近世墓集成編—』(沖縄考古学会2013年度研究発表会資料集)
- 小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 pp.71-88
- 鹿児島県私立教育会編1898『薩隅日地理纂考』同会
- 鹿児島県史料刊行会編1960『薩藩政要録』鹿児島県史料集(1) 鹿児島県立図書館
- 鹿児島大学法文学部考古学研究室1988a「黒島(鹿児島郡)片泊小・中学校所蔵の滑石製石鍋について」『鹿大考古学会会報』8 pp.2-3
- 鹿児島大学法文学部考古学研究室1988b「鹿児島三島村の遺跡調査概報」『鹿大考古学会会報』9 pp.1-8
- 加藤雄三・大西秀之・佐々木史郎編2008『東アジア内海世界の交流史—周縁地域における社会制度の形成—』人文書院
- 上村俊雄1990「遺跡調査研究の成果」『三島村誌』pp.50-67
- 紙屋敦之2013『東アジアのなかの琉球と薩摩藩』校倉書房
- 亀井明德1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11 pp.11-45
- 川宿田好見・平川ひろみ2012「離島における新しい博物館活動のモデル構築へ向けて—鹿児島県三島村を対象として—」『鹿児島国際大学国際文学部論叢』12(4) pp.375-192
- 北野堪重郎編2009『根原遺跡』和泊町教育委員会
- 木下尚子1996『南島貝文化の研究—貝の道の考古学—』法政大学出版局
- 九州近世陶磁学会編2000『九州陶磁の編年』同会
- 金田一京助・杉山寿栄男1943『アイヌ芸術』3(金工・漆器篇)、第一青年社
- 熊本大学文学部考古学研究室編1979「タチバナ遺跡」『熊本大学文学部考古学研究室研究活動報告』4
- 熊本大学文学部考古学研究室編1980「タチバナ遺跡(2)」『熊本大学文学部考古学研究室研究活動報告』7
- 熊本大学考古学研究室編1994『トカラ列島の考古学的調査』十島村埋蔵文化財調査報告第1集 十島村教育委員会
- クライナー、ヨーゼフ・吉成直樹・小口雅史編2010『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群—』森話社
- 佐賀県立九州陶磁文化館編2003『柴田コレクション総目録』同館
- 佐賀県立九州陶磁文化館編2006『近現代肥前陶磁銘款集』同館
- 先田光演編著2012『与論島の古文書を読む』南方新社
- 笹森儀助1968「拾島状況録」『日本庶民生活史料集成』第一巻 pp.117-299 三一書房
- 笹森儀助(東喜望校注)1982『南嶋探験1』平凡社
- 笹森儀助(東喜望校注)1983『南嶋探験2』平凡社
- 下野敏見2009『南日本の民俗文化誌3 トカラ列島』南方新社
- 白木原和美1980「水鳥の邂逅」『日本民族文化とその周辺 考古編—國分直一博士古希記念論集』新教育図書 pp.437-459
- 新里亮人2003「徳之島カムイヤキ古窯産製品の流通とその特質」『先史学・考古学論IV』pp.387-413 龍田考古会
- 新里亮人2009「九州・琉球列島における14世紀前後の中国陶磁と福建産白磁」『13～14世紀の琉球と福建』pp.145-153 熊本大学文学部
- 新里亮人2014「琉球列島出土の貿易陶磁の様相(11世紀～14世紀を中心に)」『琉球列島の貿易陶磁—第35回日本貿易陶磁研究集会(沖縄大会)発表要旨・資料集』pp.15-24 日本貿易陶磁研究会
- 新里亮人編2010『中筋川トゥール墓跡』伊仙町教育委員会
- 新東晃一2005「大池遺跡」『先史・古代の鹿児島：遺跡解説』pp.725-726 鹿児島県教育委員会
- 鈴木由紀夫1995「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクションIV—古伊万里様式の成立と展開—』展図録 pp.272-279 佐賀県立九州陶磁文化館

瀬川拓郎2007『アイヌの歴史－海と宝のノマド－』講談社選書メチエ  
 瀬川拓郎2011『アイヌの世界』講談社選書メチエ  
 関明恵・繁昌正幸編2006『堂平窯跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 関明恵他編2012『芝原遺跡3』鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 関根達人2003「アイヌ墓の副葬品」『物質文化』76、pp.38-54、物質文化研究会  
 関根達人2007a「平泉文化と北方交易1－北奥出土のガラス玉－」『平泉文化研究年報』7、pp.1-13、岩手県教育委員会  
 関根達人2007b「タマサイ・ガラス玉に関する型式学的検討」『アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心に－』pp.653-678、法政大学国際日本学研究所（榎森進・小口雅史・澤登寛聡編2008『北東アジアのなかのアイヌ世界 アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心に2として（下）』pp.125-150に再録）  
 関根達人2007c「本州アイヌの考古学的痕跡」『アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心に－』pp.797-823、法政大学国際日本学研究所（榎森進・小口雅史・澤登寛聡編2008『北東アジアのなかのアイヌ世界 アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心に2として（下）』pp.317-343に再録）  
 関根達人2007d「本州アイヌの生業・習俗と北奥社会」『北方社会史の視座』1、pp.219-251、清文堂  
 関根達人2008「北のガラス玉の道」『考古学ジャーナル』579、pp.12-15、ニューサイエンス社  
 関根達人2009「本州アイヌの狩猟と漁撈」『動物と中世』pp.155-186、高志書院  
 関根達人2012「出土資料からみたアイヌ文化の特色」『新しいアイヌ史の構築 先史編・古代編・中世編』pp.168-181、北海道大学アイヌ・先住民研究センター  
 関根達人2014a「サハリン出土の日本製品」『中近世北方交易と蝦夷地の内国化に関する研究－平成22年度～25年度科学研究費補助金基盤研究A（課題番号22242024）研究成果報告書－』pp.62-74  
 関根達人2014b「シベチャリ出土の遺物」『北海道考古学』50、pp.167-17、北海道考古学会  
 関根達人2014c「アイヌの宝物とツクナイ」『人文社会論叢（人文科学篇）32号、pp.1-26、弘前大学人文学部  
 関根達人2014d「中近世の蝦夷地と北方交易－アイヌ文化と内国化－」吉川弘文館  
 関根達人・佐藤雄生2009「出土陶磁器からみた蝦夷地の内国化」『日本考古学』28、pp.69-87、日本考古学協会  
 瀬戸哲也2007「陶磁器組成・本土産陶器からみた15～16世紀の琉球国」『南島考古』第26号  
 瀬戸哲也2009「中国・本土産陶磁器等の組成からみた16～17世紀の沖縄」『考古学からみた薩摩の侵攻400年』（沖縄考古学会創立40周年記念シンポジウム資料集）  
 瀬戸哲也他2007「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」『紀要沖縄埋文研究』5 pp.55-75  
 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志2007「沖縄における貿易陶磁器研究－14～16世紀を中心に－」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』（補遺編） 文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創生－』（研究代表者・中央大学・前川要）特定領域研究計画『中世土器・陶器の生産技術及び全国編年研究と流通様相の年代的解明』（研究代表者・静岡大学・芝垣勇夫）  
 高良倉吉1980「琉球の時代－大いなる歴史像を求めて－」『ちくまぶっくす』28 筑摩書房  
 高良倉吉編2004『琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけをめぐる総合的研究』平成13・14・15年度文部科学省科学研究費補助金（基盤B）研究成果報告書 琉球大学法文学部  
 高梨修2005『ヤコウガイの考古学』ものが語る歴史10 同成社  
 太宰府市教育委員会編2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』太宰府市教育委員会  
 知念隆博他編2006『真珠道跡－首里城真珠道地区発掘調査報告書（1）－』沖縄県立埋蔵文化財センター  
 中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
 戸崎勝洋他編1983『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』鹿児島県教育委員会  
 十島村誌編集委員会編1995『十島村誌』十島村  
 豊見山和行編2003「琉球・沖縄史の世界」『日本の時代史』18 吉川弘文館  
 長嶋俊介2009「第9章 島々と暮らし：臥蛇島」『日本一長い村トカラ－輝ける海道の島々－』pp.107-120 梓書院  
 那覇市立壺屋焼物博物館編2008『壺屋焼－近代百年のあゆみ』展図録 同館  
 那覇市立壺屋焼物博物館2011『琉球陶器の来た道』（沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館合同企画展図録）  
 浪川健治1992『近世日本と北方社会』、三省堂  
 西谷大・設楽博己・春成秀爾1995「吐噶喇列島宝島大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』60 pp.261-282  
 西谷大・設楽博己・春成秀爾1997「トカラ宝島大池遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』70 pp.219-251  
 野中哲照2012「薩摩硫黄島の境界性と『平家物語』」『鹿児島国際大学国際文化部論集』13-2 pp.212-234  
 萩谷茂行2013「統制経済下における陶磁器製品製造、流通の一考察－いわゆる「統制番号」に関する検証－」『瑞浪市歴史資料集』第2集 pp.1-82 瑞浪市陶磁資料館  
 橋口亘2001「南西諸島にもたらされた近世薩摩焼－近世薩摩焼の南と北－」『からから』10 pp.9-16  
 橋口亘2002「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器の出土様相－鹿児島県地域の近世陶磁器流通－」『鹿児島地域史研究』1 pp.3-14  
 橋口亘1998「鹿児島県坊津町泊海岸採集の陶磁器」『貿易陶磁研究』18 pp.65-69  
 橋口亘1999「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19 pp.141-146  
 橋口亘2009「近世薩摩における中国陶磁の流入－清朝磁器を中心に－」『からふね往来－日本を育てたひと・ふね・まち・こころ』pp.53-66 中国書店  
 橋口亘2014「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題－薩摩塔・宋風獅子・貿易陶磁・清水磨崖仏群・硫黄交易－」『鹿児島考古』44 pp.97-107  
 橋口亘・若松重弘2011a「鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」『南日本文化財研究』10 pp.1-5  
 橋口亘・若松重弘2011b「（続）鹿児島県三島村硫黄島採集の貿易陶磁」『南日本文化財研究』11 pp.1-5  
 橋口亘・若松重弘2013「鹿児島県三島村硫黄島採取のベトナム焼締陶器」『南日本文化財研究』17 pp.4-7  
 原口虎雄監修1982『三国名勝図会』第二巻 青潮社

東喜望2002『笹森儀助の軌跡－境界からの告発－』法政大学出版局  
 深港恭子2013「千島印のある白薩摩と商売焼についての一考察－『立野並苗代川焼物高麗人渡来在附由来記』を中心に－」  
 『からから』27 pp.25-31  
 北海道開拓記念館2001『知られざる中世の北海道－チャシと館の謎にせまる－』開館30周年記念事業第52回特別展図録  
 真栄平房昭2003「琉球貿易の構造と流通ネットワーク」(豊見山和行2003文献収録)  
 真栄平房昭2004「6章 琉球における身分制社会の成立」『県史』47(沖縄県の歴史)山川出版社  
 松浦章2013『近世東アジア海域の帆船と文化交渉』関西大学東西学術研究所叢刊44 関西大学出版部  
 松下志朗編2006『奄美史料集成』南方新社  
 松永守道1972『三島村秘史』三島村  
 三友国五郎・河口貞徳1962「宝島浜坂貝塚の調査概要」『埼玉大学紀要』11 pp.39-46  
 三島村誌編纂委員会編1990『三島村誌』三島村  
 宮城弘樹2006「グスクと集落の関係について(覚書)―今帰仁城跡を中心として―」『南島考古』第25号  
 宮城弘樹・渡辺芳郎・片桐千亜紀編2013『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進－水中文化遺産総合調査報告書・南西諸島編－』アジア水中考古学研究所他  
 宮田洋一・関明恵・三垣恵一編2003『雪山遺跡・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 村井章介1988『アジアの中の中世日本』校倉書房  
 森田勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2 pp.47-54  
 山内晋次2009『日宋貿易と「硫黄の道」』日本史リブレット75 山川出版社  
 山下恒夫編1992『石井研堂コレクション 江戸漂流記総集』第一巻 pp.205-219 日本評論社  
 山本達也2012『日本の陶器製兵器2－陶器製地雷ほか－』全日本軍装研究会  
 横山武夫1968「拾島状況録 解題」『日本庶民生活史料集成』第一巻 pp.117-118 三一書房  
 四日市康博編2008『モノから見た海域アジア史－モンゴル～宋元時代のアジアと日本の交流－』九州大学出版会  
 渡辺美季2004「近世トカラと漂流・漂着－中国・朝鮮との関わりを中心に－」高良編2004 pp.101-138  
 渡辺芳郎2000「近世薩摩焼摺鉢考」『鹿児島考古』34 pp.153-169  
 渡辺芳郎2002「鹿児島県・宮崎県における肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁－西日本の流通を探る－』pp.679-835 九州近世陶磁学会  
 渡辺芳郎2004a「元立院と龍門司－加治木・始良系陶器編年のための作業仮説－」『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』pp.118-127 始良町教育委員会  
 渡辺芳郎2004b「近世陶磁器から見た鹿児島と沖縄」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集「20年の成果と今後の課題」』pp.63-78 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会  
 渡辺芳郎2006「鹿児島県本土地域出土の近世沖縄産陶器」『陶磁器の社会史』pp.141-152 桂書房  
 渡辺芳郎2007『薩摩川内市平佐焼窯跡群の考古学的研究』鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流研究室  
 渡辺芳郎2010「鹿児島城下出土の陶磁器と薩摩焼」『季刊 考古学』110 pp. 48-51  
 渡辺芳郎2013「海浜採集資料から見た南西諸島の陶磁器流通」宮城・渡辺・片桐編2013 pp.115-121  
 渡辺芳郎2014a「鹿児島県三島村踏査報告」『鹿大史学』61 pp.15-40  
 渡辺芳郎2014b「鹿児島県三島・十島における明治中期の物資流通について－笹森儀助『拾島状況録』を中心として－」『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』80 pp. 27-39  
 渡辺芳郎2015「白薩摩の流通をめぐる資料2例」『Archaeology from the South III－本田道輝先生退職記念論文集－』本田道輝先生退職記念事業会  
 渡辺芳郎・小西美佳2013「トカラ列島平島」宮城・渡辺・片桐編2013 pp.13-15

## Summary

This research is an attempt to shed light on the role of two marginal areas of early modern Japan by comparing trade in those areas from an archaeological standpoint.

In the “REPORTS”, data was gathered about the circulation of ceramics in the Nansei Islands in the early modern period by cataloging the ceramics of an old family in Setouchi on Amami-Oshima as well as doing an archaeological survey in Mishima and Toshima which lie between Kagoshima and Ryukyu.

From the survey in Mishima and Toshima, there was no significant difference in the circulation of period ceramics from the mainland with what can be seen on the Kagoshima mainland, showing that the two island groups were dependent on the circulation areas to the north via Kagoshima. However in Toshima, since Qing porcelain was found on all of the inhabited islands surveyed, this indicates the possibility of a close connection with Okinawa, too. In addition, with reference to archives from the mid-Meiji Period (late 1800s), we are able to summarize the circulation of ceramics in Mishima and Toshima as follows:

- i. Ceramics were acquired incidentally from boats that were passing for many different reasons including official vessels.
- ii. The ceramics came from both Kagoshima in the north and Amami and Okinawa in the south. This is particularly true of Toshima.
- iii. The ceramics acquired were not only for everyday use, but also used as offerings in shrines and hokora.

The cataloging of the ceramics that had been passed down in the old family on the island of Kakeroma in Setouchi (Amami-Oshima) showed in part what ceramics were deemed necessary by such powerful families in the Nansei Islands. The survey confirmed the difference in composition and characteristics between archaeological finds, which are basically discarded items, and ceramics that are handed down the generations. Put simply, to understand the circulation of ceramics in any area, you need to look at both together.

In the “ARTICLES”, Sekine Tatsuhito’s detailed examination of the excavated state of archaeological evidence of Japanese artefacts in Ainu society points to the economic annexation of Ezochi (present-day Hokkaido) well before the political. In other words, the loss of economic independence of the Ainu was already under way due to the massive influx of Japan-made goods, ranging from tools to prestige items. As a result, in the 18th century unequal trade extremely disadvantaging to the Ainu had become the norm; and Japan had begun producing goods specifically for the Ezochi market such as lacquerware, glass beads and Ezogatana swords.

By contrast, Ikeda Yoshifumi conducted a comparative investigation of trade in early modern Ryukyu, in particular of the circulation of ceramics, from historical documents and archaeological data. From the documents, which give a detailed account of the tributary trade between Ryukyu and the Qing Dynasty, he reveals that Ryukyu at that time relied heavily on Qing products for everyday use. However, he states that the archaeological data indicates that besides Qing porcelain, they were also using for different purposes Okinawan-made pottery and mainland ceramics (Hizenware and Satsumaware) that would have entered Ryukyu through Satsuma Domain.

As mentioned before, my research in Mishima and Toshima indicates that different trade routes were bringing in different ceramics, with both island groups dependent on the Kagoshima mainland trade area for ceramics made in mainland Japan and, especially in Toshima, Qing porcelain circulating there via Okinawa

The findings thus far lead to several questions.

The first is the relationship between politics and the economy. As Sekine points out the economic annexation of Ezochi had occurred before political annexation. On the other hand, in early modern Ryukyu, the Ryukyu Kingdom was engaged in tributary trade with the Qing Dynasty where the political framework regulated economic activities. In other words, despite both being marginal areas their set-up was rather different.

Thinking about what caused this difference, one more question arises, that of the relationship between state and non-state. The Ryukyu Kingdom and Satsuma Domain, though not necessarily always on an equal basis, were able to have rules and controls for economic activities because they were acting state to state, whereas Matsumae Domain and the Ainu, acting on a state to non-state basis, frequently drifted from the political framework: the Ainu side lost the right to even draw up the rules resulting in them having to become dependent on the national Japanese economy. Having said that, when considering the political, economic and cultural relationship between the Ainu and Japan, it is important to remember that the Ainu themselves were adapting Japanese-made products and incorporating them into their cultural context.

However, the findings of this research prove that archaeological data is a valid approach in reconstructing economic activities in the form of trade when thinking about the relationship between politics and the economy, and between states and non-states. As Ikeda says, even though there are many detail records of the tributary trade between Ryukyu and the Qing Dynasty, the archaeological evidence confirms ceramics from the mainland via Satsuma and Okinawan pottery were also in circulation. The economic annexation of the Ainu can also be seen from excavated artefacts. Ceramics found in Mishima and Toshima also point towards the existence of multi-layered trade routes which is not clear from historical data.

Therefore, we can say that the key result of this research is realizing the necessity of a multi-angled approach covering historical documents and archaeological data, state and non-state, politics and economy to be able to understand the history of marginal areas of Japan.

Finally, this research has led to questions and developments for further investigation.

In early modern Japan, it is known that there were “four gateways” to foreign lands, Matsumae (Ainu) and Ryukyu (China), taken up in this research, as well as Nagasaki (Netherlands and China) and Tsushima (Korea). As the diplomatic posts of their period, these four gateways had different characters to other areas and their own individual histories. Therefore we can expect that their trade, as evidenced in their archaeological data, would have also been different to other areas. Needless to say, there is already a lot of research on the special characteristics of the individual gateways. However the similarities and differences of these diplomatic posts as marginal areas have not yet been fully looked into using cross comparisons. The necessity for this kind of research on the four gateways would also relativize the findings of this paper.

What is more, the survey of Mishima and Toshima was no more than a preliminary archaeological investigation. The distribution survey only covered the artefacts found on the surface, and the amount of archaeological data is far from plentiful. This means there is a need for formal archaeological data such as from specific sites and layers. In order to ascertain what kind of ceramics people in the Nansei Islands were using and what changes there were over time, archaeological excavation of early modern sites is needed.

The archaeological research of marginal areas in early modern Japan has only just begun and there are still many questions left to be answered. However when thinking about the “shape” of Japan at that time, it is essential for these marginal areas to be understood, to which end it is hoped that this research will be of help.

(Translated by Steve Cother)



---

平成24～26年度科学研究費補助金

(基盤研究(C))研究成果報告書(課題番号:24520860)

**近世日本国家領域境界域における  
物資流通の比較考古学的研究**

---

発行 2015年3月31日

編集 渡辺 芳郎

執筆 渡辺 芳郎・池田 榮史・関根 達人・鼎 丈太郎

刊行 鹿児島大学法文学部

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

Tel&Fax 099-285-7539

印刷 渕上印刷株式会社


〒891-0122 鹿児島市南栄3-1-6

TEL:099-268-1002 FAX:099-266-3423

---







Comparative Archaeological  
Study on Circulation in Marginal  
Areas of Early-Modern Japan

Yoshiro WATANABE

Faculty of Law, Economics  
and Humanities  
Kagoshima University, Japan  
2015 March